JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	日中同形多義動詞「上がる(Agaru)」「上(Shàng)」の認知対照研究:イメージスキーマ・ネットワークの分析
Author(s)	黄, 文蓮id;=1461
Citation	
Issue Date	2024-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/18983
Rights	
Description	Supervisor: 橋本 敬, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

修士論文

日中同形多義動詞「上がる（Agaru）」「上（Shàng）」の認知対照研究：イメージスキーマ・ネットワークの分析

HUANG, Wenlian

主指導教員 橋本　敬

北陸先端科学技術大学院大学
先端科学技術研究科
（知識科学）

令和 6 年 3 月

概要

認知言語学は、言語使用者が身体的経験を通じて世界をどのように見ているかを重視し、その見方が言語表現に表れると考える。近年、対照言語学と認知言語学の交差分野である対照認知言語学の分野で、認知言語学的アプローチを取り入れた研究が増加している。特に、語義対照研究の中で、認知言語学の一部の認知意味論はメタファー的意味拡張プロセスや語の関連性など、意味拡張ネットワークやスキーマ構築の様々な側面を語の意味を研究している。認知意味論によれば、上下のような空間的な体験は、世界の認識とメタファーを含む言語表現において重要な役割を果たすとされる（Lakoff& Johnson: 1980）。人間の経験や身体体験に関わる単純なパターンのイメージスキーマは、メタファーの経験的基盤となる可能性がある（鍋島 2002: 79）。したがって、言語レベルの意味拡張ネットワークの分析に加えて、イメージスキーマ構築のような深いレベルの認知モードを反映するイメージスキーマ・ネットワークの探求は、異なる母語話者の認知の差を探求することに有効である。

本研究では、日中同形多義語「上がる」「上（Shàng）」を対象とし、日中母語話者の認知の違い及びこの違いを説明できる要因を明らかにすることを目的としている。本研究では、言語レベルの意味拡張ネットワークの分析だけでなく、イメージスキーマ構築のような深いレベルの認知モードを反映するイメージスキーマ・ネットワークの比較に焦点を当てる。具体的には、日本語と中国語の同形多義動詞「上がる」と「上（Shàng）」を事例として選び、これらの意味カテゴリー、イメージスキーマ、そしてそれらの拡張関係を包括的に分析する。イメージスキーマ・ネットワークの比較とその差の要因の考察を通じて、日中言語話者の認知・視点の違いを説明することが可能となるだろう。

本研究と同じく認知言語学の立場で日中対照研究を行う先行研究については主に意味拡張ネットワークの比較（左 2007;呂 2009 など）に留まっていた。そして、日中同形多義語「上」に関する先行研究をまとめた結果、以下の 3 点の問題点が明らかになった。①中国語の「上」は自動詞と他動詞で使用できるが、先行研究では中国語の「上」の品詞毎に分類せず、直接日本語の自動詞「上がる」と比較する傾向にある。②日本語の「上がる」「下がる」と中国語の「上」「下」の分類方法は基本的に辞書の例文を参考にして分析されているため、どの程度人間の生活と経験を反映しているかは疑問が残る。③これまでの日中対照言語学の研究は言語レベルでの意味拡張ネットワークを中心に分析し、日中の母語話者の認知的要因については考察が不足していた。

以上の研究背景と先行研究の不足に踏まえて、本研究は以下のリサーチ・クエスチョン設けた。

1. 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークにはどのような違いがあるのか。

1-1 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」の意味カテゴリーはどのように分類されるか。

1-2. 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」の各意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）はどのようなものか。

1-3. 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のそれぞれの意味カテゴリーのイメージスキーマはどのような特徴を持つのか。

1-4. 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークはどのようになっているのか。

2.日中イメージスキーマ・ネットワークの違いの要因となる日中母語話者の事態把握の違いはどのようなものか。

本研究の方法として、まず日本語、中国語それぞれコーパスから「上がる」「上（Shàng）」の例文を抽出し、日中辞書の意味カテゴリーを参考にしつつ「上がる」「上（Shàng）」の意味カテゴリーを独自に分類した。続いて、「上がる」「上（Shàng）」の各意味カテゴリーの拡張義の拡張プロセスについて、現象素を持ちいて分析し、最後に、これらのイメージスキーマを分析してイメージスキーマ・ネットワークを描き比較した。具体的な手順は以下のように 9 つのステップで行う。

1. 例文の用意
2. 意味カテゴリーの分類
3. 現象素を用いた各意味カテゴリーの意味の詳しい分析
4. 現象素の比較による意味拡張の分析
5. 意味ネットワークの作成と比較
6. 各意味カテゴリーのイメージスキーマの作成
7. スキーマティック・ネットワークモデルの分析
8. 日中イメージスキーマ・ネットワークの作成と比較
9. イメージスキーマ・ネットワークの差の要因となる日中母語話者の認知の差の分析

以上の手順で分析を行った結果、RQ1.1 に対して、「上がる」の意味カテゴリーは「上に移動する」、「水の中から陸に移動する」、「目上の人の所に行く」、「部屋などに入る」、「数値が大きくなる」、「価値が高い状態になる」、「気持ちが高まる」、「緊張する」、「続いていた状態が終わる」、「（物理・抽象な）声が出現する」という 10 種類が分類出来る。「上（Shàng）」の意味カテゴリーは「上に移動する」、「トイレに行く」、「交通機関に乗る」、「ある数量，程度に達する」、「困難に対処する」、「規定の時間に経常的な活動をする」、「人前の空間に出」、「記事やリストに載る」という 8 種類が分類できることを明らかにした。

RQ1.2 に対して、日本語の「上がる」が生じたそれぞれの意味カテゴリーの拡張プロセスの数について、日本語の「上がる」は 5 つのメタファー的拡張をして、メトニミー的拡張は 3 つである。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは 1 つがある。中国語の「上（Shàng）」が生じたそれぞれの意味カテゴリーの拡張プロセスの数について、中国語の「上（Shàng）」は 4 つのメタファー的拡張をして、メトニミー的拡張は 2 つである。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは 1 つがある。メタファーやメタファー的拡張の数からみると、日本語の「上が

る」は中国語の「上（Shàng）」よりどちらの方も多い。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは同じく１つがある。

RQ1.3 に対して、「上がる」と「上（Shàng）」の各々イメージスキーマ・ネットワークは同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「上がる」の「物理空間」イメージスキーマの中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「値的空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。「上（Shàng）」の各々イメージスキーマ・ネットワークの結果から、「上（Shàng）」のスキーマは「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「物理空間」の中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「媒体につける空間」、「困難がない空間」、「公的空間」が考えられる。

RQ1.4 に対して、「上がる」「上（Shàng）」イメージスキーマ・ネットワークを比較した結果、日中の拡張義のイメージスキーマには同じ点と異なる点があることが分かった。同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」のイメージスキーマがある。例えば、「部屋などに入る」「交通機関に乗る」という意味カテゴリー実は同じく物理空間の移動が見られて、イメージスキーマは同じである。異なる部分として、「上がる」は「気分的空間」のイメージスキーマが特徴的であり、「上（Shàng）」は「公的空間」のイメージスキーマが特徴的であることが分かった。

RQ1 に対する結果を見ると、日本語の「上がる（Agaru）」は「気分的空間」のイメジスキーマが特徴的であり、中国語の「上（Shàng）」は「公的空間」のイメジスキーマが特徴的であることを分かった。RQ2 に対して、この日本語で特徴的なことについて、日本語母語話者は自分が環境に融合して、自身の感情的な気分を重視するような主観的視点で物事を捉える傾向があることが考えられる。これは認知言語学における「主観的実態把握 (Subjective Construal)」に当てはまるではないかと考える。その一方、中国語母語話者は「公的な状態に出る」のような客観的な視点（第三者視点のようなもの）、認知言語学における「客観的実態把握 (Objective Construal)」で物事を捉える傾向があり、日本語母語話者より比較的客観的な視点で捉える傾向があることが考えられる。これは応用言語学における日中翻訳の対照研究（徐 2011; 鄔 2018）が示した特徴、すなわち、日本語母語話者は「主観的事態把握 (Subjective Construal)」を好む傾向があり、中国語母語話者は「客観的把握 (Objective Construal)」を好む傾向がある、という知見と一致している。本研究は言語の裏にある認知に関するこのような新たな知識を生み出し、それに加えて、言語学の側面から異なる母語話者の認知を比較する方法論、つまり二つの言語の話者の裏にある認知の違いを考察するための体系的な方法を提案したという貢献がある。

目次

1 序論 1
1.1 研究背景 1
1.1.1 学術的背景 2
1.1.2 社会的背景 3
1.2 研究目的 4
1.3 研究方法 4
1.4 研究意義 5
1.4.1 学術的意義 5
1.4.2 社会的意義 5
1.5 本論文の構成 6
2 理論的基盤と先行研究 7
2.1 認知意味論（Cognitive Semantics） 7
2.1.1 カテゴリー（Category）とプロトタイプ（Prototype） 7
2.1.2 概念メタファー（Conceptual Metaphor） 8
2.1.3 イメージスキーマ（Image Schema） 10
2.1.4 スキーマティック・ネットワークモデル（Schematic Network Model） 10
2.1.5 トラジェクター（Trajector）とランドマーク （Landmark） 11
2.2 認知言語学における視点 12
2.2.1 視点構図（最適・自己中心的視点配列） 12
2.2.2 認知モード（I モード・D モード） 13
2.2.3 事態把握（主観・客観的把握） 14
2.3 応用言語学における視点 15
2.3.1 神の視点・虫の視点 15
2.3.3 翻訳における日中対照研究の視点 15
2.4 本研究における視点 16
2.5 多義語についての日中対照研究 17
2.5.1 対照言語学分野 17
2.5.2 対照認知言語学分野 18
2.6 日中多義語「上」について 19

2.6.1 対照言語学分野 19
2.6.2 認知言語学分野 20
2.6.3 認知対照言語学分野 21
2.7 まとめ 22
3 研究方法 24
3.1 本研究で用いる方法とその流れ 24
3.2 本研究が扱う日中同形多義語の準備 25
3.2.1 例文データベース 25
3.2.2 参照した辞書 25
3.3 プロトタイプの認定方法 26
3.4 現象素の分析方法 27
3.5 イメージスキーマの作成方法 28
4 日本語「上がる」の分析 29
4.1 意味カテゴリーの分類 29
4.2 各意味カテゴリーの分析 31
4.2.1「上に移動する」の分析 31
4.2.2「水の中から陸に移動する」の分析 32
4.2.3「目上の人の所に行く」の分析 33
4.2.4「部屋などに入る」の分析 34
4.2.5「数値が大きくなる」の分析 35
4.2.6「価値が高い状態になる」の分析 36
4.2.7 「気持ちが高まる」の分析 38
4.2.8「緊張する」の分析 39
4.2.9「続いていた状態が終わる」の分析 40
4.2.10「（物理・抽象な）声が出現する」の分析 41
4.3「上がる」意味拡張ネットワークの分析 42
5 中国語「上（Shàng）」の分析 44
5.1 意味カテゴリーの分類 44
5.2 各意味カテゴリーの分析 47
5.2.1「上に移動する」の分析 47
5.2.2「トイレに行く」の分析 48
5.2.3「交通機関に乗る」の分析 49

5.2.4「ある数量，程度に達する」の分析 51
5.2.5「困難に対処する」の分析 52
5.2.6「規定の時間に経常的な活動をする」の分析 53
5.2.7「人前の空間に出る」の分析 54
5.2.8「記事やリストに載る」の分析 55
5.3「上（shàng）」意味拡張ネットワークの分析 57
6「上がる」と「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの比較 59
6.1 スキーマティック・ネットワークモデル 59
6.1.1 「上がる」のネットワークモデル 59
6.1.2 「上（Shàng）」のネットワークモデル 63
6.2 イメージスキーマ・ネットワーク 67
6.2.1「上がる」の個々イメージスキーマ・ネットワーク 67
6.2.2 「上（Shàng）」の個々イメージスキーマ・ネットワーク 73
6.2.3「上がる」と「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワーク 77
6.3 まとめ 81
7 考察 82
7.1 意味拡張プロセスに対する考察 82
7.2 意味拡張ネットワークに対する考察 83
7.3 イメージスキーマ・ネットワークに対する考察 83
7.4 全体的な考察 84
8 結論と展望 85
8.1 結論 85
8.2 展望 87
謝辞 89
参考文献 90
コーパス資料 93
辞書 94

図目次

図 1：日本語教師等の養成・研修実施機関・施設等数/教師等の数/受講者数の推移.....3
図 2：スキーマティック・ネットワークモデル（Langacker 1988：140）.....11
図 3：最適（左）・自己中心的視点配列（右）（Langacker 1990: 7）.....13
図 4：I モード（中村 2004：36-37）.....14
図 5：D モード（中村 2004：36-37）.....14
図 6：TR と LM の関係のイメージスキーマ（Langacker 1988: 11）.....28
図 7：「上に移動する」のイメージスキーマ.....32
図 8：「水の中から陸に移動する」のイメージスキーマ.....33
図 9：「水の中から陸に移動する」の意味拡張プロセス.....33
図 10：「目上の人の所に行く」のイメージスキーマ.....34
図 11：「目上の人の所に行く」の意味拡張プロセス.....34
図 12：「部屋などに入る」のイメージスキーマ.....35
図 13：「部屋などに入る」の意味拡張プロセス.....35
図 14：「数値が大きくなる」のイメージスキーマ.....36
図 15：「価値が高い状態になる」のイメージスキーマ.....37
図 16：「数値が大きくなる」、「価値が高い状態になる」 の意味拡張プロセス.....38
図 17：「気持ちが高まる」のイメージスキーマ.....38
図 18：「緊張する」のイメージスキーマ.....39
図 19：「気持ちが高まる」、「緊張する」の意味拡張プロセス.....40
図 20：「続いていた状態が終わる」のイメージスキーマ.....40
図 21：「（物理・抽象な）声が出現する」のイメージスキーマ.....41
図 22：「続いていた状態が終わる」、「（物理・抽象な）声が出現する」 の意味拡張プロセス.....42
図 23：「上がる」の意味ネットワーク.....43
図 24：「上に移動する」のイメージスキーマ.....48
図 25：「トイレに行く」のイメージスキーマ.....49
図 26：「トイレに行く」の意味拡張プロセス.....49
図 27：「交通機関に乗る」のイメージスキーマ.....50
図 28：「交通機関に乗る」の意味拡張プロセス.....51
図 29：「ある数量，程度に達する」のイメージスキーマ.....51
図 30：「ある数量，程度に達する」の意味拡張プロセス.....52
図 31：「困難に対処する」のイメージスキーマ.....53
図 32：「困難に対処する」の意味拡張プロセス.....53
図 33：「規定の時間に経常的な活動をする」のイメージスキーマ.....54
図 34：「人前の空間に出る」のイメージスキーマ.....55
図 35：「規定の時間に経常的な活動をする」 の意味拡張プロセス.....55
図 36：「記事やリストに載る」のイメージスキーマ.....56
図 37：「記事やリストに載る」の意味拡張プロセス.....57

図 38：「上（Shàng）」の意味ネットワーク.....58
図 39：「水の中から陸に移動する」のネットワークモデル.....59
図 40：「目上の人の所に行く」のネットワークモデル.....60
図 41：「部屋などに入る」のネットワークモデル.....60
図 42：「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」 のネットワークモデル.....61
図 43：「気持ちが高まる・緊張する」のネットワークモデル.....62
図 44：「続いていた状態が終わる・（抽象な）声が出現する」 のネットワークモデル.....63
図 45：「トイレに行く」のネットワークモデル.....63
図 46：「交通機関に乗る」のネットワークモデル.....64
図 47：「ある数量，程度に達する」のネットワークモデル.....64
図 48：「困難に対処する」のネットワークモデル.....65
図 49：「規定の時間に経常的な活動をする」 のネットワークモデル.....66
図 50：「記事やリストに載る」のネットワークモデル.....66
図 51：「水の中から陸に移動する」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....67
図 52：「目上の人の所に行く」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....68
図 53：「部屋などに入る」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....69
図 54：「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....70
図 55：「気持ちが高まる・緊張する」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....71
図 56：「続いていた状態が終わる・（抽象な）声が出現する」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....72
図 57：「トイレに行く」のイメージスキーマ・ネットワーク.....73
図 58：「交通機関に乗る」のイメージスキーマ・ネットワーク.....74
図 59：「ある数量，程度に達する」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....74
図 60：「困難に対処する」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....75
図 61：「規定の時間に経常的な活動をする・人前の空間に出る」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....76
図 62：「記事やリストに載る」 のイメージスキーマ・ネットワーク.....77
図 63：「上がる」のイメージスキーマ・ネットワーク.....78
図 64：「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワーク.....80

1 序論

本研究は、日中同形多義動詞「上がる（Agaru）」「上（Shàng）」を取り上げ、認知言語学の理論に基づき、日本語と中国語の母語話者の認知と視点を明らかにすることを目的としている。本章では、まず研究の理論的基盤を紹介し、研究の位置づけを述べる。また、先行研究の問題点を整理し、本研究の新規性について論じる。続いて、研究目的、研究方法、そして研究の学術的および社会的意義、本研究の全体構成を詳述する。

1.1 研究背景

異なる言語話者の背後には認知的な異同があるはずであり、認知言語学は言語現象の背後の認知に迫るものである。特に認知言語学における認知意味論の領域では、言葉の意味がプロトタイプから派生し拡張されると考えられており、意味カテゴリー間の関連性を意味のネットワークとして捉えることが重視されている。

認知意味論は、言語現象の背後にある認知的な基盤を明らかにすることを目的としている。動詞の多義性は言語習得において顕著な障壁の一つであり、認知意味論を用いることで、これらの語義の拡張を動機づける要因を体系的に理解することが可能となる（森山 2016: 151）。

対照言語学（Contrastive Linguistics）は、「二つ以上の言語を比べようとする研究分野である」（高田 2003: 9）。対照言語学は、個々の事実を重ね合わせて言語全体を理解しようとする具体的なアプローチであり、言語理論を実践的に応用する立場に立っている（高田 2000: 11）。よって、対照言語学は言語現象を比較・検討することで、異なる言語背景を持つ学習者が直面する困難を明らかにすることが求められていることが考えられる。

Lakoff & Johnson（1980）の研究によれば、身体的・文化的経験は空間関係を基にしたメタファーの根底にあり、その基盤がどのように選ばれるかは、文化によって異なるとされる。日本と中国の文化の違いは、上下に対する認知の基盤にも影響を及ぼしており、多義語「上」の意味拡張における認知な差異が明らかになる可能性がある。

本研究は、認知言語学のメタファー理論を基に、この方向性のメタファーがどのように異なる文化的背景に根ざしているかを明らかにし、多義語「上」の意味拡張における日中の認知の違いを解明することを目指す。空間表現における上下は、人間の認知において非常に基本的な要素である。認知言語学において、上下のメタファーは方向性を示すメタファーとして重要な役割を担っている（Lakoff & Johnson 1980）。「上」に焦点を当てる理由としては、人間の主要な感覚器官が体の上部に位置しているため、空間の上部が認識されやすいことが挙げられる（蒋 2014）。

1.1.1 学術的背景

多義語「上」について、対照言語学分野や認知言語学分野からの先行研究が存在する。例えば、対照言語学分野では、陳・王（2011）、王（2014）などの研究がある。これらの先行研究は、文法や語の構造の側面に焦点を当てて、日中の同形多義語「上」を比較している。認知言語学分野では、「上下」メタファーを中心に、中国語の「上（Shàng）」と日本語の「上」を別々に考察した先行研究は少なくない。例えば、中国語の「上（Shàng）」を認知言語学の視点から分析した研究には苗（2012）、蒋（2014）、譚（2017）、徐（2021）などが挙げられる。これらの研究は、中国語の「上（Shàng）」、「下（Xià）」の意味カテゴリーを分類し、「上（Shàng）」、「下（Xià）」のカテゴリー数の不対称性を明らかにしている。認知言語学分野で日本語の「上」を取り上げ、分析した先行研究には鐘・井上（2013）、森山（2016）、森山（2018）などがある。これらの研究は、「上がる」の意味カテゴリーを認知言語学の上下メタファーに基づいて分類している。特に、森山（2018）は「上がる」だけでなく、日本語の「下がる」についても考察し、その結果、日本語の「上がる」や「下がる」のカテゴリーの数が不対称であることを明らかにした。

認知言語学における日中比較研究もある。左（2007）では、上下メタファー理論を用いて、日中の「上下」に関する概念を対象にした。中国語で「上班（Shàng Bān）」という表現は職場に行き、仕事を始めるという公的な状態に移動することを指し、これに相当する日本語の表現はあまりないということが示された。ただし、左（2007）が分析した例文は辞書からのものに限られており、辞書からの作例がどれほど人間の実生活を反映できるかは疑問が残る。さらに、日中上下メタファーの比較を言っても、実際には Lakoff & Johnson（1980）が提唱した上下メタファーの種類に合わせて、日中の例文を挙げるレベルで、日中の母語話者の認知的な差については検討されていないことが分かった。認知言語学における日中比較研究のイメージスキーマに関する研究には、呂（2009）がある。呂（2009）は辞書から分類したカテゴリーを参照して、中国語の「上」「下」と日本語の動詞「上がる」「下がる」を比較し、「上」「下」と「上がる」「下がる」それぞれの意味拡張ネットワークを明らかにした。しかし、日中の上下の違いが出る要因については、主に民族文化や風土の違い、日本語の助詞や中国語の語順の特徴から説明しており、認知的な要因からの説明は行われていない。

先行研究をまとめた結果、以下の 3 点の問題点が明らかになった。

①中国語の「上」は自動詞と他動詞で使用できるが、先行研究では中国語の「上」の品詞毎に分類せず、直接日本語の自動詞「上がる」と比較する傾向にある。

②日本語の「上がる」「下がる」と中国語の「上」「下」の分類方法は基本的に辞書の例文を参考にして分析されているため、どの程度人間の生活と経験を反映しているかは疑問が残る。

③これまでの日中対照言語学の研究は言語レベルでの意味拡張ネットワークを中心に分析し、日中の母語話者の認知的要因については考察が不足していた。

本研究は先行研究の不足に踏まえ、日中同形多義動詞の自動詞「上がる（Agaru）」「上（Shàng）」を例に挙げ、人間の日常生活言葉に近いコーパスから実例を分析する。イメージスキーマ・ネットワークの分析を通じて、日中母語話者の認知的差を体系的に明らかにすることを目指している。イメージスキーマ・ネットワークとは、意味カテゴリーを反映する各個別のイメージスキーマ間の関係性を図示化したものであり、意味拡張の背後にある認知過程を包括的に理解するためには、その差異まで分析する必要がある。本研究の新規性は日中母語話者のイメージスキーマ・ネットワークの相違点を体系的に明らかにして、日中母語話者の認知の違いを説明できる要因を明らかにするところである。

1.1.2 社会的背景

『令和 3 年度日本語教育実態調査書』(2019)によると、日本国内の日本語教師育成や研修プログラムは、教育機関数 675、教師数 4810 人、受講生数 30591 人に及ぶと報告されている。下記の図 1 が示したように、平成 2 年度からの推移を見ると、日本語教育実施機関・施設等数は 821 から 2541（3.1 倍）に、日本語教師等の数は、8329 人から 39241 人（4.7 倍）に、日本語学習者数は 60601 人から 123408 人（2.0 倍）にそれぞれ増加している。この数値は年々増加傾向にあり、日本語教育の需要の高まりを示している。

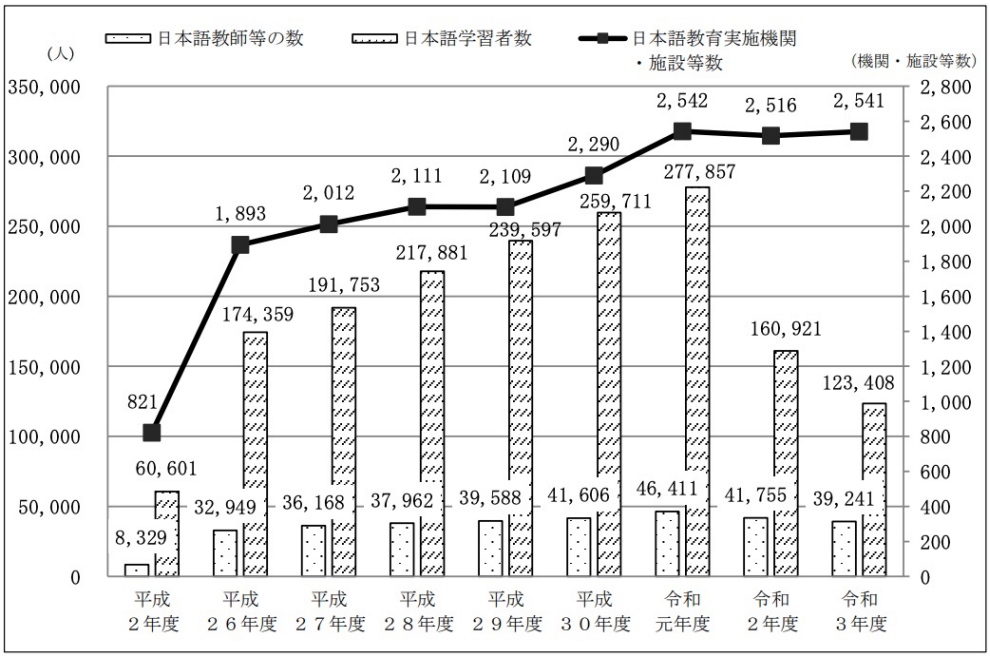

図 1：日本語教師等の養成・研修実施機関・施設等数/教師等の数/受講者数の推移

（出典：第 113 回日本語教育小委員会（R4.8.22）【 資 料 5 】 文化庁 令和 3 年度日本語教育実態調査国内の日本語教育の概要, p5）

日本語学習者は事例を単に暗記するのではなく、日本語と母語との認知的差異を理解することにより、多義語の拡張義を体系的に把握できるようにな

る。認知言語学の視点を取り入れること、学習者にとって理解しやすい指導法を提案し、実践的な言語使用に直結する教育法の開発に貢献すると期待できると考えられる。

1.2 研究目的

本研究は日中母語話者の認知の違い及びこの違いを説明できる要因を明らかにすることを目的としている。本研究では、Lakoff & JohnSon による概念メタファー理論と Langacker のイメージスキーマ理論を組み合わせて用いる。具体的には、日本語と中国語の同形多義動詞「上がる」と「上（Shàng）」を事例として選び、これらの意味カテゴリー、イメージスキーマ、そしてそれらの拡張関係を包括的に分析する。これにより、日本語と中国語を母語とする話者間の認知の違いを、イメージスキーマ・ネットワークの比較を通じて、イメージスキーマ・ネットワークの差の要因となる日中母語話者の認知の差の要因を明らかにする。また、イメージスキーマ・ネットワークの違いは事態把握の違いで説明できるという仮説を提案する。本研究の仮説は「日本語母語話者は主観的把握を好む;中国語母語話者は客観的把握を好む」に設定する。本研究のリサーチ・クエスチョンは以下の通りである。

1. 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークにはどのような違いがあるのか。
   - 1.1 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」の意味カテゴリーはどのように分類されるか。
   - 1.2 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」の各意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）はどのようなものか。
   - 1.3 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のそれぞれの意味カテゴリーのイメージスキーマはどのような特徴を持つのか。
   - 1.4 日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークはどのようになっているのか。
2. 日中イメージスキーマ・ネットワークの違いの要因となる日中母語話者の事態把握の違いはどのようなものか

1.3 研究方法

本研究では、認知意味論の Lakoff & Johnson による概念メタファー理論と Langacker のイメージスキーマ理論を理論ベースにする。意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）の分析について、本研究が採用した認知意味論におけるメタファーやメトニミーの定義より分析する。イメージスキーマ及びイメージスキーマ・ネットワークの分析も同じく認知意味論におけるイメージスキーマの定義により分析する。日本語と中国語の同形多義動詞「上がる」と「上（Shàng）」を事例に、これらの意味拡張ネットワーク、イメージスキーマ・ネットワークを包括的に分析する。これにより、日本語と中国語

を母語とする話者間の認知の違いや日中母語話者の認知の差の要因を明らかにする。

研究方法として、1.2 節の研究のリサーチ・クエスチョンによれば、まずは日中それぞれのコーパスから例文を抽出する。その次に、日中の辞書を利用して、「上がる」「上（Shàng）」の意味カテゴリーを分類する。「上がる」「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの相違点の解明について、まずは「上がる」「上（Shàng）」の各意味カテゴリーの意味拡張プロセス（メタファー，メトニミー）を例文の分析により検討する。次は「上がる」「上（Shàng）」の各意味カテゴリーのイメージスキーマを描く。最後は「上がる」「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークを構築して日中母語話者の認知の差を解明する。具体的な方法は 3 章で述べる。

1.4 研究意義

本研究は、日本語と中国語の同形多義語「上がる（Agaru）」「上（Shàng）」を中心に、認知言語学の枠組みを用いて、それぞれの言語を母語とする話者の認知と視点の違いを明らかにすることを目指している。この研究の特徴は、「上」のような日中同形異義動詞に関するイメージスキーマを具体的に検証し、それを基に日本語と中国語の話者の認知の差異を探ることである。この節では、研究の学術的な価値について説明し、その社会的な重要性についても述べる。

1.4.1 学術的意義

学術の意義としては、先行研究の不足を補うために、具体的には 3 点の学術的意義をまとめることができる。

1. 「上（Shàng）」という中国語の動詞は自動詞および他動詞の両方として機能するが、これまでの研究はその品詞を区別せずに、直接に日本語の自動詞「上がる」に対比して分析することが多い。本研究は日本語の自動詞「上がる（Agaru）」と中国語の自動詞「上（Shàng）」を対象に、先行研究の品詞を混ぜる比較よりは正確に品詞に対応して比較する。
2. 本研究はコーパスに基づいて実生活例文を抽出して分析し、先行研究の辞書の作例よりも、ある程度人間の生活と経験を反映できる。
3. これまでの研究は言語レベルでの意味拡張ネットワークを中心に分析し、日中の母語話者の認知的要因については考察が不足していたが、本研究は日中の母語話者のイメージスキーマ・ネットワークを比較して、日中の母語話者の認知的要因を体系的に考察できる。

1.4.2 社会的意義

社会的意義としては、両言語の学習者にとって、個々の例を単独で学ぶよりも、日中の認知の違いに基づいた多義語の全般的な理解を深めることにより、多義語の拡張羲を深いレベルでより良く把握することが期待できる。本研究は「上がる」という多義語に焦点を当て、認知言語学的アプローチを用いて、日中の母語話者の認知の違いに基づいた多義語の理解を深めることを目指している。この方法は、従来の暗記中心の学習から脱却し、学習方法の

基盤を与えて、言語学習者に体系的多義語の学習を促進することが考えられる。

1.5 本論文の構成

本節では、本論文の構成について紹介する。

第 2 章「理論的基盤と先行研究」では、認知意味論と認知言語学の基本的な概念を紹介し、それに関連する先行研究をレビューする。この章では、カテゴリー、プロトタイプ、概念メタファー、イメージスキーマ、そしてスキーマティック・ネットワークモデルなどの理論的枠組みを詳しく説明し、これらが本研究の分析にどのように応用されるかを示す。また、認知モードや視点の構図についても議論し、日中対照研究の実態把握についても触れる。

第 3 章「研究方法」では、意味カテゴリーの分類、プロトタイプの認定、現象素の分析、イメージスキーマの作成に用いる手法を明示する。本研究におけるデータベース、参照辞書、分析手順について具体的に述べ、研究の透明性を確保する。

第 4 章「日本語「上がる」の分析」は、日本語「上がる」具体的な意味分析を行う章である。様々な意味義を例文と共に説明し、「上がる」の意味のネットワークを構築する。具体的には拡張プロセス、意味拡張ネットワークに関する深い分析を行う。

第 5 章「中国語「上（Shàng)」の分析」は、中国語「上（Shàng)」の具体的な意味分析を行う章である。様々な意味義を例文と共に説明し、「上（Shàng)」の意味のネットワークを構築する。具体的には拡張プロセス、意味拡張ネットワークに関する深い分析を行う。

第 6 章「「上がる」と「上（Shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークの比較」では、第 4、5 章で得られた結果を基に、スキーマティック・ネットワークモデルを提示する。また、イメージスキーマ・ネットワークを用いて、日本語と中国語の「上」に関する意味の違いから認知の違いまでさらに深く探究する。

第 7 章「考察」では、第 6 章で得られた結果を基に、日中の多義語「上」のイメージスキーマ・ネットワークの比較が何によって生じるのか、その背後にある認知的原因を探る。

最終章である第 8 章「結論と展望」では、研究の結論をまとめ、認知言語学と対照言語学の視点から得られた認識に基づいて、今後の研究方向と展望を示す。

2 理論的基盤と先行研究

第 1 章では、本研究の学術的な背景と社会的背景を明らかにし、なぜこの研究が必要かを説明している。まずは先行研究の問題点を整理し、指摘している。続いて、本研究の目的や方法論について述べている。さらに、本研究の学術的な意義と社会的な意義についても触れている。最後には、本研究の構成を紹介している。この章では、本研究の理論的な土台と主要な概念を紹介し、本研究の位置づけを明らかにする。また、先行研究の問題点を整理し、本研究と先行研究の差分について論じている。

2.1 認知意味論（Cognitive Semantics）

認知言語学（Cognitive Linguistics）とは思考と言語を結びつけて考える学問である（鍋島 2020: 19）。認知言語学の研究では、言語使用者の身体的な経験を重視し、身体的経験から世界の見方が言語表現に表れると考える。つまり、人間が持つ一般的な認知能力（身体経験からの物事に対する感覚、認識能力など）は言語に反映されると考えられる。言語学において、語の意味に関する研究は様々な分野がある。例えば統語論（Syntax）、形態論（Morphology）は言語の構造や形式と意味の関係を中心にしている。より近年になって登場した比較的新しい分野である認知意味論（Cognitive Semantics）は、従来の意味と形式の関係に焦点を当てる分野と異なり、意味の問題を知覚や認識との関連で捉える（松本 2003: 3）。本研究は認知意味論の立場で、日中多義語の「上がる・「上（shàng）」を分析していきたい。これからは認知意味論の中で本研究と関連する諸概念を紹介する。

2.1.1 カテゴリー（Category）とプロトタイプ（Prototype）

認知言語学の分野で、カテゴリーとプロトタイプは基本的な概念である。大堀（2002: 1）によれば、カテゴリーとはヒトが受け取った情報をもとに、出来事を認知し行動する際に有意味なまとまりを作り出す能力によって生じるものである。例として「鳥」というカテゴリーを挙げることができる。このカテゴリーには、スズメ、カラス、ハトなど、様々な種類の鳥が含まれるが、これらは全て飛べる、羽がある、卵を産むなどの共通の特徴を持っているため、一つのグループとして認識される。

ここで注意しなければならないのは、認知言語学におけるカテゴリー論は古典的カテゴリー論と異なり、カテゴリーには明確で厳格な境界がないということである。つまり、古典的カテゴリー論では、カテゴリーは明確な定義と境界を有するとされ、対象がそのカテゴリーに属するか否かは、定義された属性の有無によって厳格に判断される。これに対し、認知言語学におけるカテゴリーは、経験に基づき、より柔軟性に富んだものとして捉えられる。

松本（2003：30）によると、プロトタイプ意味論（典型意味論）では、語義を決定する際に「プロトタイプ（Prototype）」という概念が中心的な役割を果たす。辻（2002：224）によれば、プロトタイプとは、特定のカテゴリーを代表する典型的な事例であり、心理的な処理過程において、瞬時に思い出され、長期間安定して記憶される特徴を持つ。また、多くの人が一致して認識

でき、幼少期から親しんでいるものである。つまりプロトタイプ理論では、カテゴリーの境界は曖昧で、中心（プロトタイプ）から漸次的に離れるにつれてカテゴリーへの属性が弱くなる。プロトタイプは、あるカテゴリーにおいて最も「典型的」な例を指し、そのカテゴリーの最も中心的なメンバーである。例えば、「鳥」というカテゴリーにおける「スズメ」は多くの人にとってプロトタイプ的な例であるが、「ペンギン」や「ダチョウ」はプロトタイプから外れるものとして認識される。このように、プロトタイプ理論は、カテゴリーの境界が曖昧であり、文化や個人の経験によってプロトタイプの認識が異なり得ると考えられる。

2.1.2 概念メタファー（Conceptual Metaphor）

認知言語学における概念メタファー理論は、Lakoff & Johnson によって提唱され、特に彼らの共著『Metaphors We Live By』において詳細に述べられている。Lakoff & Johnson（1980: 3）によれば、概念メタファーは言語の表面的な特徴にとどまらず、人間のあらゆる思考や行動の基盤である。彼らは「メタファーの本質とは、ある事柄を別の事柄を通じて理解し、経験することである」と述べている（Lakoff & Johnson（1980: 3；渡部ら 2007 訳）。例えば、「議論は戦争である（ARGUMENT IS WAR）」というメタファーは、議論という抽象的な行為を、戦争という具体的な活動を通じて理解し、表現する。このメタファーによれば、「主張が防御不可能である」、「彼は私の議論のすべての弱点を攻撃した」、「彼の批判は的を射ていた」、「私は彼の議論を粉砕した」、「私は彼との議論に一度も勝ったことがない」といった表現は、文字通りには戦闘行為を指しているように見えるが、実際には議論の様相を描写するために使用されている。これらの表現は、議論の各フェーズが戦闘の各段階に対応していることを示唆している。このメタファーによる表現は、議論の参加者が相手を打ち負かすことを目的としており、言葉の選択や構成が攻撃的で競争的な戦略に基づいていることを反映している。このように、概念メタファーは、抽象的な活動の理解やその言語による表現のための基盤となっており、ものごとの理解全般に効いている。

概念メタファーの中には方向づけのメタファーがある。Lakoff &Johnson（1980: 14）によれば、方向づけのメタファーは、上―下、内―外、前―後、着―離、深―浅、中心―周辺といった空間の方向性に関係があり、ある概念に空間的方向性を与える。本研究では、日本語と中国語の「上」に焦点を当て、方向づけのメタファーの中でも「上下メタファー」について詳しく分析し、説明を進めていく。

Lakoff & Johnson（1980: 14）によれば、上下メタファーには 10 種類が存在する。これから具体的な例を挙げて説明を行っていく。

1. 「嬉しいことは上である・悲しいことは下である（HAPPY IS UP; SAD IS DOWN）」気分が良いときに「気分が高揚している（I am feeling up.）」と言い、悲しいときに「気分が沈んでいる（I am feeling down.）」と表現する。このメタファーは、感情の状態を空間的な上下に位置づけることで、感情の変化を理解しやすくしている。
2. 意識の状態を表す「意識があるのは上である・意識がないのは下である（CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN）」起きて活動している状

態を「起きる（Get up.）」と言い、眠って意識がない状態を「眠り込む（He dropped off to sleep.）」という。これは、意識の有無を上下の動きと関連付けて表す。

3. 健康と生命の状態を示す「健康と生命は上、病気と死は下（HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN）」健康の良好な状態を「健康の頂点にいる（He's at the peak of health.）」と表し、健康が悪化することを「健康が衰える（His health is declining.）」という。これにより、健康の状態を上下の位置で捉える。
4. 「支配力があるのは上、支配されるのは下（HAVING CONTROL or FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL or FORCE IS DOWN）」力を持っている状態を「彼女を支配している（I have control over her.）」と言い、力を失った状態を「権力から転落する（He fell from power.）」と表現する。このメタファーは、権力の有無を上下の変化で示す。数量の多寡を表す。
5. 「量が多いことは上、少ないことは下（MORE IS UP; LESS IS DOWN）量が増えることを「収入が上がる（My income rose last year.）」と言い、量が減ることを「収入が下がる（His income fell last year.）」と表現する。このように、数量の増減を空間的な上下で理解する。
6. 「未来が上である（FORESEEABLE FUTURE EVENTS ARE UP; AHEAD）」未来の出来事や期待されるイベントを「上にある」と表現することで、時間の進行や将来性を空間的な上下で理解する。例えば、「What's up?（何か予定はある？）」や「I'm looking up to the weekend（週末が楽しみだ）」のように、これから起こるポジティブな出来事を上方向にあると捉える。
7. 社会的地位の高低を示す「高い地位は上、低い地位は下（HIGH STATUS IS UP; LOW STATUS IS DOWN）」地位が高いことを「頂点に上がる（She'll rise to the top.）」と言い、地位が低くなることを「地位が落ちる（She fell in status.）」という。これは、社会的な地位を上下の動きで表現する。
8. 価値の良し悪しを表す「良いことは上、悪いことは下（GOOD IS UP; BAD IS DOWN）」良い状況を「物事が上向きになる（Things are looking up.）」と言い、悪い状況を「最悪の低点にある（Things are at an all-time low.）」と表現する。このメタファーは、価値の高さを空間的な上下で表す。
9. 道徳的な良し悪しを示す「美徳は上、悪行は下（VIRTUE IS UP; DEPRAVITY IS DOWN）」高潔な態度を「高い志を持つ（He is high-minded.）」と言い、卑劣な行為を「卑しい行い（That was a low-down thing to do.）」と表現する。このメタファーは、道徳性を上下の位置で示す。
10. 理性と感情の対比を表す「理性は上、感性は下（RATIONAL IS UP; EMOTIONAL IS DOWN）」

    理性を超えることを「感情を超えて上がる（He couldn't rise above his emotions.）」と言い、感情に基づく議論を「議論が感情的なレベルに落ちる（The discussion fell to the emotional level.）」という。このメタファーは、理性と感情を上下の位置で区別する。

2.1.3 イメージスキーマ（Image Schema）

Johnson（1987: 29）によると、イメージスキーマとは「日常的，具体的な経験のなかで繰り返し現れる（比較的単純な）パターン，形，規則性」である。Johnson によるとイメージスキーマの種類は、容器スキーマ、部分・全体スキーマ、中心・周縁スキーマなどがある。例えば、「TIME IS A CONTAINER」というメタファーでは、時間は、出来事や経験を入れる容器として概念化される。物理的な物体が容器の中に入れられるように、出来事も時間の中に入れられる。例えば、「We're running out of time.」（時間がなくなってきた）という表現では、時間を限られた容量を持つ容器として捉え、その容器が空になる過程を時間の尽きる様子に喩えている。人間の頭の中で容器のイメージスキーマを働いているため、このメタファー文を理解できる。イメージスキーマは、空間的方向性（上下、前後、内外など）、力の動き（押す、引く）、物体間の相互作用（障害物、経路など）など、私たちの身体的経験と密接に関連している。これらのイメージスキーマは、私たちが世界をどのように知覚し、言語を通じてどのように表現するかを理解する上で不可欠な役割を果たす。

2.1.4 スキーマティック・ネットワークモデル（Schematic Network Model）

籾山・深田（2003: 73）によれば、意味拡張（Semantic Extension）とは、ある語が従来の意味から新たな意味を派生させる現象であり、すべての言語において複数の意味を持つ語が広く見られる。日本語における多義語の例として「引く」が挙げられる。この動詞は、物理的な行為を示す「物を自分の方へ動かす」という基本的な意味の他に、多様な意味で使用される。例えば、「線を引く」という場合は、線を描く行為を指す。「感心する意味で引く」という表現では、人が示した行為や発言に対して驚きや尊敬の念を抱くという心理的な反応を意味する。さらに、「時計が引く」という場合は、時計が正確な時間より遅れている状態を指し、「話を引く」とは、ある話題を長引かせることを示す。これらのように「引く」は、文脈に応じて様々な意味を持つことから、多義語の一例として捉えられる。

「引く」という語の使用例に見られるように、意味の拡張は多くの場合、より抽象的な概念へと進展することが多い。抽象化された意味の拡張には、メタファーやメトニミーの使用がしばしば関連している。メタファーとは、「二つの異なる事物や概念の間に存在する類似性に基づき、ある事物を別の事物にたとえて表現する比喩のことである（籾山・深田 2003: 76）。例えば、「時間は金だ」という表現では、時間と金の間に類似性を見出し、時間の貴重さを金の価値にたとえている。メトニミーとは、二つの事物が外界的に隣接しているか、または概念上で密接な関連性を持っていることに基づいて、一方の事物を用いて他方を表す比喩である。たとえば、「白い家（ホワイトハウス）からの声明」という表現では、実際の建物「ホワイトハウス」がアメリカ合衆国大統領やその行政府を代表して用いられている。

意味拡張、メタファー、スキーマの関係はスキーマティック・ネットワークモデル（図 2: Langacker 1988, 140）のように、プロトタイプ的意味と拡張的意味の共通性はスキーマで構成される。このようなプロトタイプから派生する拡張は、ネットワークを水平方向に広げる一方で、上位のスキーマを抽出することにより、垂直方向の展開も促すと理解されている。メタファーとメトニミーは語義の意味拡張を動機づける要因と考えられる（籾山・深田：2003）。スキーマは基礎となるパターンを提供し、意味拡張によって新しい文脈や用途に適応し、メタファーを通じて新たな概念的な理解を生み出す。意味拡張、メタファー、スキーマの関係は、スキーマティック・ネットワークモデルによって説明される。このモデルは、言語の意味がどのようにして経験的なスキーマから派生し、様々なメタファーや意味拡張を経て抽象化されていくかを示している。スキーマティック・ネットワークモデルはこれらの要素が相互に関連しながら、私たちの認知における概念のネットワークを形成していると考える。カテゴリー化の関係に基づき結びつけられた複数の要素を持つネットワークモデルにおいては、これらの要素がプロトタイプの概念の拡張やスキーマの細分化を通じて体系化されるとされている。

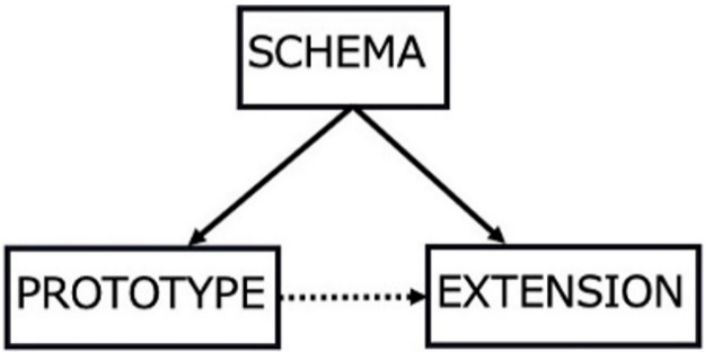

図 2：スキーマティック・ネットワークモデル（Langacker 1988：140）

2.1.5 トラジェクター（Trajector）とランドマーク（Landmark）

辻（2002：171）によれば、プロファイルとは、ある認知領域内で特に際立っている部分を指し、物事や関係性を表現する際に焦点化される。最も際立っている構造を「トラジェクター（Trajector）」と称し、他に際立つ構造は「ランドマーク（Landmark）」と呼ばれる。これらの区別は認知の基本機能である図地分化の言語学的表れであり、トラジェクターは位置、性質、動きを特定する対象として、ランドマークはそれらの参照点として機能する。簡単にまとめると、認知言語学のトラジェクターは、注目されるべき対象や行為の主体を指し、ランドマークはその対象や主体の位置を特定する参照点となることが分かる。また「トラジェクター」と「ランドマーク」という概念が空間関係を説明する上で重要な役割を果たすことも分かる。例を挙げれば、「山田さんが机の前に立っている」という文では、「山田さん」がトラジェクターであり、焦点となる人物を示す。一方で、「机の前」というフレーズがラ

ンドマークであり、山田さんがどこに立っているのかを指し示す。抽象的な関係性においても同様の概念が適用される。「彼女はチームのリーダーである」という文における「彼女」がトラジェクターとして機能し、チームの中での彼女の位置づけや役割を明確にする。「チームのリーダー」というフレーズがランドマークとなり、彼女がどのような立場にあるのかを表す。これらの概念により、我々は物理的な場所だけでなく、社会的な位置づけや役割など、抽象的な関係性をも理解することができる。トラジェクターとランドマークは、言語における様々な意味関係を解明する上で不可欠なツールであり、認知言語学の研究において広範にわたって用いられている。

2.2 認知言語学における視点

本研究では、「日本語の「上がる」と中国語の「上（shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークの分析・比較を通じて、日中母語話者が持つ視点の違いを明らかにすることを目的としている。そのため、ここで認知言語学および関連分野における「視点」という概念について紹介する。「視点」という概念に関して議論される多様な問題は、認知言語学では「事態把握（Construal)」として知られている。

2.2.1 視点構図（最適・自己中心的視点配列）

Langacker は「最適・自己中心的視点配列」を提唱した。Langacker によれば、最適視点配列（Optimal Viewing Arrangement）とは知覚者が客体的状況（Objective Scene）の外側に位置づけられる視点配列である。自己中心的視点配列（Egocentric Viewing Arrangement）とは知覚者が客体的状況内に位置づけられる視点配列である。

Langacker（1990）は英語の二つの例（a・b と呼ぶ）をあげて視点配列の違いについて説明した。

a. Vanessa is sitting across the table from me.
b. Vanessa is sitting across the table.

（Langacker 1990: 20）

上記の例から見ると、例 a・b は「from me」が言語化されるかどうかの違いだけがあるが、実際にはこの二つの例の視点配列が異なるので、「from me」は省略できない。具体的に例 a は最適視点配列を採用した。例 b は自己中心的視点配列を採用した。

下記の図 3 のように、V は感知する者、すなわち知覚者を指し、P は感知される対象、つまり知覚対象を表す。破線の矢印は、知覚者と知覚対象との間の知覚的関連性を描写している。PF は知覚者の視野を総括するエリアを指し、0S は特に焦点が当てられている部分、すなわち「オンステージ（Onstage)」または「客体的状況（Objective Scene)」を意味している。図 3（左）のように認知主体と認知客体の非対称性が大きい視点配列を「最適視点配列（Optimal Viewing Arrangement」と呼ぶ。一方、図 3（右）の V はオンステージに視座を置いているため、認知客体としても把握されることで主体性が減少し、客体

性が増加している。このような認知主体と認知客体の非対称性が小さい視点配列を「自己中心的視点配列（Egocentric Viewing Arrangement）」と呼ぶ。

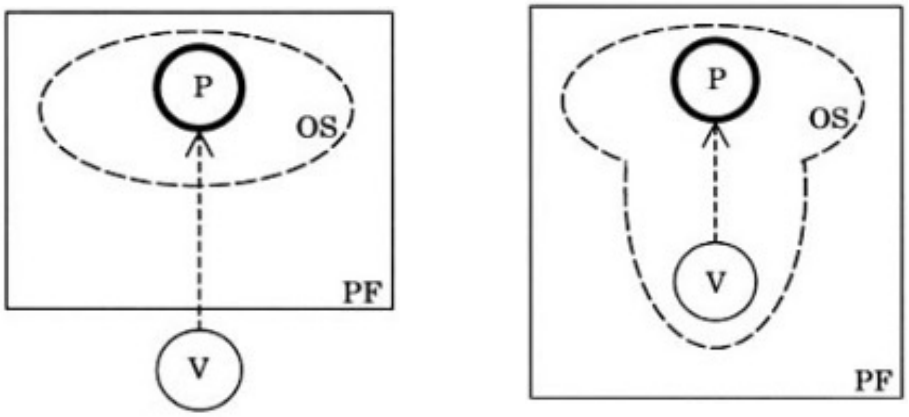

図 3：最適（左）・自己中心的視点配列（右）（Langacker 1990: 7）

2.2.2 認知モード（I モード・D モード）

中村（2004: 33）は日英の言語対照研究から日英の言語特徴は I モードと D モードのような認知モードの区別があると主張した。つまり、日本語は状況内視点型の言語であり、西洋語は視点が状況外型の言語である。具体的には下記の図 4、図 5 のように、外側の楕円は認知の場、C は認知の主体を表す。両方向きの矢印は自分と対象とのインタラクション示す。破線矢印は認知プロセスである。四角は認知プロセスによって構築される認知像である。簡単に言うと、I モードは自分と対象とのインタラクションに視点を置く。D モード認知主体がインタラクティブな認知の場の外に出て、外的視点をおいて、客観的に眺めるような脱主体化な特徴がある。

例えば、「頭が痛い」という日本語表現において、話者は自己の身体的な感覚を直接言語化しており、これはIモードと呼ばれる認知モードに該当する。この表現により、聞き手は話者が個人的な体験を通じて痛みを感じていることを理解することができる。一方で英語では、「I have a headache」という表現では、話者は自己の体験をあたかも客観的な事実であるかのように述べており、これは D モードという認知モードを反映している。この構造は、話者が自己の体験を第三者が見るような視点から捉えていることを示している。

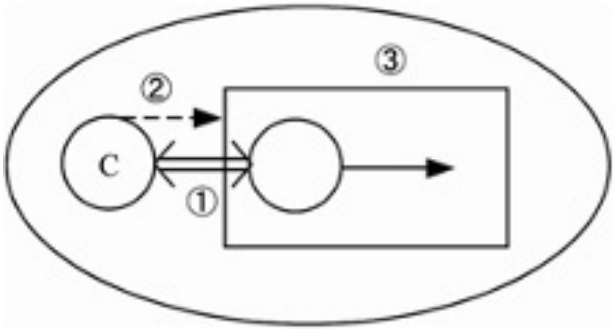

図 4：I モード（中村 2004：36-37）

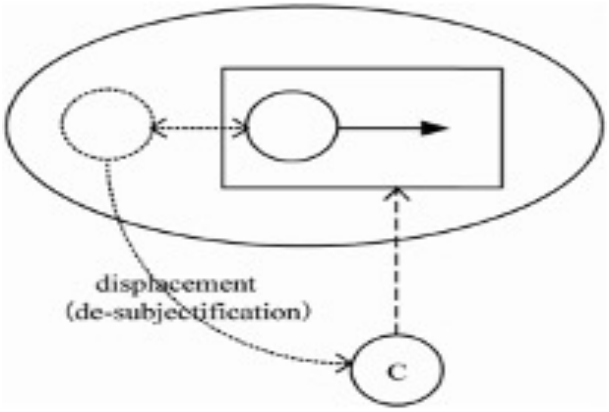

図 5：D モード（中村 2004：36-37）

2.2.3 事態把握（主観・客観的把握）

池上（2011）は、事態把握の好みに関して、日本語の話者はより主観的なアプローチ（主観的把握）を、英語の話者はより客観的なアプローチ（客観的把握）を選ぶ傾向があると述べている。池上（2011）は主観的把握と客観的把握を以下のように定義した。

> 〈主観的把握〉：話者が言語化しようとする事態の中に身を置き，当事者として体験的に事態把握をする場合実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても，話者はあたかもそこに臨場する当事者であるかのように，体験的に事態把握をする．〈客観的把握〉：話者が言語化しようとする事態の外に身を置き，傍観者，ないし観察者として客観的に事態把握をする場合．実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても，話者はあたかもその事態の外に身を置いている傍観者，ないし観察者であるかのように，客観的に事態把握をする．（池上　2011: 318）

この定義からは客観的把握は「第三者視点」のようなものであり、主観的把握は「当事者視点」のようなものであると分かる。例えば、「ここはどこですか？」や「誰もいない」といった発話は、話し手が事態の中にいるという姿勢で主観的に把握していることを示す。これに対し、英語話者は「Where am I?」や「Nobody is here except me」といった表現で、自分を事態の外に置き、

事態を客観的に捉える傾向がある。英語では、話し手が自分自身を外部の観察者として表し、客観的な視点から事態を表現する。

2.3 応用言語学における視点

2.3.1 神の視点・虫の視点

応用言語学の領域では、「神の視点」と「虫の視点」という翻訳研究の文脈で用いられる視点が注目されている。ここでいう「神の視点」とは、高いところから物事を一望するかのように、広い視野をもって事象全体を捉え、それらの全体的なパターンや相互関係を理解するための視点である。この視点は、一つひとつの小さなディテールよりも、事象全体の構造や流れに焦点を合わせるため、地図や俯瞰図を用いたときのような理解を助ける。金谷（2004: 59）は、これが鳥は高い空から地面を見下ろすような視点であり、広い範囲の事象を捉えるのに適していると指摘している。このような視点では、詳細な部分は小さく見え、より大きな背景の中での理解が促される。対照的に、「虫の視点」とは、地面に近いところや物事の内部から見る視点であり、より詳細な要素や微細な部分に注目を集中することを可能にする。この視点は、個人が直接的に経験する世界を、自分の目を通じて観察することに似ており、周囲の環境や物の細かな特徴を捉えることができる。

翻訳学における視点の考察に際して、川端康成の『雪国』とその E. Seidensticker による英訳の冒頭文は示唆に富む例となっている。

> 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。(『雪国』の冒頭 川端康成)
> The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop. 『Snow country』 Edward G. Seidensticker 訳）

日本語の原文では「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった」との表現が採用されており、読者は登場人物と共にトンネルを抜け、目の前に広がる雪景色を直接体験するかのような、いわゆる「虫の視点」が用いられている。この主観的な視点は、読者に直接的な感覚を喚起させる。それに対して、英訳された文は、より遠くからの様子を伝える「神の視点」を用いている。この視点では、読者は高所から雪国の景色、雪に覆われた地面、信号所に停まる列車を一望できる。この外観からの描写は、読者に全体像を提示し、物語全体を一つの視界内で捉えることを可能にする。

2.3.3 翻訳における日中対照研究の視点

徐（2011）では、翻訳作品における日本語と中国語の語順が「事態把握」の観点から比較分析されている。この論文は、日本語では場所や様態を表す語句が文の初めに来ることが多いと指摘している。これは、語り手がその場にいるかのような主観的な視点、「主観的把握」を表している。対して中国語では、主語が先に来て、その後に場所や様態が続く基本語順が一般的であり、

これは事象を外部から観察する客観的な視点、「客観的把握」を示している。このような語順の違いは、両言語の話者が事象をどのように捉えるかの違いを反映していると論じられている。

鄔（2018）は、『老人と海』の日本語訳と中国語訳の文において、観察者の表現方法が異なることを指摘している。日本語訳では観察者を直接示さない「非明示」のケースが多く、一方で中国語訳では観察者を具体的に示す「直接の明示」の例が多いことが分析結果から分かった。また、中国語の原文について、日本語の翻訳が観察者のゼロ化（省略）傾向が強いことを示し、中国語の翻訳は観察者をはっきりと描写する傾向にあることを示していることを明らかにした。これは、中国語の文学作品における日本語の翻訳では、中国語原文の視覚動詞が省略され、観察者が観察対象に完全に集中し、主観性の高い表現になっている。つまり、中国語では観察者や視覚動詞が省略されることもあるが、日本語のように主観性の高い表現や「主客合一」的な表現は文法的に認められないことが多い。

2.4 本研究における視点

2.2 節と 2.3 節では「認知言語学」と「応用言語学」における視点について紹介した。実は認知言語学と応用言語学における視点は同じものであることが考えられる。認知言語学と応用言語学における視点の概念が基本的に同じであると見なす理由は、両者が現実の認知と表現をどのように個人の経験を通じて構築するかに注目しているからである。

認知言語学は、事態把握という視点から、個人が情報をどのように処理し表現するかを探求しており、Langacker（1990）による最適視点配列や自己中心的視点配列の理論がこれを例証している。また、日本語と西洋語の認知モードの違いは、言語と文化が認知プロセスに及ぼす影響を探る点で共通している。池上（2011）の研究は、日本語話者と英語話者の事態把握の好みが異なることを示し、これもまた認知言語学の視点と一致する。翻訳学における視点の検討では、『雪国』の冒頭文の日本語原文と英訳文が提供する異なる視点が、読者に与える体験の違いを明らかにしている。

一方、応用言語学、特に翻訳学では、「神の視点」と「虫の視点」という用語を用いて、翻訳者が原文をどのように解釈し読み手に伝えるかを考察している。これらの視点は、認知言語学の事態把握の概念に直結しており、個人の視点と認知スタイルがどのように言語表現に影響を及ぼすかを示している。

このように、視点は言語を介した現実の理解と表現における認知プロセスに関わるものであり、両分野が取り組んでいる課題は根底で同じである。したがって、視点の命名は異なるものの、本質的には一つの概念を指していると見なせるのである。つまり、認知言語学は、いわゆるマクロな視点から言語的な全般的特徴について論じており、応用言語学、特に翻訳分野においては、読者に伝わるように原文を翻訳するために、異なる言語間の比較を通じて各言語の特徴を詳しく掘り下げる必要がある。本研究では、認知言語学の立場で日本語と中国語の対照研究を行うにあたり、認知言語学と応用言語学の翻訳分野に言及した「主観性的把握」と「客観的把握」という視点の用語を採用している。

2.5 多義語についての日中対照研究

多義語とは、国広（1982：97）が提案した定義によれば、「同一の音形に、意味的に何らかの関連をもつふたつ以上の意味が結びついている語」である。例えば、日本語の「見る」には「物を視認する」（例：映画を見る）という意味があり、また「感じ取る」や「試す」という意味でも使わる。例えば、「新しい方法を見てみる」など。これらの意味は異なるが、すべて「みる」という同じ音形に紐づけられている。中国語には多義語が存在している。「看」（kàn）はその例の一つである。この単語は複数の意味を持つものである。たとえば、「観察する」または「見る」という意味では、視覚に関連する行為を指すものである。例えば、「看书（kàn shū）」（本を読む）。また、「世話をする」や「看護する」という意味では、人の世話をする行為を指すものである。例えば、「看病（kàn bìng）」は「病人の看護をする」という意味である。さらに、「考える」や「検討する」という意味では、何かを評価するまたは審査する際に使用されるものである。例えば、「看情况（kàn qíng kuàng）」は状況を見て判断するという意味を指す。

言語が実際に使用される際には、辞典で定義された基本的な意味内容だけでなく、そこから発展した様々な意味が日常的に用いられる。ここでいう「基本義」とは、ある語の最も基礎的な意味（プロトタイプ的意味）を指し、一方で「拡張義」とはその語から派生した意味を指す。例えば、「ヤバイ」という日本語は、もともと「まずい状況」や「危険」を意味するが、現代では「素晴らしい」や「驚くべき」といった肯定的な意味でも広く使われるようになっている。

意味の拡張は、しばしばメタファーやメトニミーといった比喩的な表現によって生じる。これらのメタファー・メトニミー的表現は、語の意味のネットワーク内で相互に関連には重要な位置を占める。本研究で取り上げる「上がる」という語のプロトタイプ的意味「上に移動する」を基本義として扱い、その他の意味を拡張義と定義する。

次に多義語に関する研究について紹介したい。主に、対照言語学の分野と対照認知言語学の分野の先行研究を紹介する。

2.5.1 対照言語学分野

本節は主に対照言語学の分野における日本語と中国語の多義語についての先行研究を紹介する。対照言語学は主に文の構造、意味の対称性について考察する研究が多い。これからは代表的な研究に絞って紹介する。

王（1998）は、中国語と日本語の漢字が持つ同形異義語に焦点を当てた対照研究を行っている。中国語教育の視点から、両言語における漢字の意味がどのように似ており、またどのように異なっているかを探求している。研究方法として、日中辞書を用いてそれらの日本語としての意味と中国語としての意味を確認し、同形異義語についての分析を行った。その結果、同形異義語の中で完全に意味が異なる場合が最も多く、他にも様々なパターンがあることが明らかにされた。

徐（2009）は基本的な空間次元概念である「深・浅」を対象に、辞書とコーパスを基に日本語と中国語の「深/浅」の意義構造と拡張度を分析した。その結果は「深/浅」の意義ネットワークを作って、日本語と中国語の「深・浅」における意義や使用上の相違点を示した。加えて、「深・浅」は反対概念として対称的であると考えられがちだが、実際には両言語で非対称現象が頻繁に見られ、その非対称性は意義、使用頻度、文構成において幅広い。日本語と中国語における「深・浅」の非対称性に関する相違点に認知的な規則があるかどうかについては今後の課題と指摘されている。

柳（2023）は中国語の「甜」と日本語の「甘い」に関する中日語意の対比分析及び教育応用について探究している。コーパスを利用してこれらの単語の基本的な味覚の意味とそのメタファー的意味の相違を明らかにし、言語学習者が直面する困難を軽減することを目的とする。結果から、基本的な味覚の意味では共通しているが、メタファー的意味での使用には顕著な差異があり、教育上の考慮点とされている。具体的には、日本語の「甘い」は多義的で様々な意味拡張が見られるのに対し、中国語の「甜」の使用範囲は比較的限定されていることを示した。

以上対照言語学分野では、日中の多義語に関する先行研究が、文法や語構成の側面で行われていることが明らかになった。そして言語教育応用レベルにも提案するものが多い。しかしながら、徐（2009）が指摘した今後の課題、すなわち認知の視点で日中多義語の対照を考察することが望まれることが分かった。単なる文法や語構成、語義の数の比較をするような対照研究は系統的に言語の特徴を把握することが難しいだろう。そして、応用言語学、特に言語教育の分野で、系統的に学習者に教えることにより学習の有効性を高められる可能性が考えられる。

2.5.2 対照認知言語学分野

本節は主に認知言語学において日中多義語を比較する先行研究を述べる。認知言語学の登場に伴って、認知言語学的なアプローチで日中の対義語を対象に比較する先行研究は少なくはない。

例えば、徐（2015）は辞書を用いて中国語の「黄」と日本語の「黄」の意味を整理した上で、日中の色彩多義語「黄」の相違点を明らかにした。主には認知意味論の理論を用いて、両言語における意味拡張のプロセスを比較し、特に色彩に関する共感覚表現に注目して分析を行った。結果として、中国語の「黄」は日本語の「黄」より意味が多いこと、共通のプロトタイプ的意味を持ちつつも、意味拡張における違いが多いことが明らかになった。中国語ではメトニミーによる意味拡張が目立ち、意味拡張は外来文化の影響を受けている一方、日本語ではそのような影響は少ない。また、中国語の「黄」の意味拡張プロセスは日本語に比べて複雑で、品詞変化が見られる傾向があることが分かった。

鐘（2017）はコーパスを利用して、中国語の「硬」と日本語の「かたい」という二つの触覚感覚形容詞の認知意味論的構造に関する対照研究を行った。その結果、中国語の「硬」と日本語の「かたい」について、共通点は意味の拡張方向が一致しており、原型義が同じで、意味の拡張程度が高く、一次的拡張義が二次的拡張義よりも多く、隠喩に基づく意味の拡張が特に多いこと

を示した。一方で、相違点は各言語が持つ独自の拡張義に現れることを明らかにした。さらに、触覚感覚形容詞について系統的・全面的な考察が必要であることや、中日の触覚感覚形容詞の認知意味論的研究が日本語教育に与える潜在的な示唆を指摘している。

梅（2020）は日本語の「大」と中国語の「大」を対象に、文学作品における例文に焦点を当て、語彙レベルでの多義性を概念メタファーとプロトタイプの視点から分析している。分析の結果として、日本語ではメタファーによる意味拡張が、中国語ではメトニミーによる意味拡張が顕著であることが分かった。さらに、両言語における「大」の意味項目と拡張プロセスは、大まかには対称的であるが、意味分析からは非対称性も見られることも分かった。また概念レベルでの分析からは、「大」が空間概念から「数量」、「時間」、「状態」、「社会」などの抽象概念への写像が確認された。両言語における「大」のマクロな意味上の特徴と対応関係が示され、一部の領域では対応しているが、他の領域では非対応関係にあることが示された。しかし、この研究には、文学作品だけから例文を抽出することや、意味ネットワークは日中母語話者の認知相違点の系統的な考察は至らなかったという問題点が残る。

以上、対照認知言語学の分野においては、日中の多義語に対する研究範囲が広がっている。多くの研究は、人間の経験に密接に関連する触覚や視覚などの感覚に関する語を対象としている傾向にある。日中の多義語に関する先行研究は、意味カテゴリーを特定し、それぞれのカテゴリー間の拡張関係を整理し、意味ネットワークを構築することを中心に考察している。しかし、以上の先行研究の結果から見ると、意味ネットワークを構築するものの、母語話者の認知の違いに関する系統的な考察にまでは至っていないと考えられる。

2.6 日中多義語「上」について

2.6.1 対照言語学分野

本研究で対象とする日中多義語「上」についても対照言語学の方法捉える先行研究がある。

陳・王（2011）は日本語の「V-上げる」と中国語の「V 上」を対象に、後項文法化の相違点を検証し、以下の 3 点を明らかにした。日本語の「V-上げる」は「「終了」というアスペクト」があり、中国語の「V 上」には「終了」と「開始」というアスペクトがある。

王（2014）は日本語の「～上げる」と中国語の「～上（shàng）」という複合動詞を対照研究し、それらが示す「上への空間的移動」と「動作の完成・完了」の意味の拡張と文法化の過程を探求した。その結果、以下のことを明らかにした。日本語の「～上げる」は空間的上昇に関連し、その拡張義は基本的な空間的移動から派生しているのに対し、中国語の「～上」は空間的なものと動詞の内在的時間の両方に関わり、意味の派生は空間と動作の時間軸における位置によって捉えられている。また、中国語の「～上」は意味拡張の範囲が広く、文法化の度合いも高いこと、動詞「上」の後にはしばしば結果性を表す成分が付され、動作後の好ましい結果や結果状態を強調する傾向

にある。そして、今後の研究により両言語の差異が生じる原因が明らかにされることが期待されているということを指摘した。

以上対照言語学分野では、日中の多義語「上」に関する先行研究が、文法や語構成の側面で行われていることが明らかになった。王（2014）が指摘するように、日中の言語間の差異の原因を深く掘り下げることが重要である。ここで言及される「原因」とは、恐らく日中の母語話者の認知の違いを指していると考えられる。それ故、次に認知言語学の観点から日中の多義語「上」についての先行研究を考察する。

2.6.2 認知言語学分野

認知言語学の分野でも「上」という多義語に関する研究は少なくない。以下では、日本語の「上がる」と中国語の「上」についての先行研究をそれぞれ説明する。

日本語の「上がる」に関しては、主に認知言語学の「上下メタファー」概念を理論的基盤として、これらの動詞のカテゴリーの繊細化や不対称性についての考察が行われている。たとえば、鐘・井上（2013）は、日本語の「上がる」「下がる」を対象に、その基本的な体系構成と特徴を検討した。研究方法として、『聞蔵 II ビジュアル』に収録された「朝日新聞」の記事から 10 日間（2011 年 12 月 6 日 ～ 2011 年 12 月 15 日）の全国版と地方版の約 18500 例を分析し、『広辞苑』（第五版）（新村 1998）や『新明解国語辞典』（第五版）（金田一ほか 1997）からのメタファー表現例も加えた。その結果、上下の空間位置が数量、時間、順序、属性、状態、評価の 6 つの意味領域に対応し、日本語における上下メタファーは、対称性、一貫性、基盤の多様性、競合性という 4 つの特徴があることが明らかになった。森山（2016）は、「上がる」を対象に NINJAL-LWP for BCCWJ コーパスから例文を分析し、鐘・井上（2013）の研究にないカテゴリーを追加して修正を行い、21 種類の意味カテゴリーが形成されていることを示した。森山（2018）は、日本語の「上がる・下がる」の意味拡張について、内省およびデータ分析を通じて調査し、「下がる」の繊細な分類と「上がる・下がる」の使用における非対称性を明らかにした。

中国語の「上」については、苗（2012）は現代中国語の動詞「上」の意味カテゴリーを整理して、「メタファー的」、「シネクドキー的」、「メトニミー的」といった意味拡張メカニズムを明らかにすることを試みた。蒋（2014）は、中国語の「上」「下」を対象に、方位語としての「上」「下」の意味拡張について考察し、コーパスから例文を抽出して分析した。その結果、中国語の「上」「下」は不対称性が見られるが、メタファーについての分析はまだ足りないことを指摘した。

譚（2017）は、中国語と日本語の「上」「下」の対称性と非対称性について検討し、特に「上」「下」の動詞の組み合わせにおける意味選択と深層構造の違い、及び語用分析を行なった。その結果、中国語と日本語の上下には対称性と非対称性の両方があり、日本語の非対称性は中国語よりも顕著であることを明らかにした。徐（2021）が「上」「下」の動詞の組み合わせにおける意味選択と深層構造の違い、および語用分析を行った。研究方法として、小学館の『中日辞典』から例文を抽出し、内省およびデータ分析を行なった。そ

の結果、「上」「下」が移動を意味する場合には対称性があり、動作を意味する場合には非対称性が見られることを示した。

日本語の「上がる」に関しては、認知言語学のもう一つ重要な概念である「イメージスキーマ」で分析した先行研究がある。例えば、厳（2010）は日本語の空間表現「うえ」と動詞「あがる」「あげる」に関する意味拡張と、それに伴う空間認知の類似性に焦点を当てて、これらの表現が共通の空間認知パターンを持つかどうかを探った。結果として、「うえ」と「あがる／あげる」は、元の上方向の空間概念から外部および内部の空間概念へと拡張されており、これは日本語における上方向の空間表現に共通する認知パターンを示していることを明らかにした。

中国語の「上」に関しても、「イメージスキーマ」で分析した先行研究が少なくない。常（2019）は他動詞「V 上」という現代中国語の実意動詞接尾辞の意味とイメージスキーマに焦点を当てている。研究の目的は、「V 上」が表す異なるイメージスキーマを明らかにし、それによって言語の意味を解構することである。北京大学が開発した CCL コーパスから抽出した実例を基に、実意動詞接尾辞「V 上」の意味分類と認知的接続メカニズムを分析している。結果として、「V 上」は空間位置の変化を表す接触意義や附着意義など、動作の結果を強調する複数の意義を持つことが確認された。厳（2021）は中国語教育の視点で、中国語多義語「上」に関する単語ネットワークを構築することを目的とする。この研究では、中国語「上」の包括的なスキーマネットワークを提案し、それには「起」や「生」といった同義語の意味も含め、品詞の違いを越えた拡張を行っていることが分かった。王（2022）は現代中国語の他動詞の「V 上」構造を研究対象とし、「上」の意味の抽象化から、この構造が表す三つの主要な意味カテゴリーを分類し、それぞれのイメージスキーマを構築している。研究方法としては、「空間域位移指向性達成義」「非空間域達成義」「新状態開始義」というカテゴリーに基づく具体例の分析を行っている。結果として「V 上」は動作の達成や動的変化、特に目標達成や新状態の始まりを表す際に、「心理的期待」や「心理的予期」を含むことを明らかにしている。

以上の日本語の「上がる・下がる」と中国語の「上・下」についての先行研究の問題点は、語義レベルの拡張関係だけに留まっており、日中言語における「上」の特徴を系統的に把握していないことが見受けられる。

2.6.3 認知対照言語学分野

本節は主に認知対照言語学の分野において日中の「上」という多義語に関する先行研究をそれぞれ説明する。

左（2007）は日中「上・下」を対象に、上下メタファー理論に従って、日本語と中国語における意味の拡張はどのようなものかについて考察した。研究方法は小学館の『中日辞典』から例文を抽出し、内省とデータ分析を行っている。その結果は「公的な状態が上、私的な状態が下」、中国語があるが、日本語はあまりないことを明らかにした。また、「意識があるのは上、意識がないのは下」という意味での使い方については、日本語と中国語は同じであるが、「公的な状態が上、私的な状態が下」について、中国語ではよく使われ

ているが、日本語の中にこういう表現はあまりないということを明らかにした。

呂（2009）は日本語の「アガル・サガル」と中国語の「上・下」を対象にした対照研究である。目的は、これらの言語における垂直軸の移動を表す語の意味項と用法の違い、および認知モデルの差異を明らかにすることである。方法としては、大量の例文を分析し、両言語の意味項の多様性や用法の違いを比較した。結果として、日本語の「アガル・サガル」と中国語の「上・下」は、意味項の数や用法において異なり、特に中国語には新しい意味項を設ける必要があることが示された。また、中国語には方向性の対立が失われる中和現象が見られるが、日本語にはそのような用法がないことが明らかにされた。

陳（2014）は、中国語教育の視点で中国語の方位詞「上」と日本語の「うえ」を対象に、「上」に関する空間的用法の共通点と相違点を分析した。分析の結果、日本語の「うえ」は単独で使われることがあるが、中国語の「上」は単独で使われることは少なく、通常「下」との慣用構造を形成するか、前置詞が必要であることを示した。また中国語の「X 上」にはないが、日本語の「のうえ」には「表面に出る方、外側」という意味があるということを明らかにした。

苞山（2014）は語彙的意味と構文の立場で、日本語と中国語における移動動詞の多義化プロセスを探求した。その結果以下の 3 点を明らかにした。「プロトタイプが類似する「上」の空間的意味を持つが、「食べる」、「走る」などの動作的意味を持たない」、「プロトタイプの空間的「上」は、動作や状態の変化を伴う場合に用いられ、「落ちる」、「立つ」、「座る」、「遊ぶ」などの動作的意味や結果を示す用法がある」、「空間的「上」の意味は、動作や状態の変化を伴わず、また「上」が示す空間的な場所や「上」が示す動作の結果として表される場合もあるが、動作的な意味を持たない場合もある」。

先行研究をまとめた結果、以下の 3 点の問題点が明らかになった。

1. 中国語の「上」は自動詞と他動詞で使用できるが、対照研究では日本語の自動詞「上がる」と比較する傾向にある。
2. 日本語の「上がる」「下がる」と中国語の「上」「下」の分類方法は基本的に辞書の例文を参考にして分析されているため、どの程度人間の生活と経験を反映しているのか疑問が残る。
3. これまでの日中の対照言語学の研究のような言語レベルの意味拡張ネットワークを中心にした分析では、日中の母語話者の認知の違いについての系統的な考察ができなかった。

2.7 まとめ

先行研究は対照言語学の分野において、言語の構造と意味の対称性に重点を置きつつ、文化や認知の違いに基づく意味の差異についても検討している。例えば、王（1998）や徐（2009）の研究では、漢字の同形異義語や空間次元概念に焦点を当てた対照分析が行われている。また、柳（2023）は味覚語に関する中日語意の対比分析を通じて、言語学習者が直面する困難を軽減することを目指している。

認知言語学分野では、特に色彩や触覚感覚形容詞など、具体的な感覚に関連する多義語の意味拡張に注目が集まっている。ここでは、徐（2015）や鐘（2017）などの研究が、語の意味拡張が文化間でどのように異なるかを明らかにしている。そして、認知対照言語学分野では、左（2007）や呂（2009）などがメタファー理論を用いて、日中の言語における「上・下」の意味拡張を分析しており、その結果は言語学習における具体的な示唆を提供している。

これらの先行研究を総括すると、日中の多義語に対する研究は、語彙の意味カテゴリーの特定、意味拡張のプロセスの解明、言語使用上の相違点の分析を中心に行われてきたが、意味ネットワークの構築に関しては、母語話者の認知の違いに関する系統的な考察に至っていないという問題点が見られている。本研究では、これらの課題を踏まえつつ、認知言語学の理論を応用し、日中の多義語「上がる」と「上（Shàng）」における認知の違いについてさらに深く探究することを目的としている。

3 研究方法

2 章は、本研究の理論ベースや本研究の研究対象に関わる先行研究を説明した。具体的には、認知言語学の一部であり認知意味論の重要な概念を紹介し、本研究の関連用語の例を挙げながら分かりやすくまとめた。その後は多義語の研究現状及び本研究の研究対象「上」に関わる先行研究を詳しくした。さらに、先行研究の不足をまとめて本研究の必要性を強調した。本章ではまず、本研究が扱うデータベースと辞書と例文コーパスの紹介及び「上がる」「上（Shàng）」の意味カテゴリー分類基準を紹介した。次に、プロトタイプの認定基準を紹介した。その後は現象素を用いた意味拡張プロセスの分析方法を説明した。最後に、イメージスキーマを作成方法について紹介した。

3.1 本研究で用いる方法とその流れ

本研究の目的は、日本語と中国語の母語話者の認知の違いとその違いを説明する要因を解明することである。具体的には日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」が意味カテゴリーにおいてどのように分類されるか、およびこれらの動詞のイメージスキーマ・ネットワークに存在する違いを検討することを目的とする。それぞれの動詞の意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）を分析し、各意味カテゴリーでのイメージスキーマの特徴を明らかにする。さらに、イメージスキーマ・ネットワークの構造を明確にし、日本語と中国語を母語とする話者の認知の差異を生じさせる要因を解明する。

本研究の「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」は、意味カテゴリーにおいてどのように分類されるか」に対しては、意味カテゴリーの分類には例文により分析することが必要のため、ステップ 1 は例文の用意である。その次は、日中辞書によりカテゴリーの分類が必要である。その後は現象素を用いた各意味カテゴリーの意味の詳しい分析が必要である。

「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークにはどのような違いがあるのか」に対しては、現象素の比較による意味拡張の分析が必要である。具体的には「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」の各意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）はどのようなものか」に対しては、各意味カテゴリーの現象素を分析し、比較することより、各意味カテゴリーは意味拡張のプロセスはメタファーやメトニミーどちらか、あるいはメタファーやメトニミー両方が生じるかを分析する。「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のそれぞれの意味カテゴリーにおけるイメージスキーマはどのような特徴を持つのか」に対しては、日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」それぞれの意味カテゴリーや現象素、例文の TR・LM の関係など総合的分析より、イメージスキーマ図をかく。「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークはどのようになっているのか」に対しては、「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のそれぞれの意味カテゴリーによりイメージスキーマ図の特徴をまとめて、イメージスキーマ・ネットワークを構築する。

「イメージスキーマ・ネットワークの差の要因となる日中母語話者の認知の差はどのようなものか」に対しては、日中のイメージスキーマ・ネットワークの比較により、イメージスキーマ・ネットワークの差の要因となる日中母語話者の認知の差の要因を考察する。

具体的には本研究の流れは下記の 9 つのステップで行う。

1. 例文の用意
2. 意味カテゴリーの分類
3. 現象素を用いた各意味カテゴリーの意味の詳しい分析
4. 現象素の比較による意味拡張の分析
5. 意味ネットワークの作成と比較
6. 各意味カテゴリーのイメージスキーマの作成
7. スキーマティック・ネットワークモデルの分析
8. 日中イメージスキーマ・ネットワークの作成と比較
9. イメージスキーマ・ネットワークの差の要因となる日中母語話者の認知の差の分析

3.2 本研究が扱う日中同形多義語の準備

3.2.1 例文データベース

本研究ではコーパスを利用して文を抽出した。日本語例文の抽出は『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)』を利用した。前川（2021）によれば、国語国立研究所によって構築されたBCCWJコーパスは、現在入手できる日本語の均衡コーパスとしては唯一のものである。このコーパスは、書籍、雑誌、新聞、白書、ブログ、インターネットの掲示板、教科書、法律文書など様々なジャンルを網羅しており、総計で 1 億 430 万語のデータが収められている。また、これら各ジャンルからランダムにサンプルが収録されている。このコーパスは、例文のジャンルが豊富で偏りがないため、本研究の日本語例文の出典とする。

中国語の例文は北京言語大学が開発した『現代中国語コーパス（BCC)』を利用した。BCC 漢語コーパスは、約 150 億字の総文字数を有し、新聞（20 億字)、文学（30 億字)、ウェイボ（30 億字)、科学（30 億字)、総合（10 億字)、そして古漢語（20 億字）といった、様々な分野の資料を含んでいる。これは、中国の現代の社会言語生活を広範に反映する大規模なコーパスである。このコーパスは、日本語BCCWJコーパスと同じように、例文のジャンルが豊富で偏りがないため、本研究の中国語例文の出典とする。

BCCWJ コーパスにより、「上がる」の活用形を含む例文は 8267 文を抽出した。BCCコーパスの例文は「多領域（全てのジャンルを含む)」においてランダムに「上（Shàng)」自動詞の 1 万文を抽出した。なお、本研究は現代中国語を対象とするため、古漢語は本研究から除く。

3.2.2 参照した辞書

抽出した「上がる」の例文の分類は『日本語多義語学習辞典（動詞編)』（森山 2012）を参照した。この辞書は本研究と同じく認知言語学の立場で作

った辞書であるため、本研究と一貫性が持っていると考えられるためこの辞書を選んだ。

『日本語多義語学習辞典（動詞編）』（森山 2012：17-23）によれば、「上がる」のカテゴリーは以下の 11 種類に分類できる。

- 「上に移動する」
- 「水の中から陸に移動する」
- 「家・部屋などに入る」
- 「雨・雪などが止む」
- 「目上の人のところに行く」
- 「上の段階に進む」
- 「完成する・終わる」
- 「状態・程度が変化して、数値が大きくなる」
- 「気持ちが高まる」
- 「緊張する」
- 「声などが出てくる」

中国語「上（Shàng）」の例文の分類は『現代漢語八百詞（第 5 巻）』（呂 2002：356-358）を参照した。この辞書は現代中国語の権威的な辞書の一つである。また、この辞書は「上（Shàng）」について自動詞と他動詞を分けてカテゴリーを分類しているため、本研究ではこの辞書の「上（Shàng）」の自動詞のカテゴリーを参照した。

『現代漢語八百詞（第 5 巻）』によると、「上（Shàng）」の自動詞のカテゴリーは以下の 6 種類に分類できる。

- 「由低处到高处（上に移動する）」
- 「向前进（前に進む）」
- 「出场（登場）」
- 「登载（載る）」
- 「到规定时间开始日常工作或学习等（一定の時間に経常的な活動をする）」
- 「达，到一定数量或程度（ある数量，程度に達する）」

3.3 プロトタイプの認定方法

プロトタイプ的意味というのは、同じ発音を持つ多義語の中で意味的に繋がりがある複数の語義の中で、最も根本的な意味を指す（国広 1982:97）。籾山（2002:107）によれば、プロトタイプ的意味は、最も活性化され、想起されやすい特性を持つ。Lakoff（1990:417）が指摘するように、方向に関する意味は通常、より中心的でプロトタイプとされており、時間に関する意味は、この中心的な意味にメタファーによって結びつけられている。例えば、「up」という単語は、「I'm feeling up today.」という文では「幸せ」と解釈され、「The rocket went up.」という文では空間的な意味合いを持つが、一般には後者の空間的な用法がより中心的であると考えられている。つまり、「上」を表す動詞の場合、物理空間の「上に移動」は最も活性化され、想起されやすいと考えられる。このため、本研究の「上がる」と「上（Shàng）」のプロトタイプ的意味は物理空間を表す意味カテゴリーである「上に移動する」とする。

また、プロトタイプ的意味「上に移動する」を基本義、他の意味カテゴリーを拡張義と呼ぶ。

3.4 現象素の分析方法

本研究では、「上がる」「上（Shàng）」の各意味カテゴリーを国広（1994：22-44）が提唱した現象素の概念を用いて分析した。現象素とは、外界の物の動きや属性などを認知したものである（国広 1995：40）。そして、意味拡張のプロセスの分析を現象素の違いにより分析した。

籾山・深田（2003: 183）が挙げた「かたい」を例にして説明する。籾山・深田（2003: 183）によると「かたい」の 3 つの意味は以下のような現象素を持つと分析できる。

【かたい】
意味 1: （プロトタイプ的意味）単一の固体に関して外部から加えられる力に対して抵抗感を感じさせるさま
現象素：
＜単一の固体に関して＞
＜外部から加えられる＞
＜力に対して〉
＜抵抗感を感じさせるさま＞
例文：
a. ダイヤモンドはかたい。
b. この肉はかたい。

意味 2: 複数の密着したものに関して引き離そうとする力に対して抵抗感を感じさせるさま
現象素：
＜複数の密着したものに関して＞
＜引き離そうとする＞
＜力に対して＞
＜抵抗感を感じさせるさま＞
例文：
a. びんの栓がかたい。
b. 口をかたく閉じる。

意味 3: 人間が精神的に緊張した状態にあるさま
現象素：
＜人間が精神的に緊張した状態にあるさま＞
例文：
面接試験でかたくなってしまった。

上記の現象素から各意味の拡張関係が分析できる。例えば、意味1と意味2の現象素は＜力に対して＞＜抵抗感を感じさせるさま＞が共通しているので、

この類似点から意味 2 は意味 1 からメタファー的な拡張プロセスが生じたと考えられる。意味 3＜人間が精神的に緊張した状態にあるさま＞のところは、人間は緊張する場合は筋肉が硬くなることが考えられる。筋肉の硬いと意味 3 の＜人間が精神的に緊張した状態にあるさま＞の精神的な硬いは同時に生じることが一般的である。したがって、意味 3 は意味 1 からメトニミー的な拡張プロセスが生じたと考えられる。

3.5 イメージスキーマの作成方法

イメージスキーマを構築する際に、2. 1. 3 節で触れた Langacker（1988: 11）が提案する基準を採用した。これには移動体や注目される部分であるトラジェクター（TR）、基準点や参照点であるランドマーク（LM）、そしてトラジェクターの運動軌跡の間の関係性が含まれる。トラジェクター（TR）、基準点や参照点であるランドマーク（LM）の位置関係は、話し手が文脈や意図に応じてどの要素を焦点にするかによって決定される。具体的な文の分析を通じて、話し手の焦点が何であるかを理解することで、トラジェクターとランドマークの関係が明らかになる。TR と LM の関係について、Langacker（1988）は下記の例 1 、2 を提示して、説明した。

1. The knob is above the keyhole.
2. The keyhole is below the knob.

（Langacker 1988: 11）

例文 1「取手はカギ穴の上にある」では、カギ穴の位置が取手の位置を特定する手がかりとして用いられており、話し手の意識は取手とカギ穴の両方に向けられているが、特に取手の位置が焦点となっている。このため、この文において取手はトラジェクター（焦点）の役割を果たし、カギ穴はランドマーク（基準点）として機能している。一方、例文 2「カギ穴は取手の下にある」では、ではこの関係が逆で、取手の位置が最初に特定され、その位置がカギ穴を示す手がかりとされている。その結果、取手がランドマーク、カギ穴がトラジェクターとして捉えられている。以上の二つの例文は同じイメージスキーマで表せられる。下記の図 6 が示したように、丸はモノを表して、点線の矢印は静的な関係を示す。

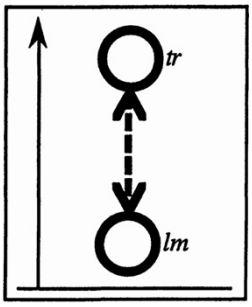

図 6：TR と LM の関係のイメージスキーマ（Langacker 1988: 11）

4 日本語「上がる」の分析

本章では日本語の「上がる」の分析を行う。具体的には、まず「上がる」の意味カテゴリーの分類を紹介する。次は各意味カテゴリーの分析となる。各意味カテゴリーの分析については、現象素の説明、例文の提示、スキーマの分析の順番で分析していく。最後は「上がる」の意味ネットワークを分析する。

4.1 意味カテゴリーの分類

本節では、日本語「上がる」の意味カテゴリーの分類を『日本語多義語学習辞典（動詞編）』（森山 2012：17-23）に参照して分類する。3.1.2 節では参照した辞書について、『日本語多義語学習辞典（動詞編）』（森山 2012：17-23）から「上がる」の 11 種類があることを紹介した。具体的には、「上に移動する」「水の中から陸に移動する」「家・部屋などに入る」「雨・雪などが止む」「目上の人のところに行く」「上の段階に進む」「完成する・終わる」「状態・程度が変化して、数値が大きくなる」「気持ちが高まる」「緊張する」がある。3.1.1 節では、「上がる」の例文 8267 個を BCCWJ コーパスから抽出したことを紹介した。「上がる」の例文を分析した結果、『日本語多義語学習辞典（動詞編）』（森山 2012：17-23）が分類した意味カテゴリーをいくつか修正するところがある。それは「雨・雪などが止む」、「上の段階に進む」、「完成する・終わる」、「状態・程度が変化して、数値が大きくなる」である。どのように、どこを修正するか及び修正理由について、コーパスからの例文を提示して説明する。

まずは、「雨・雪などが止む」や「「完成する・終わる」というカテゴリーについては、合併して「続いていた状態が終わる」に変更する必要がある。下記は BCCWJ から抽出した例 3 個を提示して説明する。

1. 「うね雲」などと呼ばれる層積雲の場合が多い。雨が上がった翌日の朝などによく現われる。（平沼洋司『空を見る』, 筑摩書房, 2001；BCCWJ）
2. 明け方に降りしきった雪は上がり、薄く射す朝日が純白の路上を輝かせていた。（堀和久『天海』, 新人物往来社, 1995; BCCWJ）
3. 従業員の忘年会は二日前にすんでいるし、仕事が上がった者から帰宅することになる。（笹沢左保『紫陽花いろの朝に死す』, 徳間書店, 2001; BCCWJ）

上記の例文からみると、「雨・雪などが止む」という分類は狭義に過ぎると言える。各例文において、「上がる」は物理的な現象だけでなく、状況や活動の終了を表している。なぜならば、例文 1 では、「雨が上がった」という表現から、降っていた雨が止んだこと、すなわち雨という状態が終わったことが読み取れる。例文 2 での「雪は上がり」というフレーズは、降り続いていた雪が止んだ状況を示しており、状態の変化を表現している。例文 3 では、「仕事が上がった」という言い回しは、仕事という活動が終了し、帰宅する時間が始まることを意味する。これらの例から、「雨・雪などが止む」や「完成する・終わる」どちらでも「続いていた状態が終わる」という意味で「上が

る」を理解することが適切であると考えられる。以上の理由で、辞書における「雨・雪などが止む」や「完成する・終わる」というカテゴリーの分類は言語の実際の使用を十分に反映していないため、合併して「続いていた状態が終わる」に変更することが必要である。

次は、「上の段階に進む」というカテゴリーについては、「価値が高い状態になる」に変更する必要がある。なぜならば、下記はBCCWJから抽出した例3個を提示して説明する。

1. 二千四年から二千五年、長ければ二千六年くらいまでは株価も上がり、景気も上向く可能性が高い。（浅井隆『いよいよインフレがやってくる！』,第二海援隊,2004;BCCWJ）
2. 第二点は、消費税が加わっても商品価格が必ずしも上がらない場合もある。（山本雄二郎『消費税こうやればいい：業種別−重大ポイントのつかみ方 すぐわかる図解版 決定版』,青春出版社,1989;BCCWJ）
3. 画像がクリアな方が動体検知の精度が上がるため、中級クラスのカメラを用意しましょう。（レッカ・コミュニケーションズ,SCC ライブラリーズ『Web カメラ活用アイデア箱』,エスシーシー,2003;BCCWJ）

上記の例文からみると、辞書が示す「上の段階に進む」という意味分類は、提供された例文を考慮すると不適切であると言える。これに対し、「価値が高い状態になる」という分類がより適切であると考えられる。例文1では、「株価も上がり、景気も上向く可能性が高い」というフレーズは経済的な価値の向上を指しており、単なる段階の進行を超えた意味合いを持っている。例文2では、「消費税が加わっても商品価格が必ずしも上がらない」という文脈は価格の数値的な増加を示し、ここでも価値の上昇が意味されている。例文3においても、「動体検知の精度が上がる」とは性能の質的な向上を意味しており、これも価値の高まりを表す。以上の点から、「上がる」という動詞の意味カテゴリーを「上の段階に進む」から「価値が高い状態になる」に変更することは、実際の言語使用における表現の意味をより適切に捉えることに繋がる。価値の高い状態になるという解釈は、経済的、技術的、そして質的な向上という広範な文脈に対応可能であり、辞書の分類を更新するには十分な根拠があると言えるだろう。

最後は、「声などが出てくる」というカテゴリーについては、「（物理・抽象な）声が出現する」に変更する必要がある。なぜならば、下記はBCCWJから抽出した例3個を提示して説明する。

1. ベッドに近づくと、駆けつけた看護婦達の間から、悲鳴が上がった。（志賀貢『青春医者のないしょ話』, 角川書店, 1988; BCCWJ）
2. わずかな観衆から不満の叫びが上がった。（ピート・ハミル,沢田博（訳）『イラショナル・レイビングス』, 青木書店, 1989; BCCWJ）
3. 親衛隊から、媚びを含んだ笑い声が上がる。（恩田陸『麦の海に沈む果実』, 講談社, 2004; BCCWJ）

上記の例文からみると、「声などが出てくる」という辞書における分類は、その意味を完全には捉えきれていないため、より適切な意味カテゴリーとして「（物理・抽象な）声が出現する」という表現を変更することが必要である。「ベッドに近づくと、悲鳴が上がった」、「親衛隊から笑い声が上がる」、「観衆から不満の叫びが上がった」の文では、物理的な声として捉えられる。し

かし、「お客様の意見がなかなか上がってこない」の文では、声としての直接的な表現ではなく、お客様の感じている不満や意見が表面に現れる機会を意味している。これらの例から、「上がる」という動詞は、物理的な声が現れるだけでなく、抽象的な意見として現れる場面にも適用されることが分かる。したがって、辞書の分類を「声などが出てくる」から「(物理・抽象な）声が出現する」に変更することで、言葉の使用がより正確に反映されるだろう。

本研究では、『日本語多義語学習辞典（動詞編)』(森山 2012：17-23）のカテゴリーは参照して例文を検討し分類した。その結果、「上がる」の意味カテゴリーを以下の 10 種類に分類できた。

1. 「上に移動する」
2. 「水の中から陸に移動する」
3. 「目上の人の所に行く」
4. 「部屋などに入る」
5. 「数値が大きくなる」
6. 「価値が高い状態になる」
7. 「気持ちが高まる」
8. 「緊張する」
9. 「続いていた状態が終わる」
10. 「(物理・抽象な）声が出現する」

4.2 各意味カテゴリーの分析

本節は日本語の各意味カテゴリーの分析を行う。具体的に、まずは現象素を用いて分析する。その次は、BCCWJ コーパスから抜粋した日本語原文の例を提示する。最後に、各意味カテゴリーの例文の中の移動主体（TR）や参照物（LM）を分析する。

4.2.1「上に移動する」の分析

基本義「上に移動する」の現象素は

- ＜物体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の終点は相対的に物理空間中の上＞
- ＜移動の始点は相対的に物理空間中の下＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. いよいよ説教の時刻になり、修道士（TR）は説教壇（LM）の上に上がった。(『大航海時代叢書』第 2 期 24, 岩波書店, 1990; BCCWJ)
2. 仕事が終わって、私服に着替えて、十六階（LM）終点まで従業員用のエレベーターで上がったんです。(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』, 講談社, 1988; BCCWJ)
3. 懸命に引っ張ったせいで、ようやく怪物みたいに大きなクラッピー（TR）がのたうちながら水面（LM）に上がってきた。(ハウエル・レインズ, 倉本護(訳)『フライフィッシング讃歌』, 晶文社, 1995; BCCWJ)

例文 1 の移動主体（TR）は「修道士」、LM は「説教壇」である。例文 2 の TR は文に明示されていないが「私」、LM は「十六階」である。例文 3 の TR

は「大きなクラッピー」、LM は「水面」である。上記の例によって、移動の対象 TR は生物である。移動の終点 LM は「説教壇」「十六階」のような相対的に空間的な上方である。移動の始点 LM は「水面」のような相対的に下である。従って、上がるの「上に移動する」のイメージスキーマは図 7 のように描かれる。

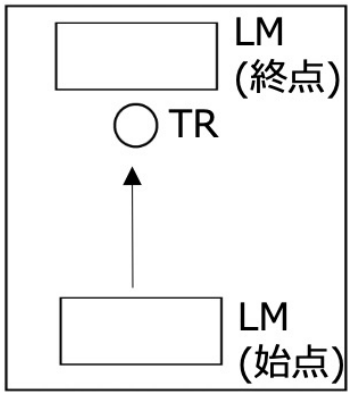

図 7 :「上に移動する」のイメージスキーマ

4.2.2「水の中から陸に移動する」の分析

拡張義「水の中から陸に移動する」の現象素は

- ＜主体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の終点は陸＞
- ＜移動の始点は水の中＞
- ＜移動の始点は相対的に物理空間中の下＞

と考えられる。例を 4 つ提示する。

1. 八ちゃん（TR）というたこが陸（LM）に上がって、人間の服を着て人間のような生活をする。（平野レミ『平野レミのエプロン手帖』, 文化出版局, 1995; BCCWJ ）
2. 三太（TR）は風呂（LM）から上がると、河童おどりを歌いながら線香花火を始めた。（森省三『おばあさんは医学博士』珠玉の巻, 文渓堂, 1995; BCCWJ）
3. 日本の船です。船員（TR）は休暇でみんな陸（LM）に上がっています。（梁石日『族譜の果て』, 徳間書店, 1996; BCCWJ ）
4. 男（TR）はメロヴェを胸に抱き、水辺（LM）に上がった。（榛名しおり『黒き樹海のメロヴェゲルマーニア伝奇』, 講談社, 2002; BCCWJ ）

例文 1 の移動主体（TR）は「八ちゃん」、LM は「陸」である。例文 2 の TR は「三太」、LM は「風呂」である。例文 3 の TR は「船員」、LM は「陸」である。上記の例によって、移動の対象 TR は生物である。移動の終点 LM は「陸」「風呂」のような相対的上である。移動の始点 LM は「水が溜まる場所（水の中）」のような相対的下である。従って、上がるの「水の中から陸に移動する」のイメージスキーマは以下の図 8 ように描かれる。

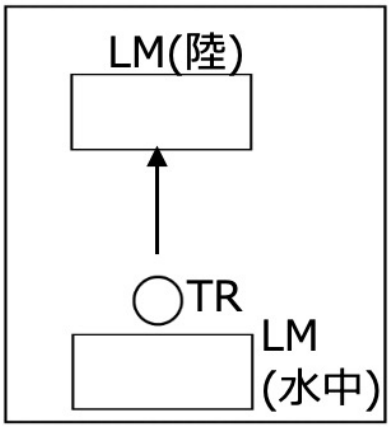

図 8 :「水の中から陸に移動する」のイメージスキーマ

「水の中から陸に移動する」について、陸は比較的に上である。プール、風呂、温泉のような水が溜まる場所は比較的に下である。現象素は同じく物理空間を移動して、終点＝陸（相対的に物理空間中の上)、始点＝水の中（相対的に物理空間中の下)、メタファー的な意味拡張をする。従って、日本語の「水の中から陸に移動する」の意味拡張プロセスの図 9 は以下となる。

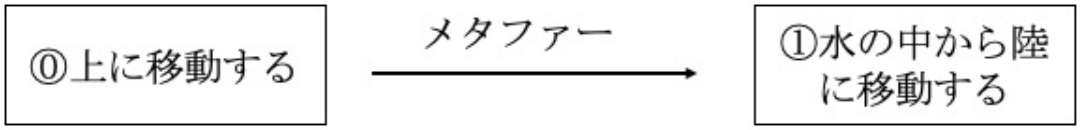

図 9 :「水の中から陸に移動する」の意味拡張プロセス

4.2.3「目上の人の所に行く」の分析

拡張義「目上の人の所に行く」の現象素は

- ＜主体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の終点は相対的に高い地位の人の所＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 三津木先生が、ただいまご多忙中なので、代わってお迎えに上がりました…（辻真先『死体は走るよ国際列車』, 中央公論社, 1987; BCCWJ ）
2. 六時過ぎには終わったと連絡が入ったので超急ぎでお迎えに上がりました。（Yahoo!ブログ, 2008; BCCWJ）
3. あの一左川急便の斉藤（TR）ですが、荷物をお届けにあがりました。（Yahoo!知恵袋, 2005; BCCWJ）

例文 1、2 の移動主体（TR）は「発話者」である。例文 3 の移動主体（TR）は「斎藤」である。例文 1 の LM は「三津木先生のお客がいる場所」である。

例文2のLMは「お客がいる場所」が考えられる。例文3のLMは「顧客の家, 部屋」である。上記の例によって、移動の対象TRは人である。移動の終点は「お客がいる場所」「顧客の家, 部屋」のような相対的地位が上である人のところ。移動の始点相対的地位が下である人。従って、上がるの「目上の人の所に行く」のイメージスキーマは以下の図10のように描けられる。

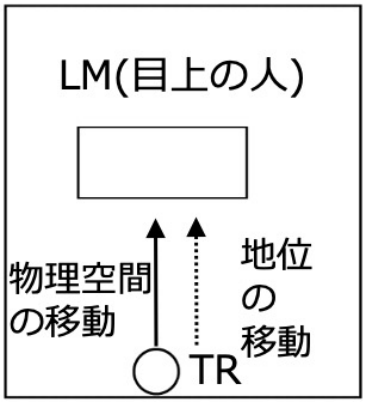

図 10 :「目上の人の所に行く」のイメージスキーマ

「目上の人の所に行く」について、終点＝高い地位の人の所（相対的に物理空間中の上)、HIGH STATUS IS UP（高い位置＝上)、メタファー的な意味拡張をする。従って、日本語の「目上の人の所に行く」の意味拡張プロセスの図11は以下となる。

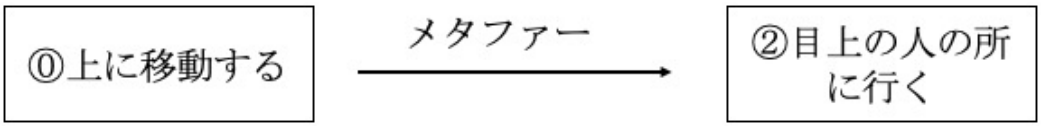

図 11 :「目上の人の所に行く」の意味拡張プロセス

4.2.4「部屋などに入る」の分析

拡張義「部屋などに入る」の現象素は

- ＜主体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の始点は家・部屋の外＞
- ＜移動の終点は家・部屋の中＞

と考えられる。例を3つ提示する。

1. 息子（TR）が寝部屋（LM）に上がった後で、小魚をつつきながら夫は「自分が釣った魚をね、母親…」（渡辺一枝『やさい・くだもの・さかな』, 情報センター出版局, 1988; BCCWJ）
2. そこで、車を駐車場へ入れてから彼女（TR）に電話をかけ、部屋（LM）へ上がって行った…（深谷忠記『横浜・長崎殺人ライン』, 光文社, 1991; BCCWJ）
3. 家（LM）に上がる事が前提の場合は、勿論素足で伺うということは控え

ます。（Yahoo!知恵袋, 2005; BCCWJ）

例文 1 の移動主体（TR）は「息子」、LM は「寝部屋」である。例文 2 の TR は「彼女」、LM は「部屋」である。例文 3 の TR は「発話者」、LM は「家」である。上記の例によって、移動の対象 TR は人である。移動の終点は「家・部屋」のような相対的高い（上の位置）である場所。移動の始点は人がいる位置が下である場所。従って、上がるの「部屋などに入る」のイメージスキーマは以下の図 12 のように描けられる。

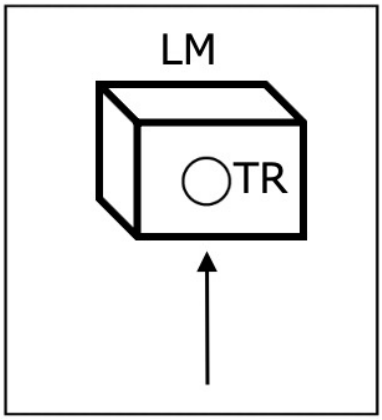

図 12 :「部屋などに入る」のイメージスキーマ

「部屋などに入る」について、家の中が地面より高く、入室時に上下移動を伴う。く物理空間を移動して、終点＝家・部屋の中（相対的に物理空間中の上）、始点＝家・部屋の外（相対的に物理空間中の下）、メタファー的な意味拡張をする。従って、日本語の「部屋などに入る」の意味拡張プロセスの図 13 は以下となる。

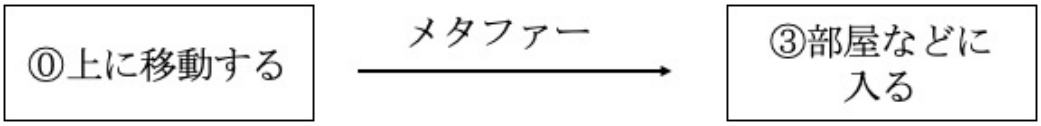

図 13 :「部屋などに入る」の意味拡張プロセス

4.2.5「数値が大きくなる」の分析

拡張義「数値が大きくなる」の現象素は

- ＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞
- ＜移動の終点は相対的に数値が大きい＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 二千四年から二千五年、長ければ二千六年くらいまでは株価（TR）も上がり、景気も上向く可能性が高い。（浅井隆『いよいよインフレがやってくる！』, 第二海援隊, 2004; BCCWJ）

2. 第二点は、消費税が加わっても商品価格（TR）が必ずしも上がらない場合もある。（山本雄二郎『消費税こうやればいい:業種別−重大ポイントのつかみ方 すぐわかる図解版 決定版』, 青春出版社, 1989; BCCWJ）
3. 画像がクリアな方が動体検知の精度（TR）が上がるため、中級クラスのカメラを用意しましょう。（レッカ・コミュニケーションズ, SCC ライブラリーズ『Web カメラ活用アイデア箱』, エスシーシー, 2003; BCCWJ）

例文 1 の TR は「株価」、LM は「発話の時点の株価」である。例文 2 の TR は「商品価格」、LM は「発話の時点の価格」である。例文 3 の TR は「動体検知の精度」、LM は「下級クラスのカメラの物体検知の精度」である。上記の例によって、移動の対象 TR は抽象的な数値である。移動の終点は「値が高い」のような高い（上の位置）である場所。移動の始点は値が低い（下）である状態。従って、上がるの「数値が大きくなる」のイメージスキーマは以下のように図 14 が描けられる。

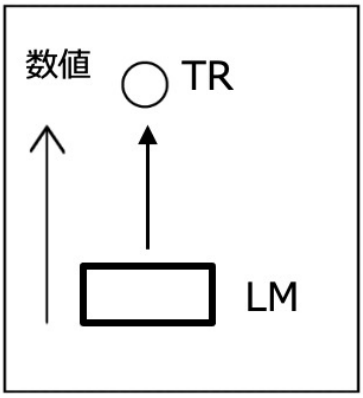

図 14 :「数値が大きくなる」のイメージスキーマ

4.2.6「価値が高い状態になる」の分析

拡張義「価値が高い状態になる」の現象素は

- ＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞
- ＜移動の終点は始点に比べて相対的に価値が高い＞

と考えられる。例を 4 つ提示する。

1. どんなに景気が悪くなっても、自分の持っているおカネの価値（TR）は上がるから、購買力は増えるんですね。(『総合誌（第 35 巻第 8 号)』, 講談社, 2001; BCCWJ）
2. 自民党の独自の要求や戦略も加わり、司法改革（TR）は一気に新たなステージ（LM）に上がってきたということができよう。（大出良知，水野邦夫，村和男『裁判を変えよう市民がつくる司法改革』, 日本評論社, 1999; BCCWJ）
3. 実利を期待しながらも実際にはその効果（TR）があまり上がらない中途半端な投資に終わるものが多かった。（栗林敦子，小豆川裕子『いい女バランス 6 つのベクトルから女性の生き方を読む)』, ダイヤモンド社, 1992;

BCCWJ）

4. 通貨危機の引き金となるヘッジファンドの監視強化を打ち出したが、実効は上がっていない。(『毎日新聞朝刊』, 2001; BCCWJ）

例文 1 の TR は「価値」、LM は「発話の時点の価値（景気が悪くなる前の価値)」である。例文 2 の TR は「司法改革」、LM は「新たなステージ」である。例文 3 の TR は「効果」、LM は「投資開始時点（前）での価値 」である。例文 4 の TR は「実効」、LM は「監視強化を打ち出した時点での監視の程度」である。上記の例によって、移動の対象 TR は抽象的な価値である。移動の終点は「価値が高い」のような高い（上の位置）である場所。移動の始点は価値が低い（下）である状態。従って、上がるの「価値が高い状態になる」のイメージスキーマは以下のように図 15 が描けられる。

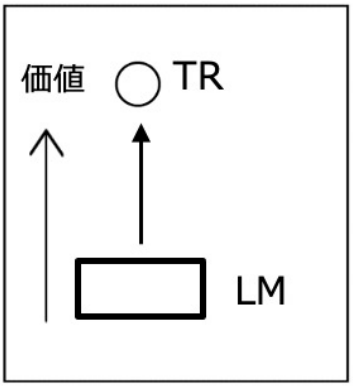

図 15 :「価値が高い状態になる」のイメージスキーマ

「数値が大きくなる」について、「水の中から陸に移動する」について、数値が大きいことは相対的に抽象空間中の上である。MORE IS UP（量が多いこと＝上)、メタファー的な意味拡張をする。数値が大きくなった場合、価値は高くなる場合はよく伴う。メトニミーの拡張が生じる。従って、日本語の「数値が大きくなる」、「価値が高い状態になる」の意味拡張プロセスの図 16 は以下となる。

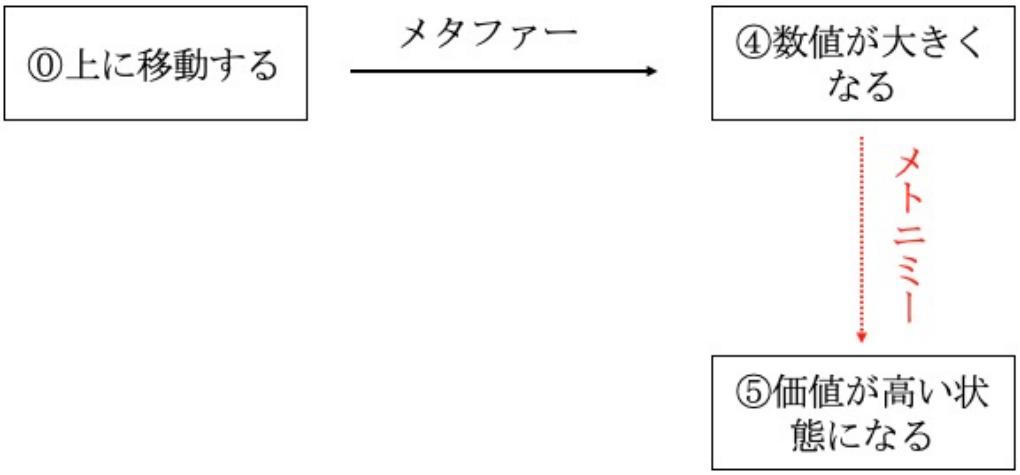

図 16 :「数値が大きくなる」、「価値が高い状態になる」
の意味拡張プロセス

4.2.7 「気持ちが高まる」の分析

拡張義「気持ちが高まる」の現象素は

- ＜心の状態が抽象空間を移動（変化）する＞
- ＜移動の終点は始点に比べて相対的に活性化された状態＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. どうがんばってもテンション（TR）の上がらない時が、人間、誰しもある。（星野亮『異界の森の夢追い人（上）』, 富士見書房, 2002; BCCWJ）
2. テンション（TR）の上がる曲を聴きながら走ると、楽に走れますよ。（Yahoo!知恵袋, 2005; BCCWJ）
3. タミフルの副作用？なのか、なんとなく気持ち（TR）が上がりきらずに、暗く引きこもり生活をしていました。（Yahoo!ブログ 2008; BCCWJ）

例文 1〜2 の移動主体（TR）は「テンション」である。LM は「テンションが穏やかな状態の時」である。例文 3 の TR は「気持ち」、LM は「気持ちが穏やかな状態の時」のような空間である。上記の例によって、移動の対象 TR は抽象的な気分である。移動の終点は「嬉しい状態から身体は上に上がる」のような状態。移動の始点は終点に比べると気分が穏やかな相対的下である状態。従って、上がるの「気持ちが高まる」のイメージスキーマは以下のように図 17 が描けられる。

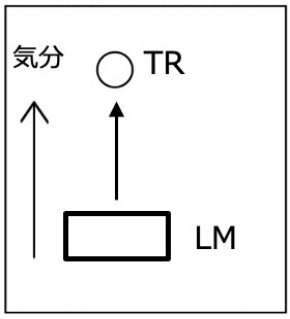

図 17 :「気持ちが高まる」のイメージスキーマ

4.2.8「緊張する」の分析

拡張義「緊張する」の現象素は

- ＜心身の状態が抽象空間を移動（変化）する＞
- ＜移動の終点は始点に比べて相対的に緊張した状態＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 気になる女性の前に行くと上がってしまって、思うように会話が出来ません。（Yahoo!知恵袋, 2005; BCCWJ）
2. 「きんちょうしー」←緊張する人・上がり症の人のことをこのように言いますがこれって関西弁ですか？（Yahoo!知恵袋, 2005; BCCWJ）
3. 自分は人前で上がり性だとか、文章書きは苦手だからといって辞退する人がいます。（新村貢一『個人事業の始め方・儲け方』, ぱる出版, 1998; BCCWJ）

例文 1~3 の移動主体（TR）は「緊張の身体状態（心臓、血圧」である。LM は「通常、安定な状態」である。上記の例によって、移動の対象 TR は抽象的な気分である。移動の終点は「緊張状態から身体が硬くては上に上がる」のような状態。移動の始点は終点に比べると気分が穏やかな相対的下である状態。従って、上がるの「緊張する」のイメージスキーマは以下の図 18 のように描けられる。

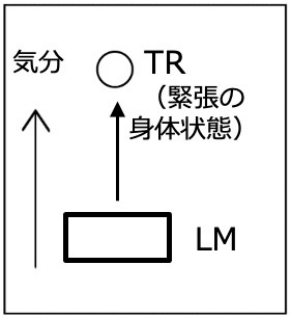

図 18 :「緊張する」のイメージスキーマ

「気持ちが高まる」について、心の活性化された状態は相対的に抽象空間中の上である。HAPPY IS UP（嬉しいこと＝上）、メタファー的な意味拡張をする。人間が嬉しい時、「頭が真っ白になる」状態になる。これは、脳が「普段とは違う」状況を認識して、「いつもの「自分」を忘れている状態。体温が上昇したり、気持ちが高ぶったりしてン精神的にいつもの自分を離れる状態になった。「緊張する」について、人間は緊張した時に、血圧が上がたり、足は地面に上の方向へ離れるになった。このように、2 つの出来事が同時に生じるというメトニミーが成り立つ基盤があるから、そのため本来、物理的な公開状態を表す語によって、その公開状態へ移行する過程で心理的な緊張などがついているような意味になる。従って、日本語の「気持ちが高まる」の意味拡張プロセスの図 19 は以下となる。

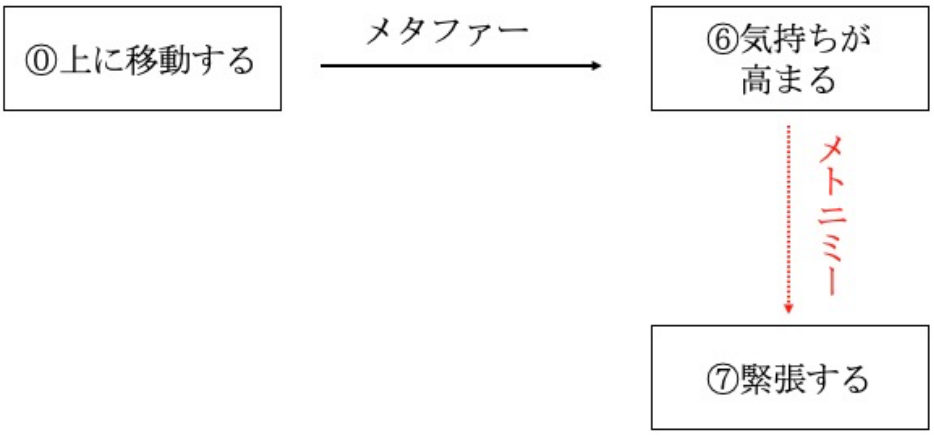

図 **19**：「気持ちが高まる」、「緊張する」の意味拡張プロセス

4.2.9「続いていた状態が終わる」の分析

拡張義「続いていた状態が終わる」の現象素は

- ＜ある状態が変化する＞
- ＜変化の前にはある状態が続いていた＞
- ＜変化の後にはある状態が終わった＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 「うね雲」などと呼ばれる層積雲の場合が多い。雨（TR）が上がった翌日の朝などによく現われる。（平沼洋司『空を見る』, 筑摩書房, 2001; BCCWJ）
2. 明け方に降りしきった雪（TR）は上がり、薄く射す朝日が純白の路上を輝かせていた。（堀和久『天海』, 新人物往来社, 1995; BCCWJ）
3. 従業員の忘年会は二日前にすんでいるし、仕事（TR）が上がった者から帰宅することになる。（笹沢左保『紫陽花いろの朝に死す』, 徳間書店, 2001; BCCWJ）

例文 1 ~ 3 の移動主体（TR）は「雨、雪、仕事」であり、LM は「雨が降っている状態、雪が降っている状態仕事をしている状態」である。上記の例によって、移動の始点 LM は続いているもの。移動の終点は終わる状態。従って、上がるの「続いていた状態が終わる」のイメージスキーマは以下のように図 20 が描けられる。

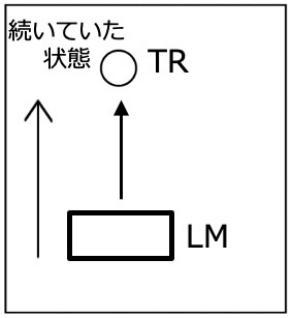

図 **20**：「続いていた状態が終わる」のイメージスキーマ

4.2.10「(物理・抽象な）声が出現する」の分析

拡張義「(物理・抽象な）声が出現する」の現象素は

- ＜隠れた状態が物理空間を移動する＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. ベッドに近づくと、駆けつけた看護婦達の間から、悲鳴（TR）が上がった。(志賀貢『青春医者のないしょ話』, 角川書店, 1988; BCCWJ)
2. わずかな観衆から不満の叫び（TR）が上がった。(ピート・ハミル,沢田博(訳)『イラショナル・レイビングス』, 青木書店, 1989; BCCWJ)
3. 親衛隊から、媚びを含んだ笑い声が上がる。(恩田陸『麦の海に沈む果実』, 講談社, 2004; BCCWJ)

例文 1 ~ 3 の移動主体（TR）は「悲鳴、不満の叫び、笑声」であり、LM は「声を出す一連の身体器官」である。上記の例によって、移動の始点は声が隠れた状態。移動の始点は声が出る状態。従って、上がるの「(物理・抽象な）声が出現する」のイメージスキーマは以下のように図 21 が描けられる。

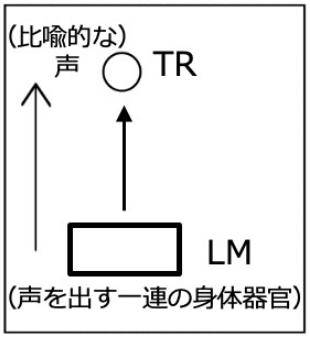

図 21 :「(物理・抽象な）声が出現する」のイメージスキーマ

「続いていた状態が終わる」について、「仕事が上がった」を例に、仕事が終わったら楽になる（良いこと＝上、嬉しい＝上）により、メタファー的拡張が生じる。「雨が上がる」「原稿が上がる」という一連の状態の変化は「完了の状態」の部分を強調する。これによりメトニミーが生じる。「(物理・抽象な）声が出現する」について、状態の終わりは、物事の出現することを伴う。隠れた状態を重要視されて、顕在化になる。時間的な領域に投射して、時間的な隣接性が考えられて、メトニミー的な意味拡張をした。従って、日本語の「続いていた状態が終わる」、「(物理・抽象な）声が出現する」の意味拡張プロセスの図 22 は以下となる。

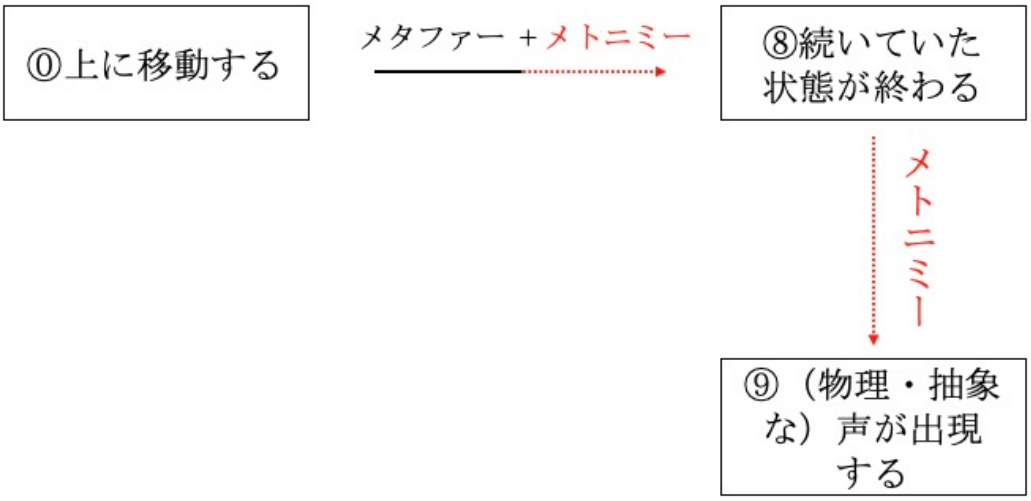

図 22：「続いていた状態が終わる」、「（物理・抽象な）声が出現する」の意味拡張プロセス

4.3「上がる」意味拡張ネットワークの分析

意味拡張ネットワークは以下なような図 23 を描いた。赤い点線はメトニミー拡張を指す。黒い線はメタファー拡張を指す「上に移動する」というカテゴリーはプロトタイプ意味（基本義)、他のカテゴリーは拡張義である。

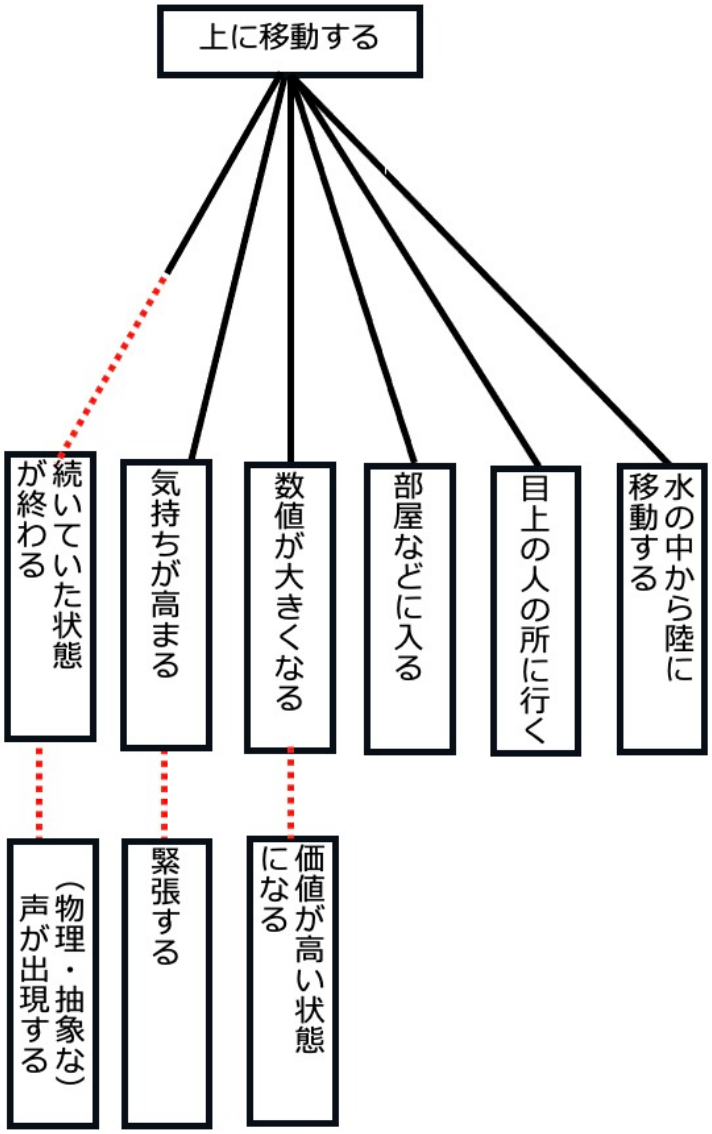

図 **23**：「上がる」の意味ネットワーク

5 中国語「上（Shàng）」の分析

本章では中国語の「上（Shàng）」の分析を行う。具体的には、まず「上がる」の意味カテゴリーの分類を紹介する。次は各意味カテゴリーの分析となる。各意味カテゴリーの分析については、現象素の説明、 例文の提示 、スキーマの分析の順番で分析していく。最後は「上（Shàng）」の意味ネットワークを分析する。

5.1 意味カテゴリーの分類

本節では、中国語「上（Shàng）」の意味カテゴリーの分類を『現代漢語八百詞（第 5 巻）』（呂　2002：356-358）に参照して分類する。3.1.2 節では参照した辞書について、『現代漢語八百詞（第 5 巻）』（呂 2002：356-358）から「上（Shàng）の自動詞の 6 種類意味カテゴリーがあることを紹介した。具体的には、「由低处到高处（上に移動する）」「向前进（前に進む）」、「出场（登場）」、「登载（載る）」、「到规定时间开始日常工作或学习等（一定の時間に経常的な活動をする）」、「达，到一定数量或程度（ある数量，程度に達する）」がある。3.1.1 節では、「上がる」の例文 1 万個を BCCWJ コーパスから抽出したことを紹介した。中国語「上（Shàng）」の例文を分析した結果、『現代漢語八百詞（第 5 巻）』（呂 2002：356-358）が分類した意味カテゴリーを 2 つ修正するところがあり、意味カテゴリーを 2 つ追加することが必要である。それは「向前进（前に進む）」、「出场（登場）」を修正して、「トイレに行く」、「交通機関に乗る」という意味カテゴリーを追加することである。どのように、どこを修正するか及び修正理由について、コーパスからの例文を提示して説明する。

まずは、「向前进（前に進む）」というカテゴリーについては、「困難に対処する」に変更する必要がある。下記は BCC から抽出した例 3 個を提示して説明する。

1. 每当 团队 遇到 障碍， 他 都 会 毫不 犹豫地 上。
   whenever team-NOM encounter difficulty-OBJ, he all will without any hesitate-ADV do.
   ‘ Whenever the team encounters an obstacle, he will do it without any hesitation .’
2. 这个 项目 充满 了 挑战， 但 我 决心 上， 克服 所有 困难。
   this-CL project-NOM full of-PERF challenge-OBJ, but I determined do, overcome. all difficulties-OBJ.
   ‘ This project is full of challenges, but I am determined to do it and overcome all difficulties .’
3. 虽然 前方 是 未知的 领域， 但 探险者 依旧 勇敢地 上 了。although ahead be unknown‘s field-OBJ, but explorer-NOM still bravely do PERF.
   ‘ Although ahead lies an unknown field, the explorer still goes on bravely .’

上記の例文からみると、「上」という動詞に関して、辞書では「向前进（前に進む）」と分類されているが、これを「困難に対処する」という意味カテゴリーに変更するべきである。なぜならば、例文 1 では、「每当团队遇到障碍，他

都会毫不犹豫地上」（チームが障害に遭遇するたび、彼は躊躇なく行動する）という最初の例文では、「上」は障害に直面した際の行動や決意を示しており、これは物理的な前進よりも、困難に立ち向かう意味が強い。例文 2「这个项目充满了挑战，但我决心上，克服所有困难」（このプロジェクトは挑戦に満ちているが、私は決心して行動し、すべての困難を克服する）とある二番目の例文では、「上」は挑戦を受け入れ、困難を克服する決意を表しており、これも単なる前進ではなく、具体的な困難への対応を意味している。例文 3「虽然前方是未知的领域，但探险者依旧勇敢地上了」（前方には未知の領域があるが、探検家は依然として勇敢に前進する）という三番目の例文では、「上」は未知への進出よりも、未知の状況に果敢に挑む勇気を示している。これらの例文を通じて、「上」は物理的な移動や進行を指すのではなく、困難や挑戦、未知の状況に対する積極的な取り組みや決意を表すことがわかる。したがって、「前に進む」よりも「困難に対処する」が適切な意味カテゴリーである。

次は、「出场（登場）」というカテゴリーについては、「人前の空間に出る」に変更する必要がある。なぜならば、下記は BCC から抽出した例 3 個を提示して説明する。

1. 演员们 一到 戏剧 开始 的 时间 就要 从 后台 上。
   actors-NOM once-reach drama-NOM start-GEN time-NOM must from backstage. enter
   ‘As soon as it‘s time to start the play, the actors must go on from backstage.’
2. 开幕式 上， 主持人 走 上 舞台， 开始 了 仪式。
   opening-NOM on, host-NOM walk onto stage-NOM, begin-PERF ceremony-OBJ
   ‘At the opening ceremony, the host walks onto the stage and starts the ceremony.’
3. 演讲者 在 会议 开始 时 立刻 上 台 发言。
   speaker-NOM at conference-NOM start time-NOM immediately onto platform-NOM speak
   ‘The speaker immediately goes onto the platform to speak when the conference. starts.’

上記の例文からみると、辞書で「上」という動詞が「出场（登場する）」と分類されているが、「人前の空間に出る」という意味カテゴリーの方が適切だと考える。例文 1「演员们一到戏剧开始的时间就要从后台上」（演劇が始まる時間になると、俳優たちは後方から舞台に出なければならない）という文では、「上」はただ登場する以上の意味を持ち、観客の前に出る行動を指している。例文 2「开幕式上，主持人走上舞台，开始了仪式」（開幕式で、司会者が舞台に歩いて上がり、式を始める）という文も、司会者が単に登場するのではなく、人前で特定の行事を開始することを示している。例文 3「演讲者在会议开始时立刻上台发言」（会議が始まるとすぐに、演説者が台に上がって話し始める）という文では、「上台」は公の場で話すために特定の空間に出る行動を表しており、単なる登場を超える意味を持っている。これらの文から、「上」という動詞は、人が物理的な場所に登場する以上に、公の場で何かしらの行動を始めるために人前の空間に出ることを意味していることがわかる。そのため、「登場」よりも「人前の空間に出る」という意味カテゴリーがより適していると言える。

最後は、「トイレに行く」、「交通機関に乗る」というカテゴリー追加する必要がある。なぜならば、下記は BCC から抽出した例 4 個を提示して説明する。

1. 睡觉　前　　再 感叹 一 句，我 真的 讨厌 冬天 爬 起来 上 厕所。
   Sleep before again exclaim one sentence, I really dislike winter climb out go toilet.
   ‘Before sleep, once again expressing, I truly dislike climbing out of bed to go to the toilet in winter.’
2. 赵大明见并不是要斗他，心里高兴，欣然应允，“我上上厕所就来”。
   Zhao Da Ming see and not BE want fight he, heart inside happy, gladly agree, "I go go toilet then come.
   'Zhao Da Ming saw that there was no intention to fight with him, felt happy inside, and gladly agreed, saying, "I will come after I go to the toilet.'公交车 上 … 一 个 老 奶奶 上 车 … 往 后 走 的 时候 司机 一 个 急 刹车 … 老 奶奶 摔 倒 在 投币箱 下面 …（BCC）
3. 公交车 上 … 一 个 老 奶奶 上 车 … 往 后 走 的 时候 司机 一 个 急 刹车 … 老 奶奶 摔 倒 在 投币箱 下面 …（BCC）
   bus on ... one CL elderly grandma board bus ... toward back walk GEN time driver one CL sudden brake ... elderly grandma fall down at coin- box under ...
   ‘On the bus... an elderly grandma got on... as she was walking towards the back, the driver suddenly braked... the grandma fell down near the coin box... .’

4. 斯科特 每天 要 进行 一 系列 的 潜水 ，在 只 有 3 摄氏度 左右 的 水 里 呆 上 4 个 小时 ，每 隔 一 段 时间 ，他 就 得 上 船 补充 氧气 和 休息 。（BCC）
   Scott everyday must carry out one series GEN diving, in only have 3 Celsius about GEN water in stay for 4 CL hours, every interval one CL time, he then must board ship replenish oxygen and rest .’
   ‘ Scott has to do a series of dives every day, staying in the water at about 3 degrees Celsius for 4 hours, and every so often, he needs to get back on the ship to replenish oxygen and rest .’

上記の例文からみると、辞書におけるない意味カテゴリーは、「トイレに行く」や「交通機関に乗る」という意味カテゴリーを追加することが必要である。実際の使い方として「トイレに行く」や「交通機関に乗る」という意味で使われることが多い。なぜならば、これらの意味での「上」の使用例を見てみるとわかる。例文 1「睡觉前再感叹一句，我真的讨厌冬天爬起来上厕所」の文は、「寝る前にもう一度ため息をついて、冬にベッドから出てトイレに行くのが本当に嫌だ」という意味だ。ここでの「上厕所」は「トイレに行く」という行動を指している。例文 2「赵大明见并不是要斗他，心里高兴，欣然应允，“我上上厕所就来”」では、「赵大明は喧嘩するつもりがないとわかってホッとして、喜んで「トイレに行ってから来る」と言った」となる。「上厕所」も同じく「トイレに行く」という意味である。例文 3「公交车上…一个老奶奶上车…往后走的时候司机一个急刹车…老奶奶摔倒在投币箱下面…」という文では、「バスに乗っていたおばあさんが後ろに歩いていたら、運転手が急ブレーキをかけて、おばあさんがコインボックスの下に転んだ」という出来事

を描いている。ここでの「上车」は「バスに乗る」という意味で使われている。例文 4「斯科特每天要进行一系列的潜水，在只有 3 摄氏度左右的水里呆上 4 个小时，每隔一段时间，他就得上船补充氧气和休息」という文では、「スコットは毎日潜水をして、約 3 度の水中で 4 時間過ごした後、定期的に船に戻って酸素と休息をとる」という状況を説明している。「上船」はここで「船に乗る」と解釈される。以上の文脈から、「上」は場所に行くことや乗り物に乗ることを示していて、「トイレに行く」や「交通機関に乗る」という意味で分類するのが妥当だと言える。

結果として、「上（Shàng）」の意味カテゴリーの分類は「上に移動する」「トイレに行く」「交通機関に乗る」「ある数量，程度に達する」「困難に対処する」「規定の時間に経常的な活動をする」「人前の空間に出る」「「記事やリストに載る」という 8 種類カテゴリーに修正した。

本節では、中国語「上（Shàng）」の意味カテゴリーを分析した。『現代漢語八百詞（第 5 巻）』（呂 2002：356-358）のカテゴリーは参照して例文を検討し分類した。その結果、「上（Shàng）」の意味カテゴリーを以下の 8 種類に分類した。

1. 「上に移動する」
2. 「トイレに行く」
3. 「交通機関に乗る」
4. 「ある数量，程度に達する」
5. 「困難に対処する」
6. 「規定の時間に経常的な活動をする」
7. 「人前の空間に出」
8. 「記事やリストに載る」

5.2 各意味カテゴリーの分析

本節は中国語の各意味カテゴリーの分析を行う。具体的に、まずは現象素を用いて分析する。その次は、、BCC コーパスから抜粋した中国語原文、グロス英訳の順番で例を提示する。最後に、各意味カテゴリーの例文の中の移動主体（TR）や参照物（LM）を分析する。

5.2.1「上に移動する」の分析

基本義「上に移動する」の現象素は

- ＜物体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の終点は相対的に物理空間中の上＞
- ＜移動の始点は相対的に物理空間中の下＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 大家 学着 港方 人员 那样， 走路 带 小跑， **上楼** 一步 几个 台阶， 说话 简明扼要， 把 时间 花 在 工作 上、 事业 上…… 许多 新 观念 就这样 悄悄地 注入 到 职工 的 意识 之 中。（『人民日报』, 1988; BCC）
   everyone learn-GER HongKong-side personnel that-way, walk carry little-run, **climb stairs** one-step several stair, speak concise-to-the-point, OBJ time spend on

work LOC, career LOC... many new concept thus quietly infuse to workers POS consciousness LOC middle.

‘ Everyone is learning from the Hong Kong staff to walk briskly, to take several steps at a time when going upstairs, to speak concisely and to the point, spending time on work and careers... Many new ideas are thus quietly infused into the consciousness of the staff.’

2. 他 带领 战士 **上山** 打 柴， 从此 连队 做饭 不再 烧 煤。(『人民日报』, 1996; BCC)

he lead soldiers **climb mountain** chop firewood, from this point on company cook not again burn coal.

‘ He led the soldiers up the mountain to gather firewood, and from then on, the unit no longer used coal for cooking.’

3. 先 上坡，再 上 8 楼， 出来 再 **上坡**, 然后 兜来兜去, 在 楼里楼外 穿来穿去, 到 了 4 楼，然后 上 5 楼，才 到 了.....（微博; BCC）

first climb-slope, then climb 8 floors, come out then **climb slope** again, afterwards go-around-and-around, at inside-building-outside-building go-through-and-through, arrive ASP 4 floors, afterwards climb 5 floors, only then arrive ASP.....

‘First go up the slope, then up to the 8th floor, come out and go up the slope again, then wander around, moving in and out of the building, reach the 4th floor, then go up to the 5th floor, and only then arrive.....’

例文 1 ~ 3 の移動主体（TR）は「人」であり、LM は「ビル、山、坂」である。上記の例によって、移動の対象 TR は人である。移動の終点は「ビル、山、坂」のような相対的高い（上の位置）である場所。移動の始点は人がいる位置が下である場所。従って、上がるの「上に移動する」のイメージスキーマは以下のように図 24 が描けられる。

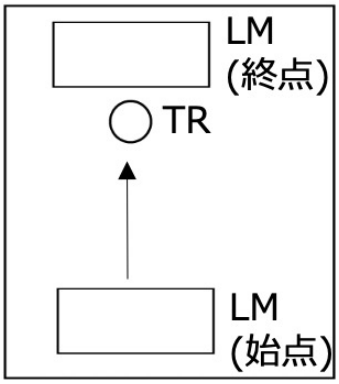

図 24 :「上に移動する」のイメージスキーマ

5.2.2「トイレに行く」の分析

拡張義「トイレに行く」の現象素は

- ＜主体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の終点はトイレがある場所＞
- ＜トイレがある場所は始点に比べて相対的に物理空間中の上＞

と考えられる。例を 2 つ提示する。

1. 睡觉 前 再 感叹 一 句，我 真的 讨厌 冬天 爬 起来 **上 厕所**。（莫应丰『将军吟』; BCC）

Sleep before again exclaim one sentence, I really dislike winter climb out **go toilet**.

'Before sleep, once again expressing, I truly dislike climbing out of bed to go to the toilet in winter.'

2. 赵 大明 见 并 不是 要 斗他，心里高兴，欣然应允，“我 上 **上 厕所** 就来”。（莫应丰『将军吟』; BCC）

Zhao Da Ming see and not BE want fight he, heart inside happy, gladly agree, "I go **go toilet** then come.

'Zhao Da Ming saw that there was no intention to fight with him, felt happy inside, and gladly agreed, saying, "I will come after I go to the toilet.'

例文 1、2 の移動主体（TR）は「私、趙さん」であり、LM は「トイレ」である。上記の例によって、移動の対象 TR は人である。移動の終点は「トイレ」は相対的高い（上の位置）である場所。移動の始点は人がいる位置が下である場所。従って、上がるの「トイレに行く」のイメージスキーマは以下のように図 25 が描けられる。

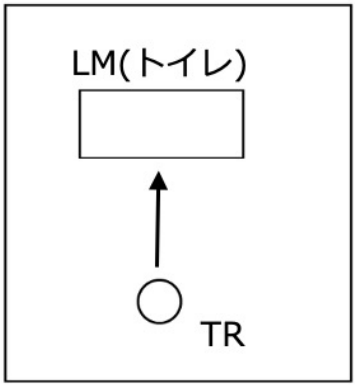

図 25 :「トイレに行く」のイメージスキーマ

「トイレに行く」について、排泄活動は体の健康と密接な関係があって、健康は通常「上」という状態が考えられる。HEALTH AND LIFE ARE UP（健康と生命は上）。従って、中国語の「トイレに行く」の意味拡張プロセスの図 26 は以下となる。

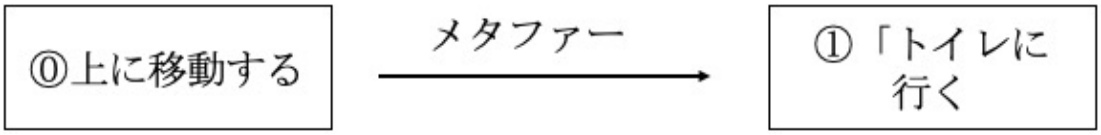

図 26 :「トイレに行く」の意味拡張プロセス

5.2.3「交通機関に乗る」の分析

拡張義「交通機関に乗る」の現象素は

- ＜主体が物理空間を移動する＞
- ＜移動の終点は交通機関＞
- ＜移動の始点は交通機関の外＞

と考えられる。例を 2 つ提示する。

1. 公交车 上 … 一 个 老 奶奶 **上 车** … 往 后 走 的 时候 司机 一 个 急 刹车 … 老 奶奶 摔 倒 在 投币箱 下面 …（微博;BCC）
   bus on ... one CL elderly grandma **board bus** ... toward back walk GEN time driver one CL sudden brake ... elderly grandma fall down at coin- box under ...
   ‘On the bus... an elderly grandma got on... as she was walking towards the back, the driver suddenly braked... the grandma fell down near the coin box... .’
2. 斯科特 每天 要 进行 一 系列 的 潜水 ，在 只 有 3 摄氏度 左右 的 水 里 呆 上 4 个 小时 ，每 隔 一 段 时间 ，他 就 得 **上 船** 补充 氧气 和 休息 。(『都市快讯』,2003;BCC）
   Scott everyday must carry out one series GEN diving, in only have 3 Celsius about GEN water in stay for 4 CL hours, every interval one CL time, he then must **board ship** replenish oxygen and rest .’
   ‘ Scott has to do a series of dives every day, staying in the water at about 3 degrees Celsius for 4 hours, and every so often, he needs to get back on the ship to replenish oxygen and rest .’

例文 1 の移動主体（TR）は「お婆さん」であり、LM は「車」である。例文 2 の LM は「Scott さん」であ理、LM は「船」である。上記の例によって、移動の対象 TR は人である。移動の終点は「交通機関」は相対的高い（上の位置）である場所。移動の始点は人がいる位置が下である場所。従って、上がるの「交通機関に乗る」のイメージスキーマは以下のように図 27 が描けられる。

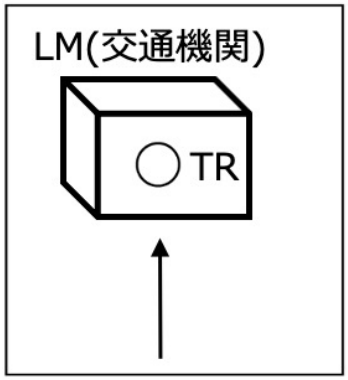

図 27 :「交通機関に乗る」のイメージスキーマ

「交通機関に乗る」について、車や船、飛行機などの交通機関の内部は外部に比べて高い位置にあるため、「上」という言葉を使用して乗り込む動作を表す。「高い位置」は「上」にマッピングすることを考えられて、メタファー

的な拡張をする。従って、中国語の「交通機関に乗る」の意味拡張プロセスの図 28 は以下となる。

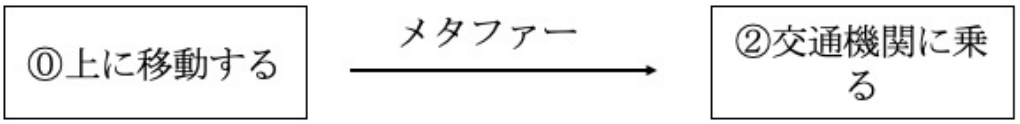

図 28：「交通機関に乗る」の意味拡張プロセス

5.2.4「ある数量，程度に達する」の分析

拡張義「ある数量，程度に達する」の現象素は

- ＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞
- ＜移動の終点は相対的に数値が大きい＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 上了　年纪。(BCC)
   Get-PST age.
   'Getting older.'
2. 走了　上百里　路。(BCC)
   Walk-PST hundred miles road.
   'Covered a distance of over a hundred miles.'
3. 人数　已上了　一万。(BCC)
   population surpass-PST ten thousand.
   'The population has surpassed ten thousand.'

例文 1～3 の移動主体（TR）は「人間」であり、LM は「程度・数量に達した時」である。上記の例によって、移動の対象 TR は抽象的な数量・程度である。移動の終点は「価値が高い」のような高い（上の位置）である場所。移動の始点は価値が低い（下）である状態。従って、上がるの「ある数量，程度に達する」のイメージスキーマは以下のように図 29 が描けられる。

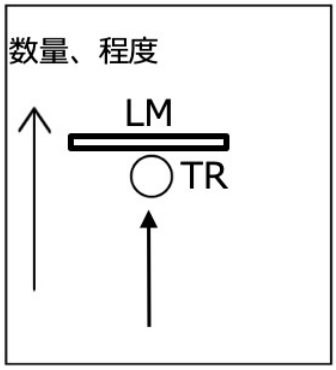

図 29：「ある数量，程度に達する」のイメージスキーマ

「ある数量，程度に達する」について、数値が大きいことは相対的に抽象空間中の上である。MORE IS UP（量が多いこと＝上)、メタファー的な意味拡張をする。従って、中国語の「ある数量，程度に達する」の意味拡張プロセスの図 30 は以下となる。

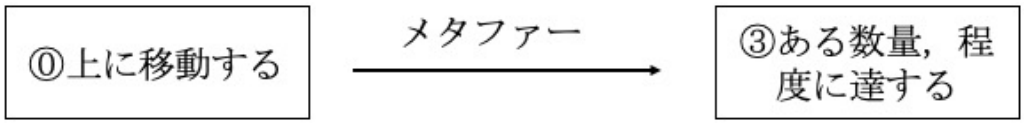

図 30 :「ある数量，程度に達する」の意味拡張プロセス

5.2.5「困難に対処する」の分析

拡張義「困難に対処する」の現象素は

- ＜主体がある状態空間を移動する＞
- ＜移動の始点はある行為をしていない状態＞
- ＜移動の終点はある行為をした状態＞
- ＜行為は緊急事態・困難に伴う＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 每当 团队 遇到 障碍， 他 都 会 毫不 犹豫地 上。(BCC)
   whenever team-NOM encounter difficulty-OBJ, he all will without any hesitate-ADV **do**.
   ‘ Whenever the team encounters an obstacle, he will do it without any hesitation .’
2. 这个 项目 充满 了 挑战， 但 我 决心 上， 克服 所有 困难。(BCC)
   this-CL project-NOM full of-PERF challenge-OBJ, but I determined **do**, overcome. All difficulties-OBJ.
   ‘ This project is full of challenges, but I am determined to do it and overcome all difficulties .’
3. 虽然 前方 是 未知的 领域， 但 探险者 依旧 勇敢地 上 了。(BCC)
   although ahead be unknown‘s field-OBJ, but explorer-NOM still bravely **do** PERF.
   ‘ Although ahead lies an unknown field, the explorer still goes on bravely .’

例文 1 ~ 3 の移動主体（TR）は「彼、私、探検家」であり、LM は「困難がない状態」である。上記の例によって、移動の始点は困難がある状態である。移動の終点は困難がない状態である。従って、上がるの「困難に対処する」のイメージスキーマは以下の図 31 ように描けられる。

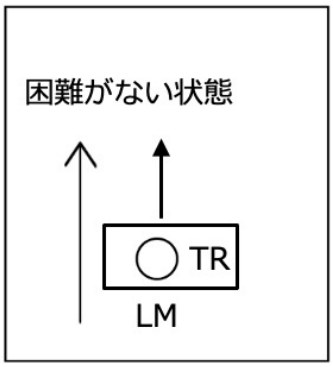

図 31：「困難に対処する」のイメージスキーマ

「困難に対処する」について、困難・緊急事態を解決することは価値があることはいいこと。解決の状態に向かう、因果関係（やったら解決可能性が高い）、メトニミーが生じる。従って、中国語の「困難に対処する」の意味拡張プロセスの図 32 は以下となる。

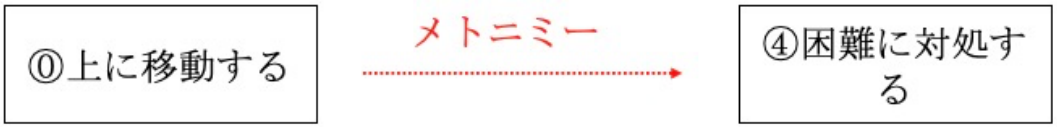

図 32：「困難に対処する」の意味拡張プロセス

5.2.6「規定の時間に経常的な活動をする」の分析

拡張義「規定の時間に経常的な活動をする」の現象素は

- ＜何かの状態が抽象空間を移動（変化）する＞
- ＜移動の終点は始点に比べて相対的に価値が高い＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 你 来 得 正好， 如果 不 耽搁 明天 **上 课**， 就 请 你 住 上 一 宿。（BCC）
   you-NOM come-AUX DEG just-in-time, if NEG delay tomorrow **attend**-V class-OBJ, then invite-V you-ACC stay-V for one-M-CL night-OBJ
   ‘You arrive just in time. If it doesn‘t delay the class tomorrow, then I invite you to stay for a night.’

2. 每个月 总 有 那么 三十几 天 不 想 **上 班**。(BCC)
   every-M month always exist so thirty-some days-OBJ NEG want-V **attend**-V work-OBJ
   ‘Every month, there are always around thirty days when I don‘t feel like going to work.’
3. 语文 课 还 上 不 **上**？（BCC）
   Chinese class still attend-ADV NEG-**attend**-Q
   ‘Does we still attend the Chinese class or not?’

例文 1～3 の移動主体（TR）は「発話者」であり、LM は「公的な状態」である。上記の例によって、移動の始点は授業・仕事の場のような公的な状態には入ってなかったこと。移動の終点は終公的な状態に入っていること。従って、上がるの「規定の時間に経常的な活動をする」のイメージスキーマは以下のように図 33 が描けられる。

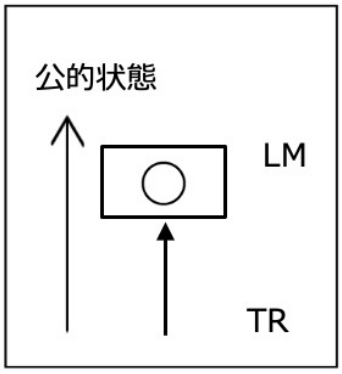

図 33 :「規定の時間に経常的な活動をする」のイメージスキーマ

5.2.7「人前の空間に出る」の分析

拡張義「人前の空間に出る」の現象素は

- ＜主体がある状態空間を移動する＞
- ＜移動の始点は人前の空間に入っていない状態＞
- ＜移動の終点は人前の空間に入っていた状態＞
- ＜聴衆や観客がいる＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 演员们 一到 戏剧 开始 的 时间 就要 从 后台 **上**。(BCC)
   actors-NOM once-reach drama-NOM start-GEN time-NOM must from backstage **enter**
   'As soon as it's time to start the play, the actors must go on from backstage.'
2. 开幕式 上， 主持人 **走 上** 舞台， 开始 了 仪式。(BCC)
   opening-NOM on, host-NOM **enter** stage-NOM, begin-PERF ceremony-OBJ
   'At the opening ceremony, the host walks onto the stage and starts the ceremony.'
3. 演讲者 在 会议 开始 时 立刻 **上 台** 发言。(BCC)
   speaker-NOM at conference-NOM start time-NOM immediately **enter**-NOM speak
   'The speaker immediately goes onto the platform to speak when the conference. Starts.'

例文 1 ~ 3 の移動主体（TR）は「俳優さんたち、司会、講演者」であり、LM は「人前の空間」である。例文 1 ~ 3 の移動主体（TR）は「発話者」であり、LMは「公的な状態」である。上記の例によって、移動の始点は人前の場のような公的な状態には入っていないこと。移動の終点は人前の空間に入ったこと。従って、上がるの「人前の空間に出る」のイメージスキーマは以下のように図 34 が描けられる。

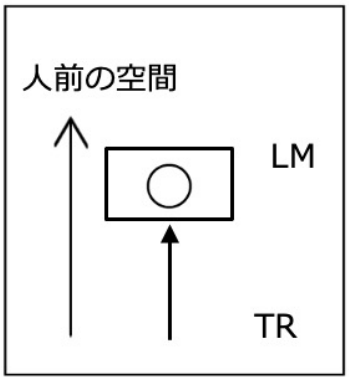

図 34 :「人前の空間に出る」のイメージスキーマ

「規定の時間に経常的な活動をする」について、移動の部分背景化される。公的な活動をするという活動の動作を強調して、メトニミーが生じる。「人前の空間に出る」について、「規定の時間に経常的な活動をする」と同じく公的な状態の類似性が生じたので、メタファー的な拡張をする。従って、中国語の「規定の時間に経常的な活動をする」、「人前の空間に出る」の意味拡張プロセスの図 35 は以下となる。

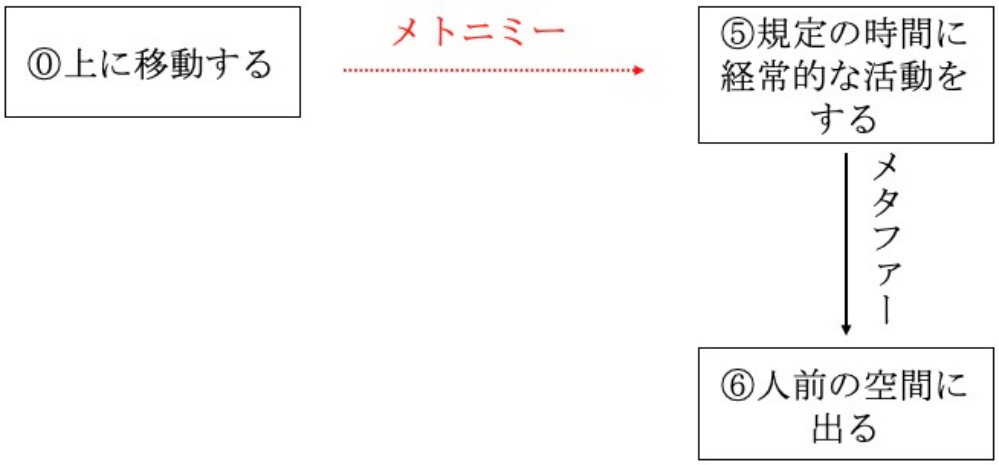

図 35 :「規定の時間に経常的な活動をする」の意味拡張プロセス

5.2.8「記事やリストに載る」の分析

拡張義「記事やリストに載る」の現象素は

- ＜ものが物理空間を移動する＞
- ＜ものがほかの媒体の表面につく＞
- ＜移動の終点である媒体の表面は通常物体（材料）の上面＞

と考えられる。例を 3 つ提示する。

1. 演员、导演 上 电视 、上 电台，参加 各项 公开 活动。（岑凯伦『紫色的月亮』, 1990; BCC）

actors, directors appear on TV, appear on radio, participate in all kinds public activities.

'Actors and directors appear on TV and radio, participating in various public activities.'

2. 你们 给 我们 曝 一曝 光 吧， 我们 不 怕 上 报纸。(『福建日报』, 2006; BCC)

you-PL give us expose one-expose light SFP, we not fear appear newspaper

'Please give us a chance to be exposed, we are not afraid of appearing in the newspaper.'

3. 让 诚信 企业 上 光荣榜，让 失信 企业 上 "黑名单"。(『人民日报』,2002; BCC)

let honest enterprise appear on honor-list, let dishonest enterprise appear on "blacklist"

'Let the honest enterprises be put on the honor roll, and let the dishonest ones be put on the 'blacklist'..'

例文 1 の移動主体（TR）は「俳優、監督」であり、LM は「テレビ」である。例文 2 の移動主体（TR）は「私たち」であり、LM は「新聞」である。例文 3 の移動主体（TR）は「政府・人民・公衆など」が考えられて、LM は「名誉名簿、ブラックリスト」である。上記の例によって、移動の始点は媒体（新聞、テレビ、リストのようなものが載せられる媒体）につけられない状態である。移動の終点は媒体につけられている状態である。従って、上がるの「記事やリストに載る」のイメージスキーマは以下のように図 36 が描けられる。

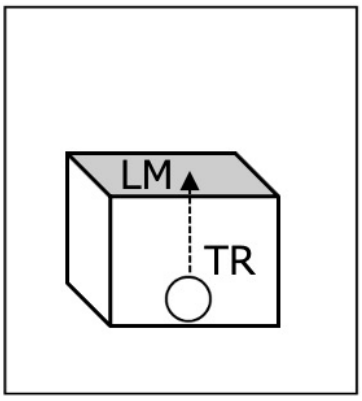

図 36 :「記事やリストに載る」のイメージスキーマ

「記事やリストに載る」について「栄誉リスト載る」は自分の名前は栄誉リストに載せて、名前は「栄誉リスト」の正面である。つまり、正面は「上」にマッピングすることを考えられて、メタファー的な意味拡張をする。ある人の名前や事績が載るということである（結果)。原因と結果の隣接性があって、メトニミー的な意味拡張も生じる。従って、中国語の「記事やリストに載る」の意味拡張プロセスの図 37 は以下となる。

図 **37** :「記事やリストに載る」の意味拡張プロセス

5.3「上（shàng)」意味拡張ネットワークの分析

中国語の「上（Shàng)」の意味拡張ネットワークは以下なような図 38 を描いた。赤い点線はメトニミー拡張を指す。黒い線はメタファー拡張を指す「上に移動する」というカテゴリーはプロトタイプ意味（基本義)、他のカテゴリーは拡張義である。

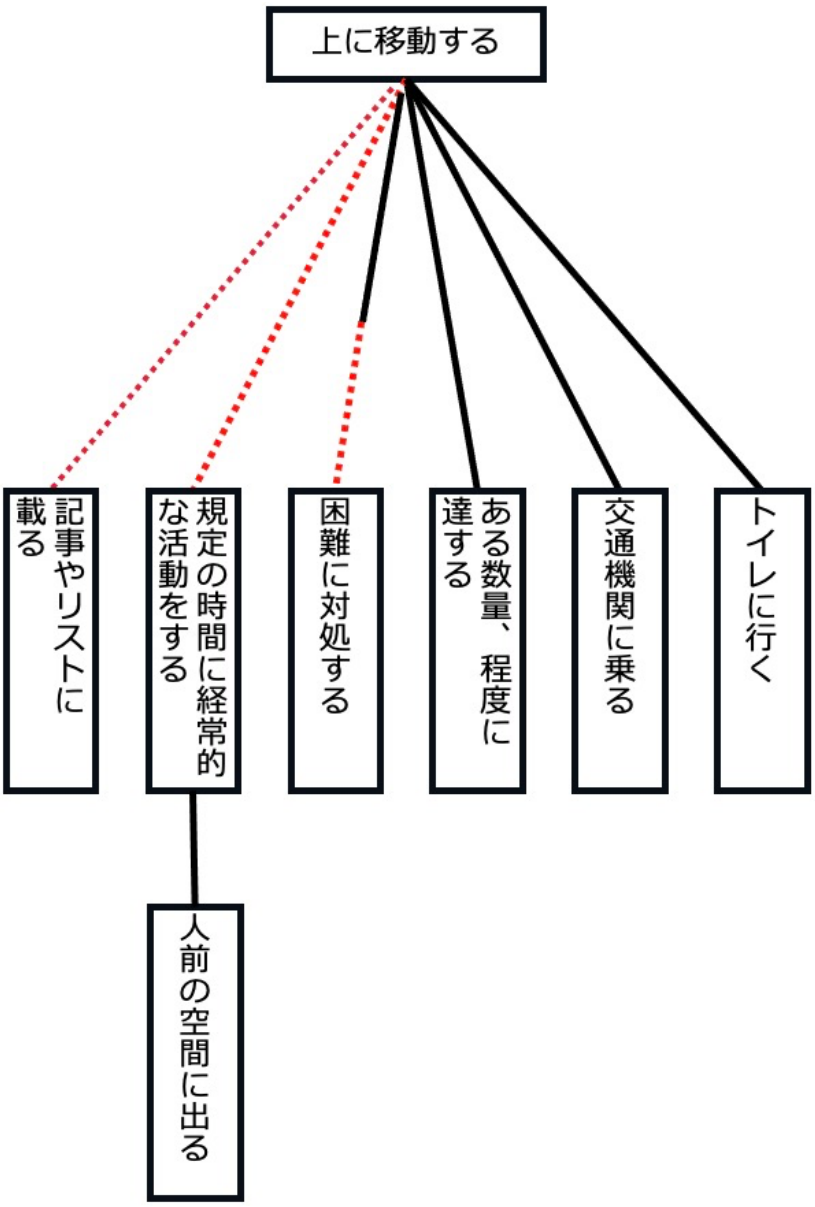

図 **38** :「上（**shàng**)」の意味ネットワーク

6「上がる」と「上（Shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークの比較

5 章では「上がる」「上（Shàng)」の意味カテゴリーの分類、各意味カテゴリーの分析や意味ネットワークを分析した。本章では「上がる」「上（Shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークの比較を行う。具体的には、まず「上がる」のスキーマティック・ネットワークモデルを分析する。次は「上（Shàng)」のスキーマティック・ネットワークモデルを分析する。本章のそれぞれのスキーマティック・ネットワークモデル図はネットワークモデルで簡潔な言い方をつける。最後は「上がる」と「上（Shàng)」のイメージスキーマ・ネットワークを比較する。

6.1 スキーマティック・ネットワークモデル

6.1.1 「上がる」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「水の中から陸に移動する」は同じく物理空間を移動すると考えられ、共通のスキーマ「物理空間を移動する」が抽出できる。従って、「水の中から陸に移動する」のネットワークモデルの図 39 となる。

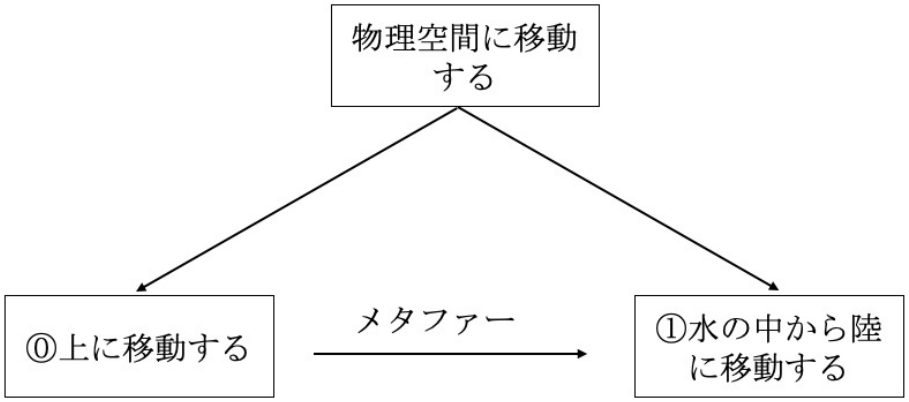

図 39 :「水の中から陸に移動する」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「目上の人の所に行く」は同じく物理空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「物理空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「目上の人の所に行く」のネットワークモデルの図 40 は以下となる。

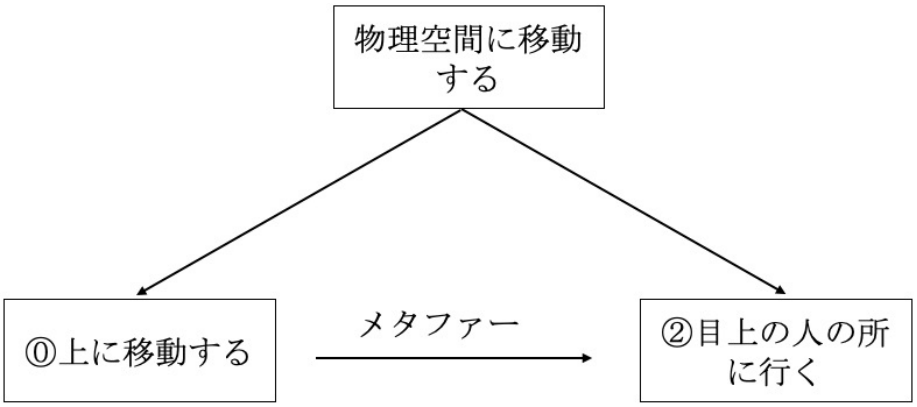

図 40 :「目上の人の所に行く」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「部屋などに入る」は同じく物理空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「物理空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「部屋などに入る」のネットワークモデルの図 41 は以下となる。

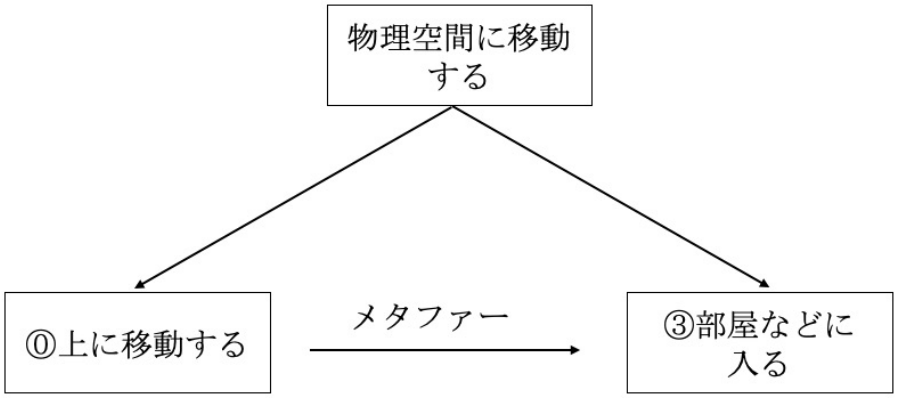

図 41 :「部屋などに入る」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」について、前者は物理空間に移動することが考えられて、後者抽象的な「値」空間に移動することが考えられる。両者は同じく空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」のネットワークモデルの図 42 は以下となる。

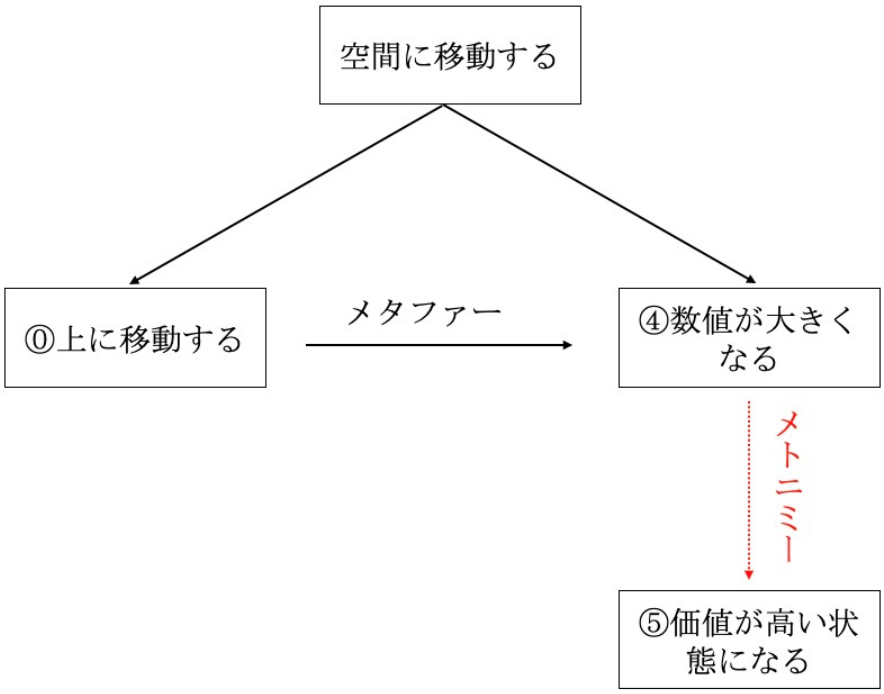

図 42 :「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「気持ちが高まる・緊張する」について、前者は物理空間に移動することが考えられて、後者抽象的な「気分」空間に移動することが考えられる。両者は同じく空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「気持ちが高まる・緊張する」のネットワークモデルの図 43 は以下となる。

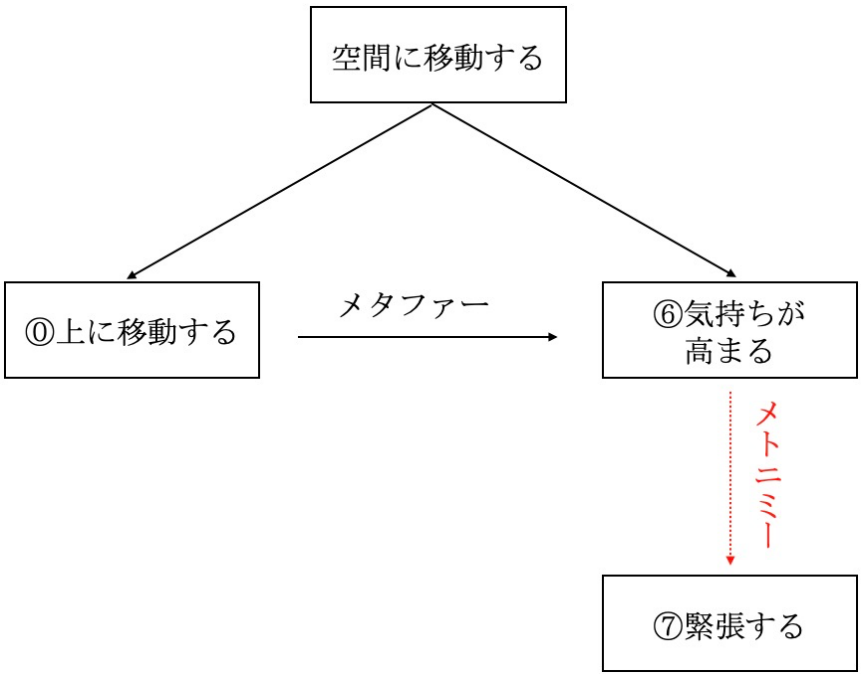

図 43 :「気持ちが高まる・緊張する」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「気持ちが高まる・緊張する」について、前者は物理空間に移動することが考えられて、後者抽象的な「時間」空間に移動することが考えられる。両者は同じく空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「続いていた状態が終わる・（抽象な）声が出現する」のネットワークモデルの図 44 は以下となる。

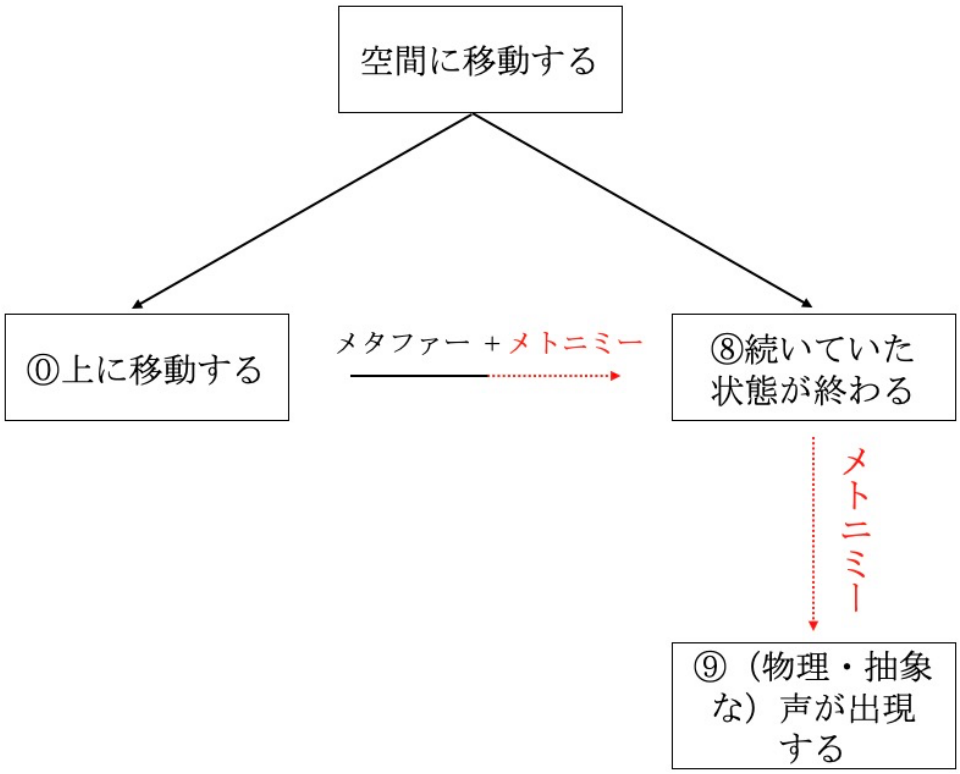

図 44：「続いていた状態が終わる・（抽象な）声が出現する」のネットワークモデル

6.1.2 「上（Shàng）」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「トイレに行く」は同じく物理空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「物理空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「トイレに行く」のネットワークモデルの図 45 は以下となる。

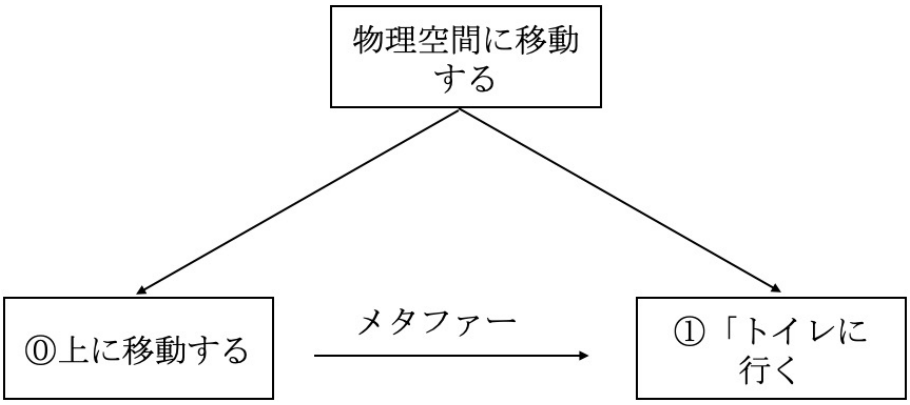

図 45：「トイレに行く」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「交通機関に乗る」は同じく物理空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「物理空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「交通機関に乗る」のネットワークモデルの図 46 は以下となる。

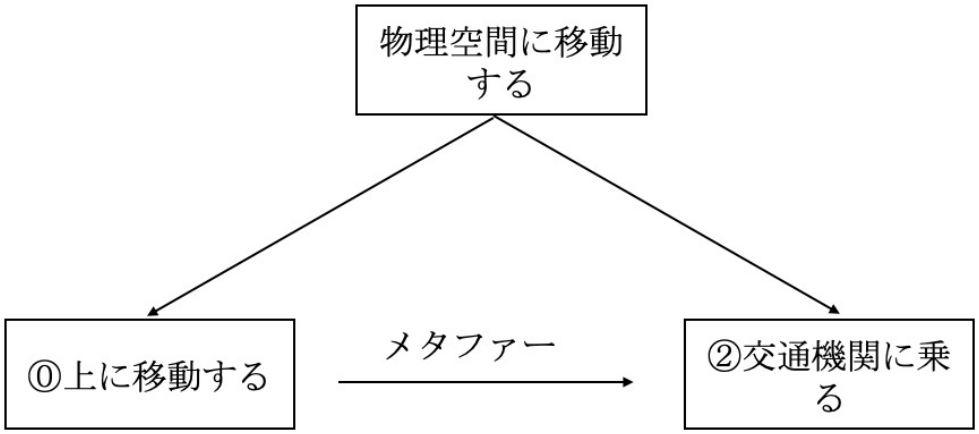

図 46 :「交通機関に乗る」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「ある数量，程度に達する」について、前者は物理空間に移動することが考えられて、後者抽象的な「値」空間に移動することが考えられる。両者は同じく空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「ある数量，程度に達する」のネットワークモデルの図 47 は以下となる。

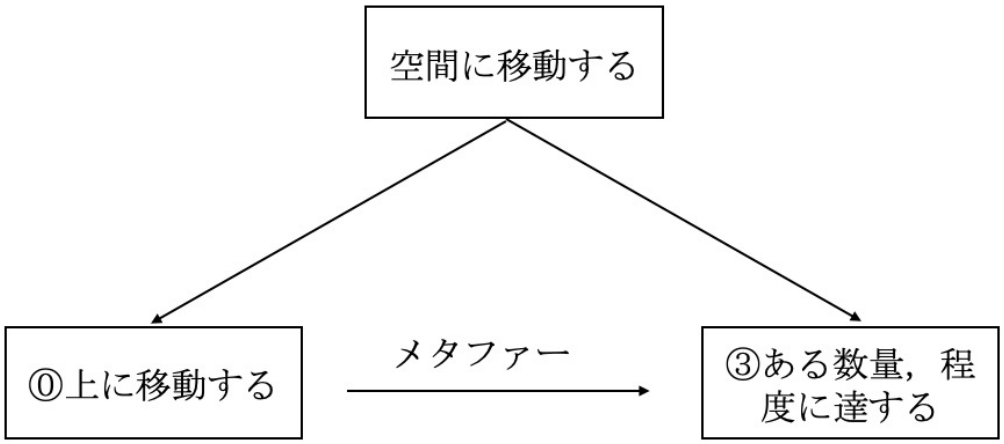

図 47 :「ある数量，程度に達する」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、中国語の「困難に対処する」のネットワークモデルの図 48 は以下となる。

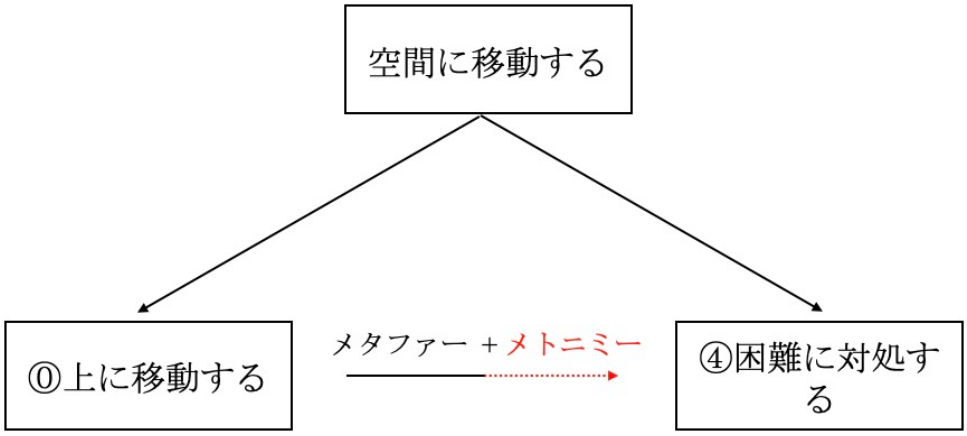

図 48 :「困難に対処する」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「規定の時間に経常的な活動をする」について、前者は物理空間に移動することが考えられて、後者抽象的な「公的」空間に移動することが考えられる。両者は同じく空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「規定の時間に経常的な活動をする」のネットワークモデルの図 49 は以下となる。

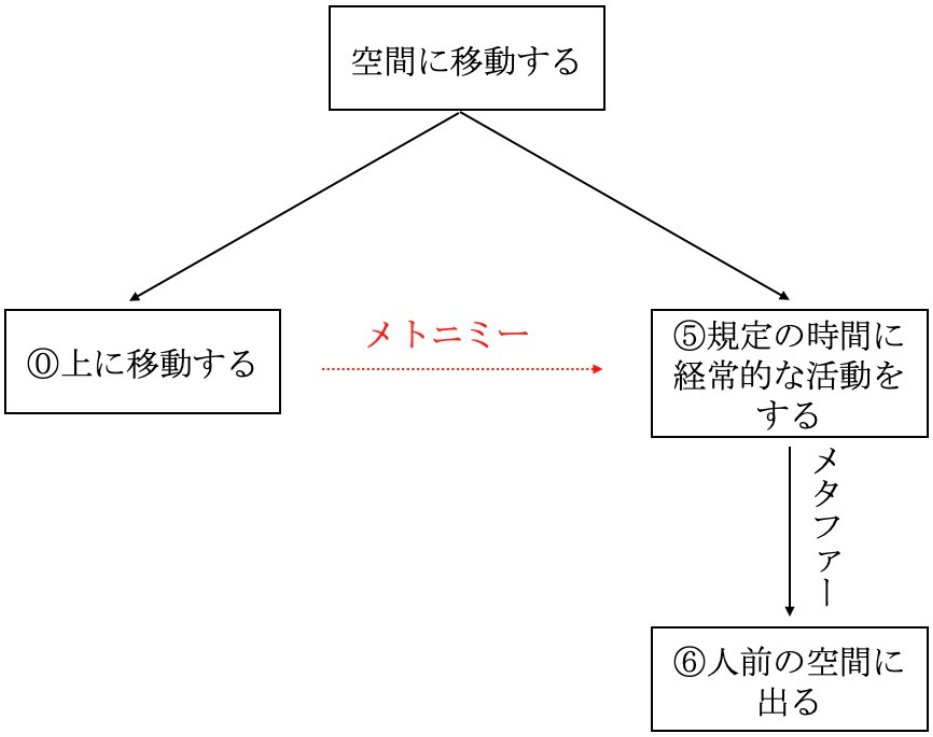

図 49 :「規定の時間に経常的な活動をする」のネットワークモデル

Langacker の意味拡張、メタファー、スキーマの関係を表すスキーマティック・ネットワークモデルによれば、「上に移動する」と「記事やリストに載る」について、前者は物理空間に移動することが考えられて、後者物理・抽象（例えば頭の中の光栄リストがありえる）的な「媒体」空間に移動することが考えられる。両者は同じく空間に移動することが考えられて、共通的なスキーマ「空間に移動する」というスキーマが抽出できる。従って、「記事やリストに載る」のネットワークモデルの図 50 は以下となる。

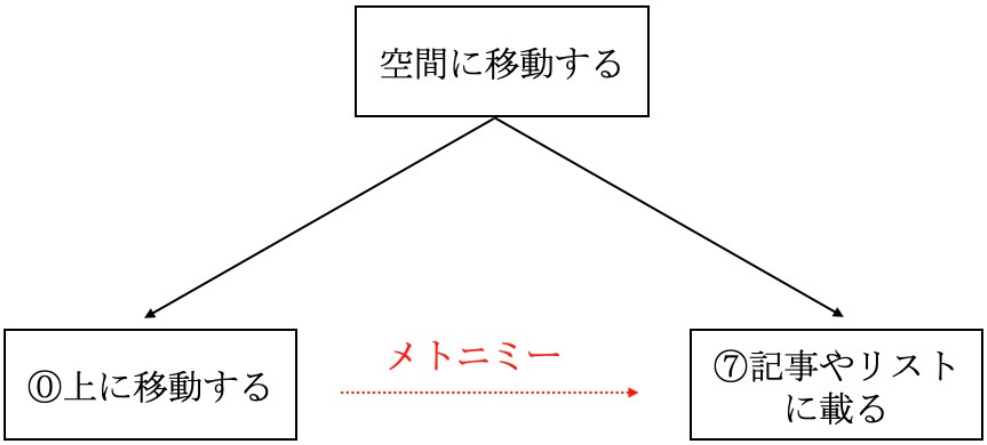

図 50 :「記事やリストに載る」のネットワークモデル

6.2 イメージスキーマ・ネットワーク

6.1 節では Langacker のスキーマティック・ネットワークモデルをそれぞれ「上がる」、「上（Shàng）」について分析することで、基本義と拡張義を繋ぐスキーマを抽出できた。本節では、それらのスキーマ間の関係をイメージスキーマ・ネットワークとして描く。ここで、スキーマティックネットワークとイメージスキーマ・ネットワークの違いに注意されたい。スキーマティックネットワークは意味レベルと認知レベルを繋ぐものであり、一方、イメージスキーマ・ネットワークは認知レベルにおけるスキーマ間の関係を表すものである。

6.2.1「上がる」の個々イメージスキーマ・ネットワーク

5.3 節の「上がる」の各々ネットワークモデルの結果から、以下のような日本語のイメージスキーマ・ネットワークが描ける。日本語の「水の中から陸に移動する」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 51 となる。

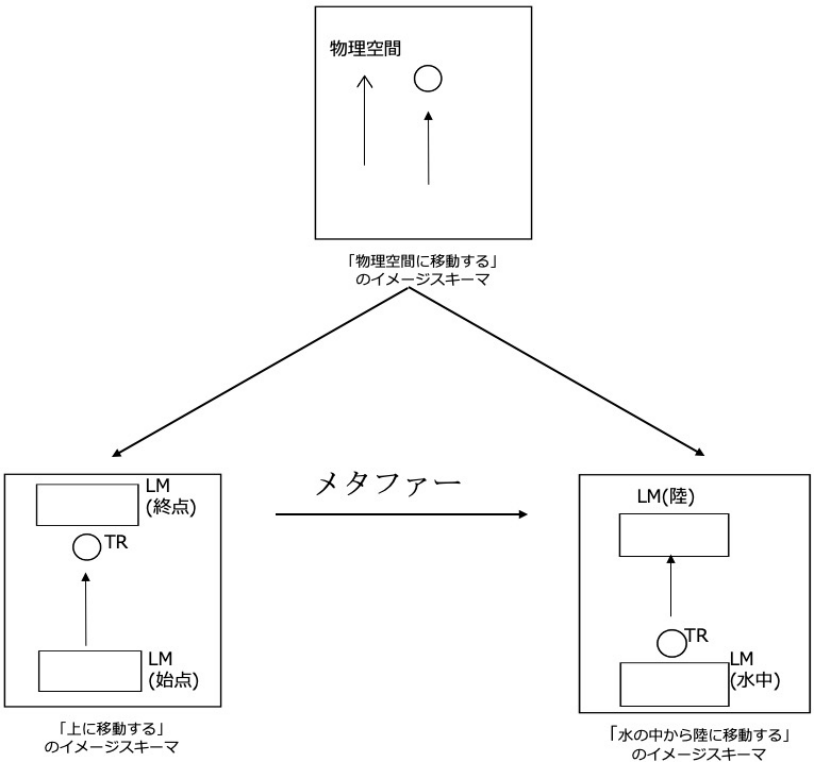

図 51 :「水の中から陸に移動する」
のイメージスキーマ・ネットワーク

日本語の「目上の人の所に行く」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 52 となる。

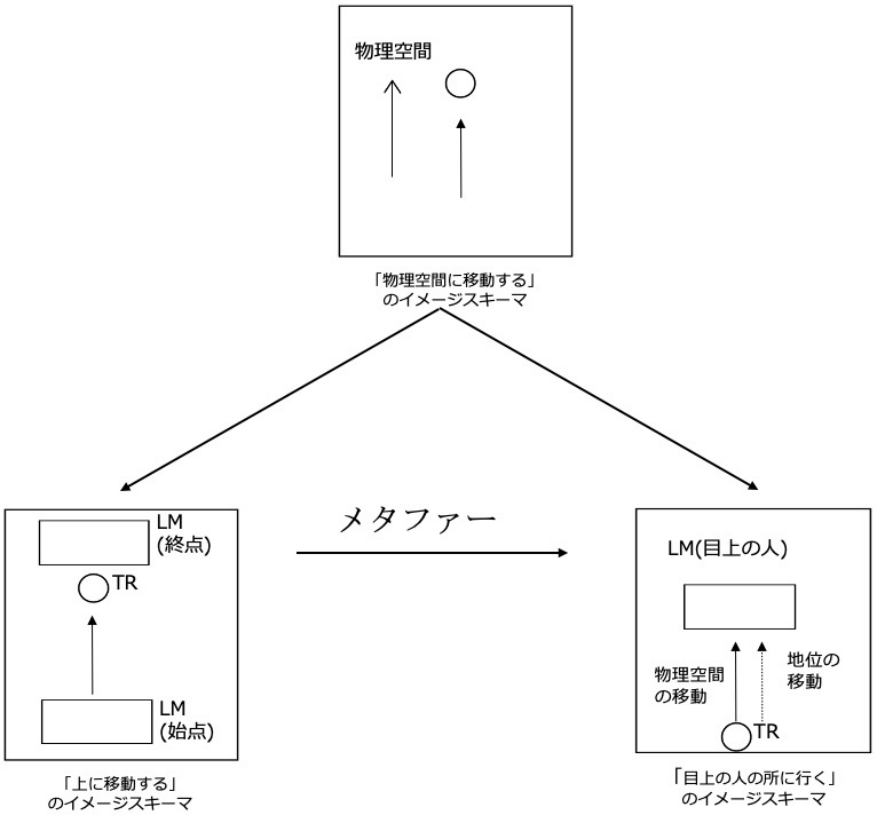

図 52 :「目上の人の所に行く」
のイメージスキーマ・ネットワーク

日本語の「部屋などに入る」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 53 となる。

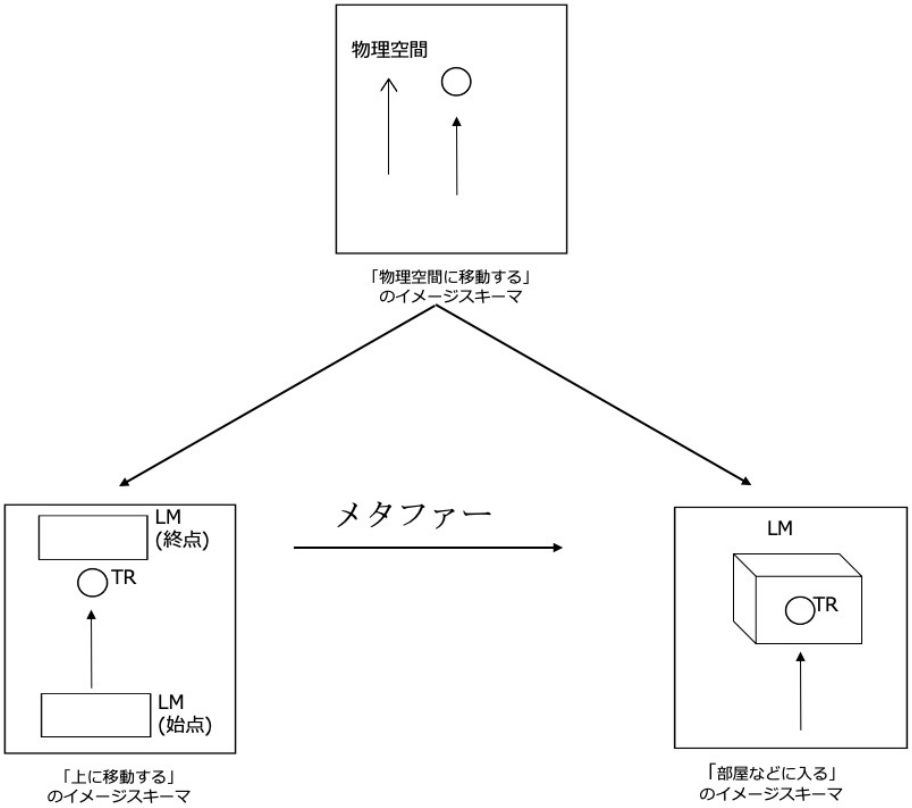

図 53 :「部屋などに入る」
のイメージスキーマ・ネットワーク

日本語の「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 54 となる。

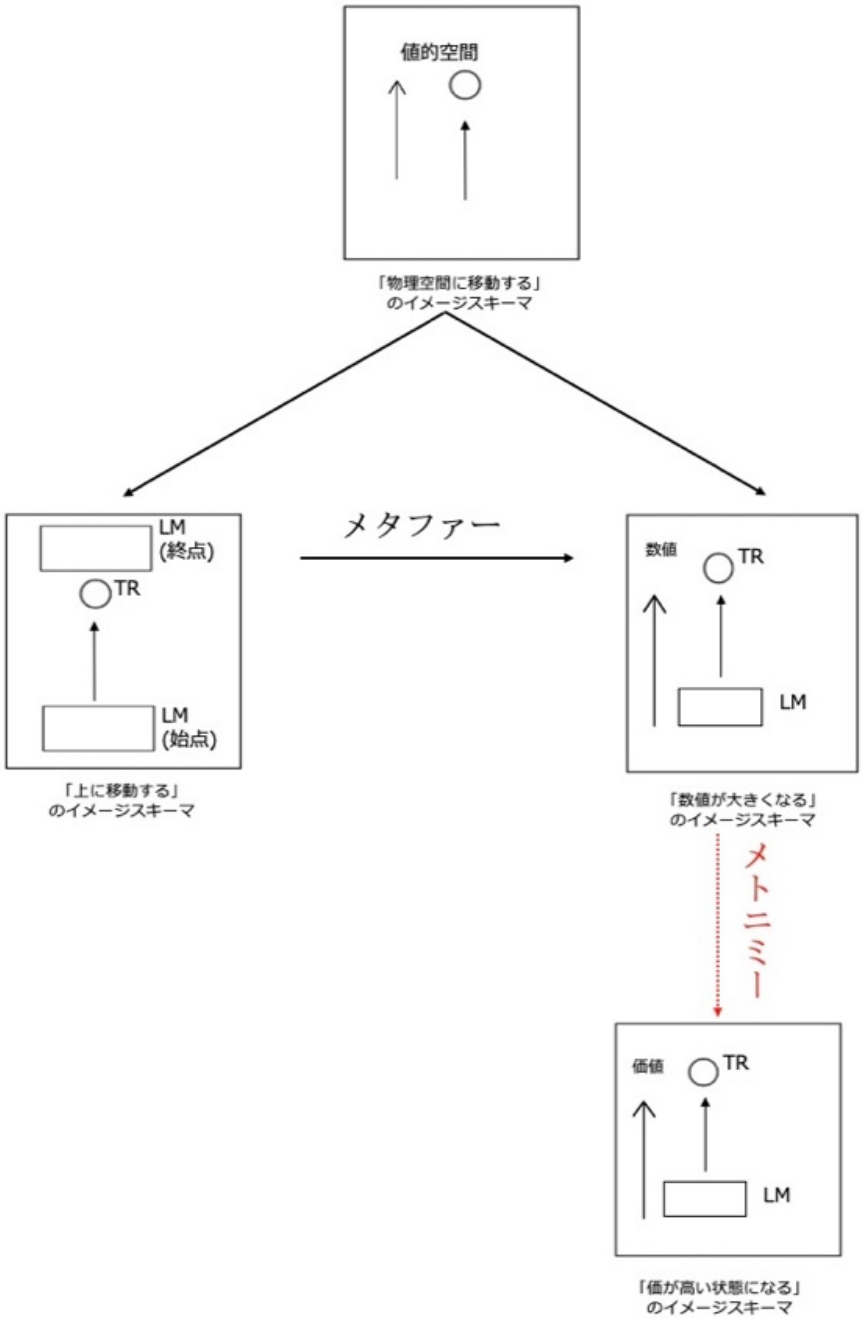

図 54 :「数値が大きくなる・価値が高い状態になる」
のイメージスキーマ・ネットワーク

日本語の「気持ちが高まる・緊張する」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 55 となる。

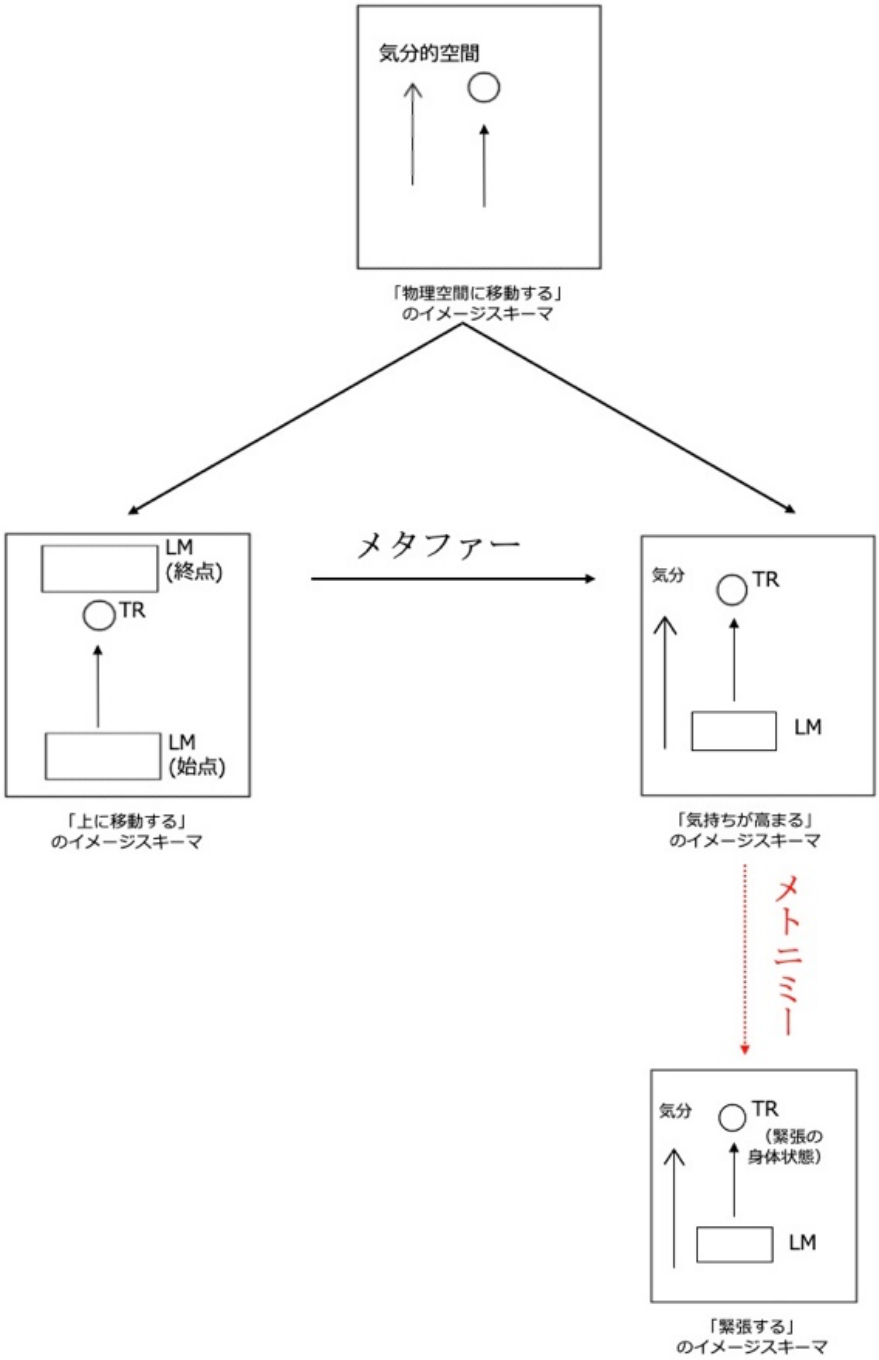

図 55 :「気持ちが高まる・緊張する」
のイメージスキーマ・ネットワーク

日本語の「続いていた状態が終わる・(抽象な) 声が出現する」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 56 となる。

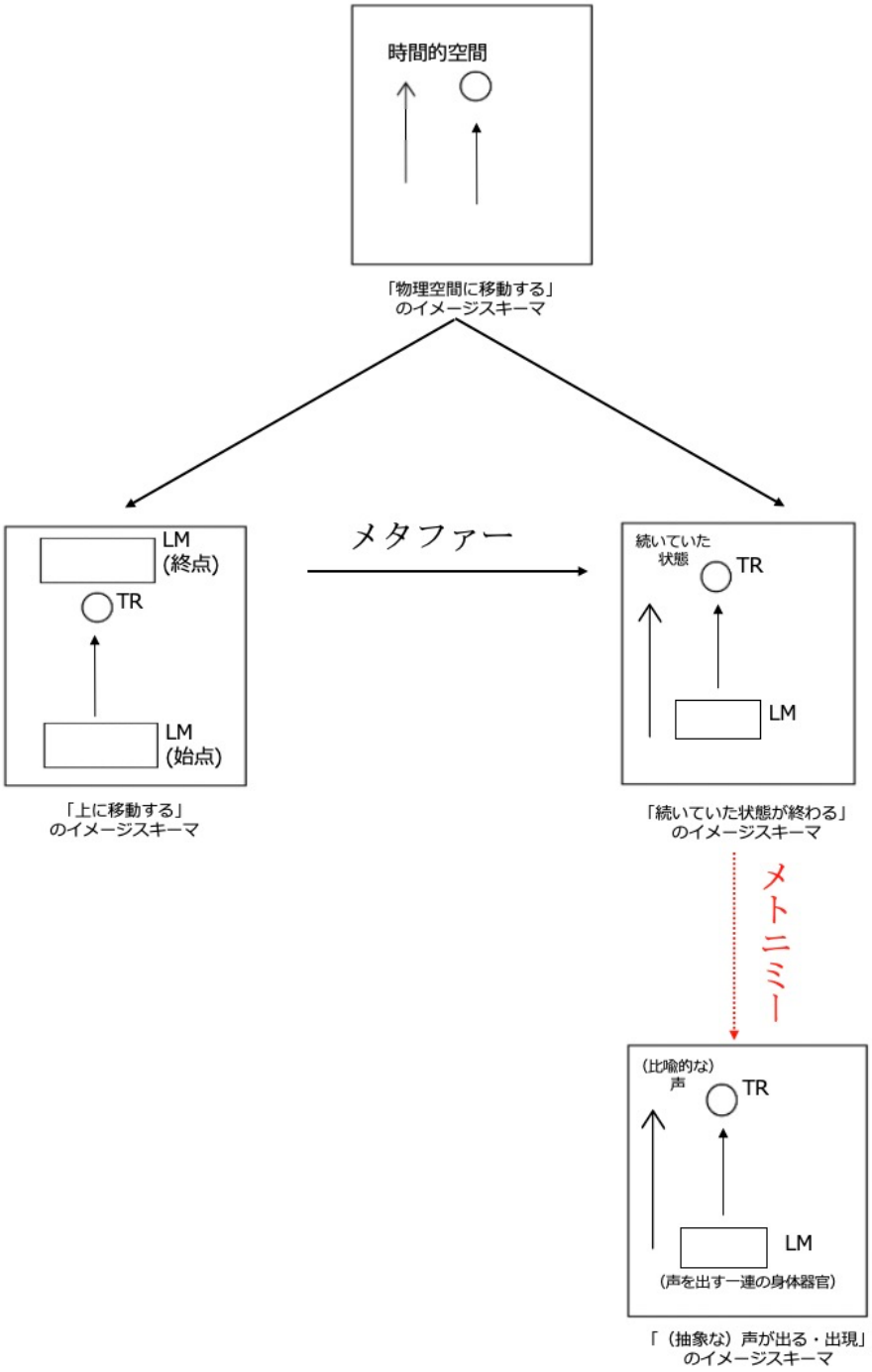

図 **56**:「続いていた状態が終わる・(抽象な)声が出現する」
のイメージスキーマ・ネットワーク

6.2.2 「上（Shàng)」の個々イメージスキーマ・ネットワーク

5.3 節の「上（Shàng)」の各々ネットワークモデルの結果から、以下のような日本語のイメージスキーマ・ネットワークが描ける。中国語の「トイレに行く」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 57 となる。

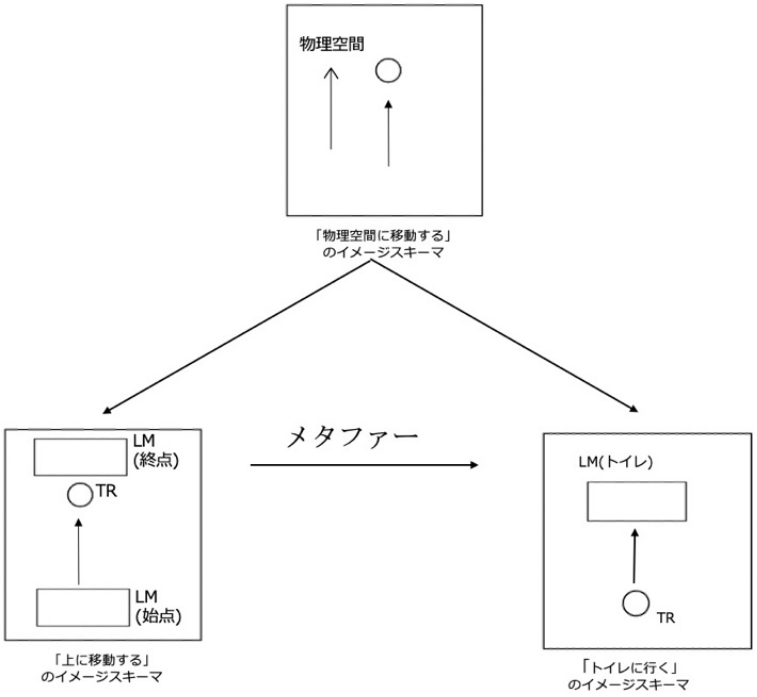

図 57 :「トイレに行く」のイメージスキーマ・ネットワーク

中国語の「交通機関に乗る」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 58 となる。

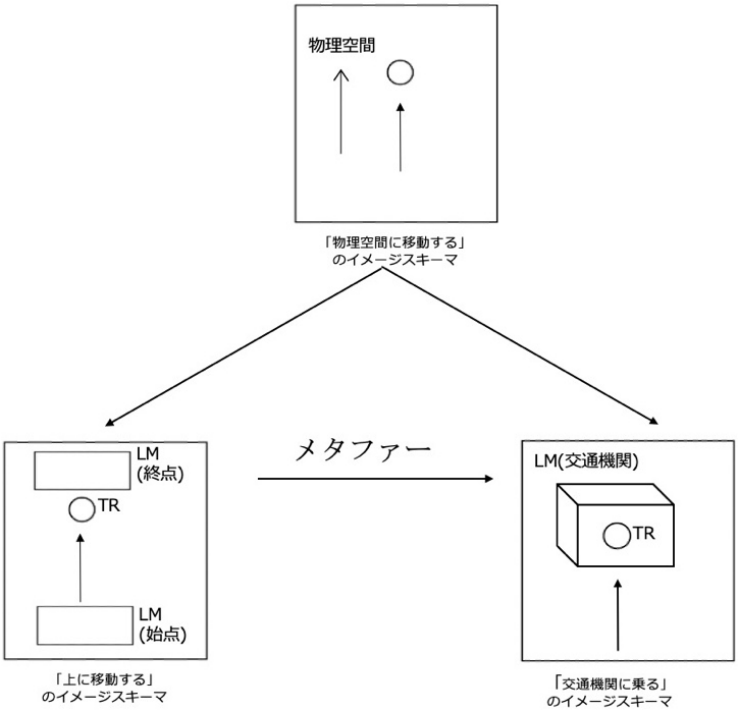

図 58 :「交通機関に乗る」のイメージスキーマ・ネットワーク

中国語の「ある数量，程度に達する」のイメージスキーマ・ネットワークは以下の図 59 となる。

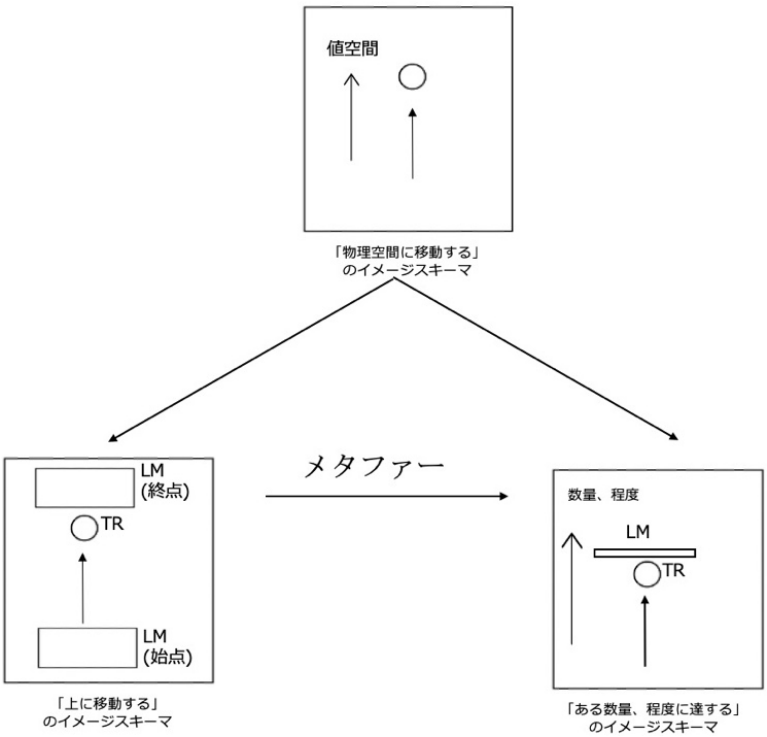

図 59 :「ある数量，程度に達する」
のイメージスキーマ・ネットワーク

中国語の「困難に対処する」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図60となる。

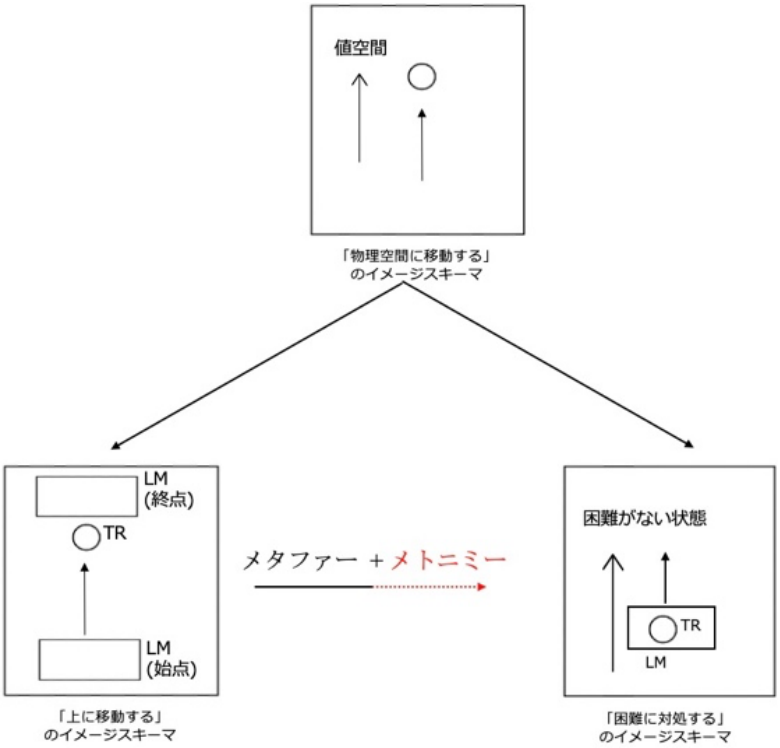

図 60 :「困難に対処する」
のイメージスキーマ・ネットワーク

中国語の「規定の時間に経常的な活動をする・人前の空間に出る」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図61となる。

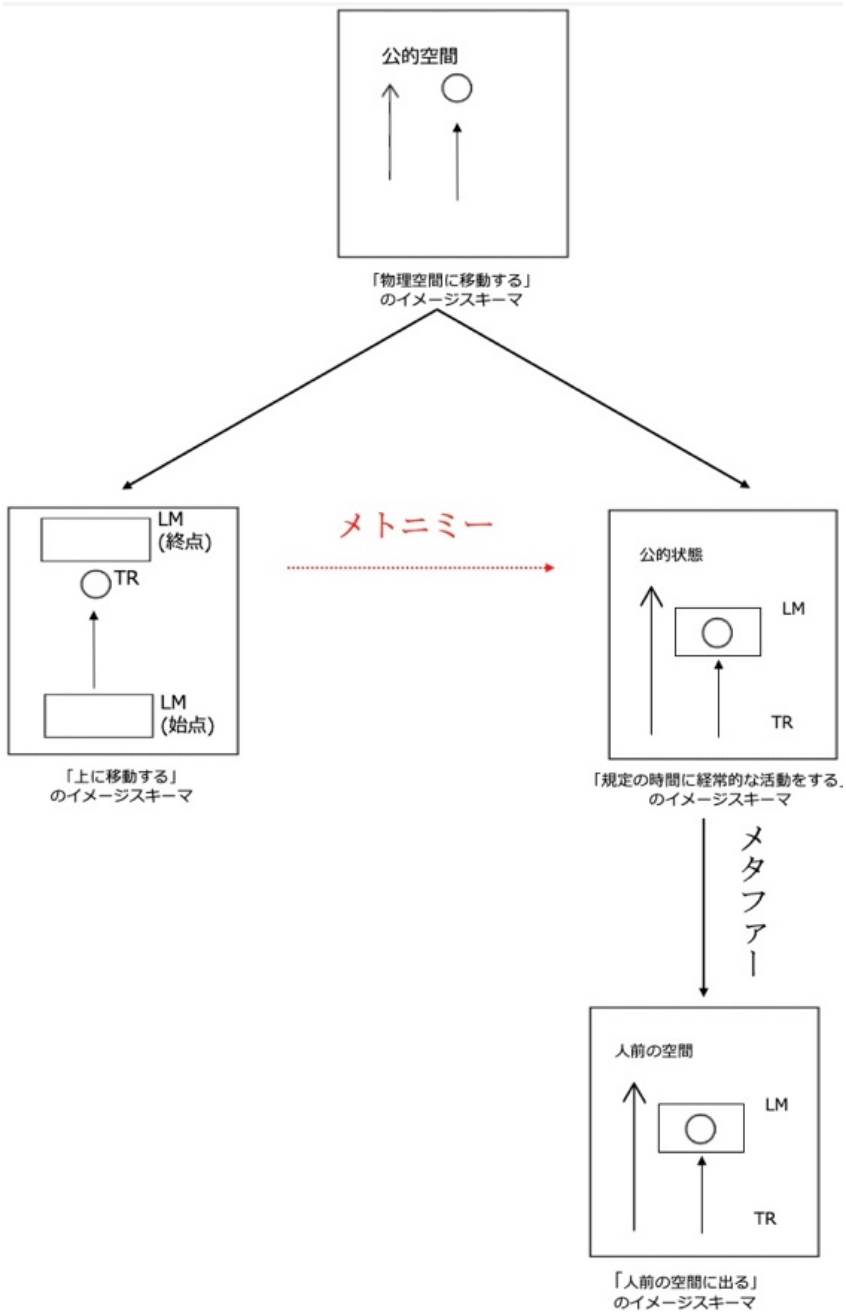

図 61：「規定の時間に経常的な活動をする・人前の空間に出る」
のイメージスキーマ・ネットワーク

中国語の「交通機関に乗る」のイメージスキーマ・ネットワークは以下図 62 となる。

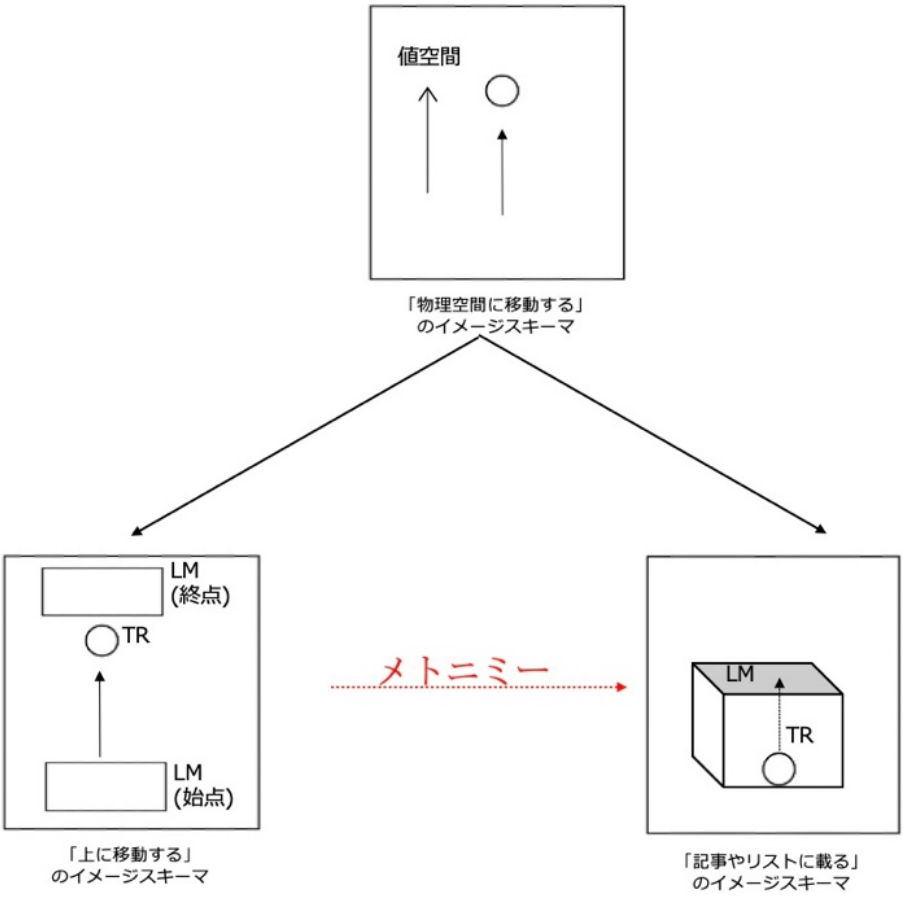

図 62 :「記事やリストに載る」
のイメージスキーマ・ネットワーク

6.2.3「上がる」と「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワーク

「上がる」の各々イメージスキーマ・ネットワークの結果から、「上がる」のスキーマは「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「物理空間」の中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「値的空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。従って、「上がる」のイメージスキーマ・ネットワークが以下のように図 63 が描ける。

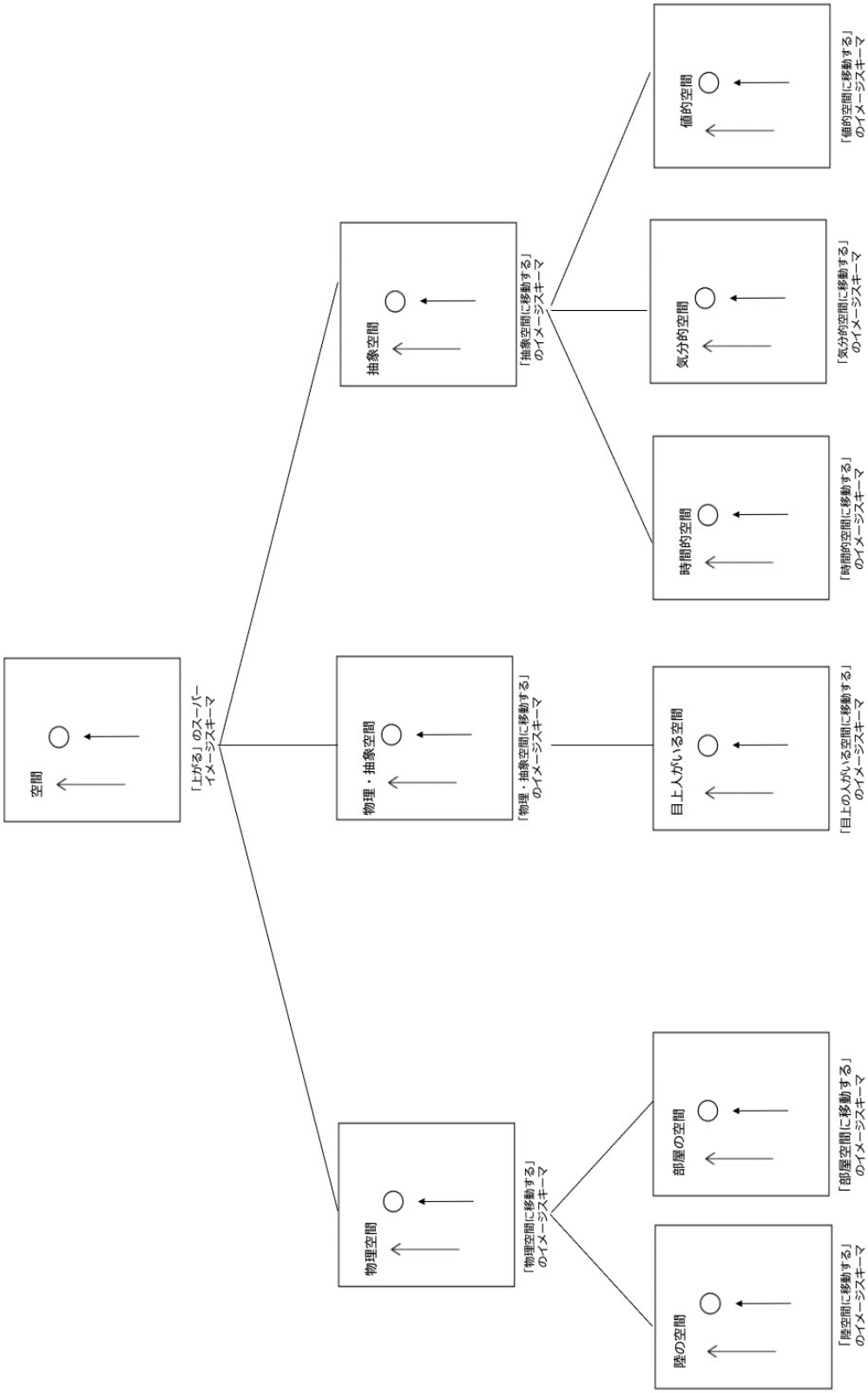

図 63 :「上がる」のイメージスキーマ・ネットワーク

「上（Shàng）」の各々イメージスキーマ・ネットワークの結果から、「上（Shàng）」のスキーマは「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「物理空間」の中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「値的空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。従って、「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークが以下のように図 64 が描ける。

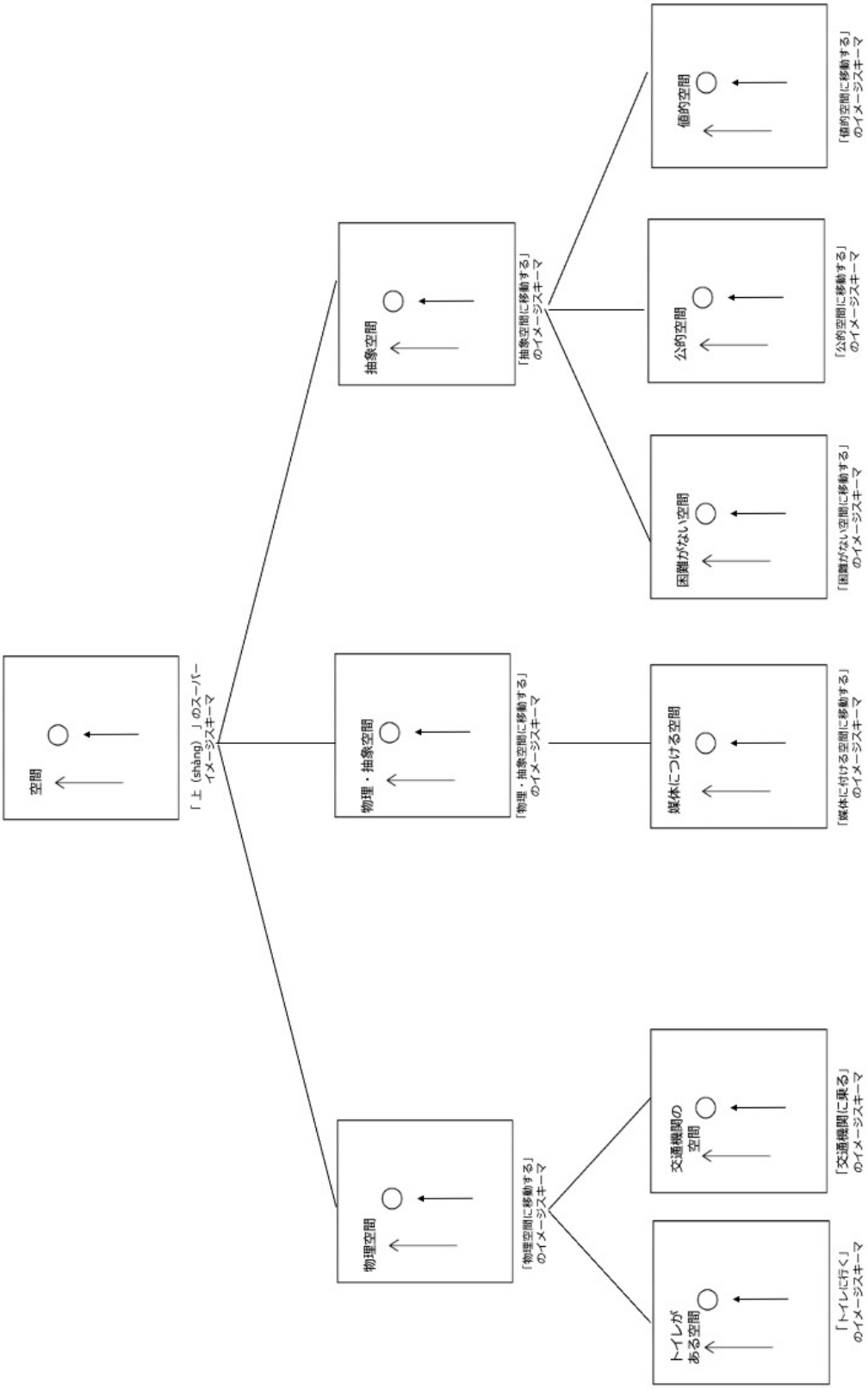

図 64 :「上（shàng)」のイメージスキーマ・ネットワーク

「上（Shàng）」の各々イメージスキーマ・ネットワークの結果から、「上（Shàng）」のスキーマは「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「物理空間」の中は「トイレに行く」、「交通機関」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「記事やリストに載る」が考えられる。「抽象空間」の中は「困難がない空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。従って、「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークが以下のように描ける。

6.3 まとめ

「上がる」の拡張プロセスについて、 物理的な空間から抽象的な空間への拡張を示し、「水から陸への移動」や「高い地位への移動」など、上昇動作が様々な文脈で使われている。「上（Shàng）」の拡張プロセスについて、同様に、中国語での「上」の使用が物理的な上昇から、より抽象的な概念へと拡張されているプロセスを示している。メトニミーとメタファー拡張の指標、言葉の意味がどのように拡張され、異なる文脈でどのように使われるかを示すネットワークを提供している。各節では、「上がる」と「上（Shàng）」が物理的な動きから抽象的な概念へとどのように拡張されていくかに焦点を当て、言語の中での「上」という概念が多様な意味で使用される基盤を理論的に解析した。

全体の結果が反映できる日中「上がる」・「上（Shàng）」のイメージスキーマのネットワーク図を踏まえて、日中自動詞を表す「上」の相違点について以下のようにまとめられる。日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」は同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」のスキーマが見られる。違うところは「抽象空間」スキーマにおいて、日本語は「気分的空間」、「時間的空間」が見られて、中国語は「公的空間」、「困難がない空間」が見られた。

7 考察

6 章では「上がる」「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの比較を行った。「上がる」と「上（Shàng）」のスキーマティック・ネットワークモデルを分析することで、最後は「上がる」と「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークを比較した。本章では、まずは意味拡張プロセスに対する考察を行なって、意味拡張プロセスについての先行研究との差分を説明する。その次は意味拡張ネットワークに対する考察を行なって、意味拡張ネットワークに対する考察の先行研究との差分を説明する。最後はイメージスキーマ・ネットワークに対する考察を行なって、本研究の貢献を全体的な考察で説明する。

7.1 意味拡張プロセスに対する考察

意味拡張プロセスは、言葉が持つ基本的な意味から派生し、より抽象的または比喩的な意味へと拡張される過程である。例えば、本研究の研究対象「上がる」という動作が物理的な空間から、感情的な高さを示す場合にも用いられるようになる。特に、Lakoffが主張上下メタファーに当てはめる。例えば、「嬉しいことは上である」「意識があるのは上である」「健康と生命は上である」「量が多いことは上」「高い地位は上」「良いことは上」のようなメタファーは本研究で反映できた。メタファーのようなプロセスは、言語がどのようにして柔軟性を持ち、多様な状況に適応していくかを示すものである。

意味拡張プロセスに対する考察について、意味拡張プロセスを中心に分析した先行研究を説明し、本研究との差異を検討していきたい。多義語の意味拡張プロセスを分析する際、まず多義語の意味カテゴリーを明確に分類することが不可欠である。日中「上」に関する先行研究では、「上」の意味に関する分類を辞書から直接採用する方法が一般的である。たとえば、左（2007）左（2007）は日中「上・下」を対象に、上下メタファー理論に従って、日本語と中国語における意味の拡張はどのようなものかについて考察した。研究方法は小学館の『中日辞典』から例文を抽出し、内省を行って分析した。呂（2009）は日中「上」「上がる」の意味カテゴリーを分類する際に、複数の辞書の定義をそのまま採用し、辞書に基づく例文を分析して「上がる」の意味拡張プロセスを検討した。しかしながら、左（2007）や呂（2009）の研究における問題点は、辞書のカテゴリーを直接採用するアプローチが、実際に人間が経験する言語使用の多様性をどれほど捉えることができているかについて疑問を投げかける。辞書の定義は必ずしも日常言語の使用を完全には反映しないため、実際の言語使用に即した意味拡張の分析には適していないと考えることができる。このような理由から、辞書のカテゴリーをそのまま採用することは、意味拡張プロセスの実証的な分析には不十分であると言えるだろう。本研究では、単なる辞書を参考ではなく、実際の言語使用を反映した例文を分析するために均衡コーパスを利用する方法を採用している。具体的には、日本語と中国語の両方において、日常生活における言語使用を広範にカバーする均衡コーパスから直接例文を抽出し、これに基づいて多義語

「上」の意味拡張を分析した。『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)』や『現代中国語コーパス（BCC)』を利用することで、書籍、雑誌、新聞など、多様なテキストジャンルから得られる実際の使用例を取り入れ、言語の自然な使用状況を捉えた。このアプローチは、辞書の定義に限定されることなく、言語の動的な側面と変化をより正確に把握することを可能にする。したがって、本研究は、実際の言語使用状況に基づいた意味拡張の過程をより詳細に描き出すことができると考えられる。

7.2 意味拡張ネットワークに対する考察

意味拡張ネットワークの考察について、日中の「上」に関する先行研究を説明して、本研究との差分を検討していきたい。鐘・井上（2013）は日本語の「上がる」「下がる」の基本的な体系と特徴を検討し、「朝日新聞」から得た例を分析し、辞書のメタファー表現例を加えて、上下の空間位置が 6 つの意味領域に対応し、4 つの特徴を持つことを明らかにした。森山（2016、2018）は、NINJAL-LWP for BCCWJ コーパスからの例文分析を通じて、「上がる」「下がる」の意味カテゴリーを 21 種類に修正し、詳細な分類と非対称性を探求した。中国語においては、苗（2012）が動詞「上」の意味カテゴリーを整理し、その意味拡張メカニズムを明らかにした。蒋（2014）は「上」「下」の意味拡張について、コーパス分を通じて検討し、不対称性を指摘しながらも、メタファー分析が不十分であることを強調した。譚（2017）は、中国語と日本語の「上」「下」の対称性と非対称性に注目し、日本語の非対称性が中国語よりも顕著であることを示した。徐（2021）は、「上」「下」の意味選択と深層構造の違い、および語用分析を行い、移動を意味する場合の対称性と動作を意味する場合の非対称性を明らかにした

これらの先行研究は、日本語と中国語の「上」「下」に関する意味の分類や対称性に焦点を置いているが、共通の不足点は、その研究が言語の表面的な層面に留まっており、実際の人間の認知プロセスには踏み込んでいないことである。これらの研究は、「上」「下」という言葉の意味の数が対称であるかどうか、その言語表現を分析することに注力しているが、言葉がどのようにして人間の心の中で理解され、処理されるかについての深い認知的な分析は行われていないことが分かった。

7.3 イメージスキーマ・ネットワークに対する考察

イメージスキーマ・ネットワークは、言葉がどのように人間の感覚や経験に基づいて構成され、理解されるかを示す概念図である。このネットワークは、言葉が持つイメージとその背後にあるスキーマの関係を明らかにし、言語の認知的側面を体系的探究する上で有効である。また、異なる文化における言語の意味構造の違いを比較する際にも役立つ。

イメージスキーマ・ネットワークに対する考察の考察について、先行研究を説明して、本研究との差分を検討していきたい。「イメージスキーマ」を用

いた分析が行われている先行研究について、厳（2010）は空間表現「うえ」と動詞「あがる」「あげる」の意味拡張と空間認知の類似性を探り、これらの表現が上方向の空間概念から空間認知のパターンへと拡張されていることを示した。中国語の「上」についてもイメージスキーマに基づく分析があり、常（2019）は他動詞「V 上」の意味とイメージスキーマに焦点を当て、コーパスからの実例を用いて意味分類と認知的接続メカニズムを分析し、「V 上」が動作の結果を強調する複数の意義を持つことを確認した。厳（2021）は中国語「上」の単語ネットワークを中国語教育の視点から構築し、品詞を越えた拡張を示した。王（2022）は「V 上」構造の意味カテゴリーを分類し、イメージスキーマを構築した。これらの研究は、語の意味カテゴリーのイメージスキーマを説明レベルに留まり、日本語と中国語における「上」の特性をイメージスキーマ・ネットワークのようなもので体系的に捉えるには至っていないという問題を抱えている。

7.4 全体的な考察

全体的な考察において、本研究は既存研究との差異、自研究の重要性、そして一般化の可能性の 3 点に焦点を当てている

1. 本研究は日中言語の対照研究であり、言語表現レベルから認知レベルまで考察したものである。従来の研究は言語レベルの拡張プロセスだけ絞った対照的研究が多い。これは日中言語話者の認知レベル証明できる程度はなかなか言えない。本研究は言語表現レベルから始まり、認知が反映できるスキーマの違いレベルまで一連の考察を行なって、認知レベルの比較までは言えるだろう。
2. 本研究では、イメージスキーマ・ネットワークの違いに影響を及ぼす日中の母語話者の認知の差を分析している。言語によって、話者が事態を「主観的に把握」するか「客観的に把握」するかという傾向について、認知言語学と応用言語学の視点から仮説を立てた。応用言語学の対照研究によると、日本語話者は「主観的事態把握」を、中国語話者は「客観的把握」を好む傾向にあることが示されている。本研究はこの視点を踏まえ、日中の同形多義動詞「上がる（Agaru）」「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークを分析し、日本語は「気分的空間」、中国語は「公的空間」としての特徴を明らかにした。
3. 本研究は日中言語話者の視点の傾向を明示し、言語特性を深く掘り下げた。多くの先行研究が自動詞と他動詞を一緒にして説明する傾向にある中、本研究は特に空間移動を表す自動詞「上」に注目し、言語の特徴を詳細に解明した。このアプローチは、日中言語に限らず、将来的には英語を含む世界の他の言語へと拡張する可能性を示している。本研究は、日中の言語話者の背後にある認知の違いを体系的に考察するための方法論を提案しており、その信憑性を応用言語学の研究結果との一致から裏付けている。

8 結論と展望

7 章では「上がる」「上（Shàng）」の意味拡張プロセス、意味拡張ネットワーク、メージスキーマ・ネットワークという 3 つ側面で、先行研究と本研究の差分について紹介した。その次はイメージスキーマ・ネットワークに対する考察をして、本研究の重要性を説明した。本章では、本研究の結論と展望を説明する。結論について、本研究の個々の RQ に基づき説明していく。その後本研究の課題をまとめて、本研究の展望を紹介する。

8.1 結論

本研究は、「上がる」と「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークを比較分析することで、日中の母語話者の認知の違いを明らかにすることを目的としている。具体的には、研究問題（RQ）を設定し、それに基づいて分析を行った。主な研究問題として「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークにはどのような違いがあるか」および「イメージスキーマ・ネットワークの違いを生む日中の母語話者の認知の違いはどのようなものか」という 2 つの問いがある。

RQ1:「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークにはどのような違いがあるか」に対して、日本語が「時間的空間」、「気分的空間」のイメージスキーマに拡張し、「上（Shàng）」を「困難がない空間」、「公的空間」のイメージスキーマに拡張したことである。事態把握について、日本語母語話者は主観的把握を好む傾向にあると考えられる。例えば、「雨が上がって、虹が出た」という例文では、話者自身が雨が止む、虹が出る状態を第一者視点で見ているような主観的事態把握をしており、つまり環境に融合し、見たものを描写しているのである。一方、中国語母語話者は客観的把握を好む傾向にあると考えられる。例えば、「迎难而上（困難に向き合う）」の場合、話者は困難に向き合い、困難がある状態に移動し、第三者視点で「困難に直面する自分」を見ているような客観的事態把握をしているのである。これらは 4 つのサブ RQ が関連している。以下では、これら 4 つのサブ RQ1.1-1.4 に基づく結論を紹介する。

RQ1.1 :「上がると上（Shàng）は、意味カテゴリーにおいてどのように分類されるか」に対して、「上がる（Agaru）」の意味カテゴリーは「上に移動する」、「水の中から陸に移動する」、「目上の人の所に行く」、「部屋などに入る」、「数値が大きくなる」、「価値が高い状態になる」、「気持ちが高まる」、「緊張する」、「続いていた状態が終わる」、「（物理・抽象な）声が出現する」という 10 種類が分類出来る。「上（Shàng）」の意味カテゴリーは「上に移動する」、「トイレに行く」、「交通機関に乗る」、「ある数量，程度に達する」、「困難に対処する」、「規定の時間に経常的な活動をする」、「人前の空間に出」、「記事やリストに載る」という 8 種類が分類できることを明らかにした。

RQ1.2 :「上がると上（Shàng）各意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）はどのようなものか」に対して、メトニミーとメタファーの拡張プロセスを分析して、意味ネットワークの結果から見ると、日本語の「上がる（Agaru）」と中国語の「上（Shàng）」のそれぞれの

意味カテゴリーの拡張関係は同じくメタファー的拡張とメトニミー的拡張プロセスが生じた。「上がる（Agaru）」の「上に移動する」意味カテゴリーは「水の中から陸に移動する」、「目上の人の所に行く」「部屋などに入る」「数値が大きくなる」というカテゴリーに拡張するプロセスはメタファーである。「数値が大きくなる」は「価値が高い状態になる」というカテゴリーに拡張するプロセスはメトニミーである。「気持ちが高まる」は「緊張する」に拡張するプロセスはメトニミーである。「上に移動する」は「続いていた状態が終わる」に拡張するプロセスはメタファーやメトニミー両方生じる。「続いていた状態が終わる」は「(物理・抽象な）声が出現する」に拡張するプロセスはメトニミーである。「上（Shàng）」の「上に移動する」意味カテゴリーは「トイレに行く」、「交通機関に乗る」「ある数量，程度に達する」というカテゴリーに拡張するプロセスはメタファーである。「上に移動する」は「困難に対処する」に拡張するプロセスはメタファーやメトニミー両方生じる。「上に移動する」は「規定の時間に経常的な活動をする」「記事やリストに載る」というカテゴリーに拡張するプロセスはメトニミーである。「規定の時間に経常的な活動をする」は「人前の空間に出」に拡張するプロセスはメトニミーである。日本語の「上がる（Agaru）」が生じたそれぞれの意味カテゴリーの拡張プロセスの数について、日本語の「上がる（Agaru）」は 5 つのメタファー的拡張をして、メトニミー的拡張は 3 つである。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは 1 つがある。中国語の「上（Shàng）」が生じたそれぞれの意味カテゴリーの拡張プロセスの数について、中国語の「上（Shàng）」は 4 つのメタファー的拡張をして、メトニミー的拡張は 2 つである。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは 1 つがある。メタファーやメタファー的拡張の数からみると、日本語の「上がる（Agaru）」は中国語の「上（Shàng）」よりどちらの方も多い。メタファー的拡張やメトニミー的拡張同時に生じたものは同じく 1 つがある。

RQ1.3：「日本語の「上がる」と中国語の「上（Shàng）」のそれぞれの意味カテゴリーのイメージスキーマはどのような特徴を持つのか」に対して、「上がる」と「上（Shàng）」の各々イメージスキーマ・ネットワークは同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「上がる（Agaru）」の「物理空間」イメージスキーマの中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「値的空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。「上（Shàng）」の各々イメージスキーマ・ネットワークの結果から、「上（Shàng）」のスキーマは「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」が分けられる。「物理空間」の中は「陸の空間」、「部屋の空間」が考えられる。「物理・抽象空間」の中は「目上の人がいる空間」が考えられる。「抽象空間」の中は「値的空間」、「気分的空間」、「時間的空間」が考えられる。

RQ1.4：「上がると上（Shàng）各意味カテゴリーにおける意味拡張のプロセス（メタファーやメトニミー）はどのようなものか」に対して、「上がる」「上（Shàng）」イメージスキーマ・ネットワークを比較した結果、日中の拡張義のイメージスキーマには同じ点と異なる点があることが分かった。同じく「物理空間」、「物理・抽象空間」、「抽象空間」のイメージスキーマがある。例えば、「部屋などに入る」「交通機関に乗る」という意味カテゴリー実は同

じく物理空間の移動が見られて、イメージスキーマは同じである。異なる部分として、「上がる」は「気分的空間」のイメージスキーマが特徴的であり、「上（Shàng）」は「公的空間」のイメージスキーマが特徴的であることが分かった。

RQ2：「日中母語話者の認知の差の要因はどのようなものか」に対して、日本語は「気分的空間」が見られて、気分の方は人間自身の反応であり、人間の身体から表すものが考えられる。これは、本研究が採用した言い方「主観的把握」に該当する。話者自身のような「第一視点」であり、話者は環境に融合したように見える。中国語の「上（Shàng）」は「公的空間」、「困難がない空間」が見られた。公的な状態が言える場合は、これは私的な状態に参照するような言い方で、この場合話者は「第三者視点」のようなものである。応用言語学における日中翻訳の対照研究（徐 2011；鄔 2018）によれば、日本語母語話者は「主観的事態把握」を好む傾向があり、中国語母語話者は「客観的把握」を好む傾向があることが明らかにした。本研究は認知言語学の視点で、日中同形多義動詞「上がる（Agaru）」「上（Shàng）」のイメージスキーマ・ネットワークの分析を通して、同じく日本語母語話者は「主観的事態把握」を好む傾向があり、中国語母語話者は「客観的把握」を好む傾向があることが明らかにした。これにより認知言語学と応用言語学における視点から見ると、中村（2004: 3-51）が提唱した認知モード「認知主体がインタラクティブな認知の場の外に出て、あたかも外から客観的に眺めるような視点をとる過程」、いわゆる D モードという認知モードを解釈できるだろう。これは本研究が採用した言い方「客観的把握」に対応する。つまり、中国語話者は日本語話者よりも物事を客観的把握傾向が強いと考えられる。

8.2 展望

本研究の今後の課題について、本研究は、中日の同形多義自動詞「上がる」「上」に焦点を当てた初期の試みであり、言語表現と認知の関連性を探求してきた。しかし、語義の意味拡張と認知スキーマの関係性は、より広範な言語現象において検討する価値がある。以下は今後の課題と考えられる。

1. 他動詞と名詞などのより広い品詞を分析することが必要である。「上」に関連する他動詞や名詞なども、同様の認知的アプローチを用いて分析されるべきである。例えば、他動詞では、行為の対象や結果に対する認知がどのように反映されるかを探り、名詞では、抽象的な概念や具体的な対象との関連性を調べる。これにより、「上」が持つ意味ネットワークの全体像をより詳細に描き出すことができる。
2. 「下」との対照分析を行う必要がある。「上」の研究だけでなく、「下」についても同様の研究を行うことで、上下の対比が認知に及ぼす影響を明らかにする。これは、空間認知の対称性や非対称性を理解する上で不可欠である。
3. 方向性を表す他の単語の研究も分析することが必要である。「前後左右」など他の方向性を表す単語についても、中日言語における意味拡張を検討する。これにより、空間方向が認知スキーマにどのように組み込まれ

るか、そしてそれが言語表現にどのように影響を与えるかの理解を深めることができる。

4. 研究言語を拡大する必要がある。日本語と中国語に限定せず、他の言語における空間表現を含めた多言語比較を行うことで、言語間の認知スタイルの違いや普遍的なパターンを探ることができる。

以上の課題から見ると、展望として、本研究は学術的な分野で特に対照言語学と認知言語学の分野更なる貢献を期待する。Lakoff and Johnson（1980）は主に英語を対象として、肉体的・文化的な経験は空間関係づけのメタファーの基盤となるので、どの基盤が選ばれ、主要なものとなるかは、文化によって異なることを提示した。しかし、 Lakoff and Johnson（1980）は英語以外の文化がどう異なるかは検証していないため、この点について日中の認知の原因を分かれば、 日中の文化はどう異なるところが分かるようになるだろう。応用レベルについて、社会的な貢献は日本語教育に対する意義があると思う。日本語学習者は一個一個の事例を学ぶより、学生は日中認知の仕方の違いが分かれば、深いレベルで、特に多義語の拡張義をより良く把握ことができると思う。認知言語学に基づく指導教材を開発することも期待できる。この研究成果は多義語の理解は第二言語としての日本語教育分野で有益な示唆を与えるものと考えられる。

謝辞

この研究を進める中で、測り知れないご指導と心強いサポートを惜しみなく提供してくださった橋本敬教授に対する敬意と感謝の気持ちは、言葉では表現しきれません。初めての留学生活の中、無知の闇から光へと導いてくださり、細部にわたるまで熱心にご指導を賜りました。そのご指導は、単に学問的な洞察にとどまらず、生涯を通じての大切な教訓となりました。

また、橋本研究室の一員として、常に批判的思考を持ち続けることの大切さを教えていただき、その教えは研究だけでなく、人生においても大いに役立つものであると、深く感謝しています。研究室に所属することができた幸運、ゼミやディスカッションを通じて得られた貴重な学びの時間、そして研究の真の楽しさを知ることができたことに対し、心から感謝しています。

本研究の進行にあたり、多忙な中でも常に熱心に耳を傾け、的確なアドバイスをくださった本田弘之教授と黒川瞬助教にも深い感謝を申し上げます。また、研究室内での議論や日々の研究活動において、共に励まし合い、知識を深め合った研究室の仲間たちにも感謝の意を表します。

さらには、知識科学系の先生方、北陸先端科学技術大学院大学の教職員の皆様のご支援にも心からの謝意を表します。日本への留学という長年の夢を実現させ、私のわがままをいつも温かく受け入れてくれた両親へ、最大限の感謝を捧げます。

学問の道において、私が今日立つ場所に到達することができたのは、橋本敬教授をはじめとする多くの方々のご支援とご鞭撻の賜物です。重ねて、皆様への厚く深い感謝の気持ちを表明いたします。

参考文献

＜英語＞

Langacker, Ronald W.(1985)Observations and Speculations on Subjectivity, in: John Haiman(ed.)Iconicity in Syntax, John Benjamins, pp.109-150.

Langacker, Ronald W.(1990)Subjectification, Cognitive Linguistics,Vol. 1, No. 1, pp. 5-38.

Langacker , R W . (1998) . " Conceptualization , Symbolization , and Grammar . In Tomasello , M(ed) The New Psychology of Language : Cognitive and Functional Approaches to LanguageStructure . Lawrence Erlbaum . 1-39

Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. The University of Chicago Press.

Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

Langacker, R. W. (1988). *Foundations of Cognitive Grammar,* Vol. 1. Stanford University Press.

George Lakoff 1990 Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind pp.417

Langacker, Ronald W.（1985）Observations and Speculations on Subjectivity, in: John Haiman（ed.）Iconicity in Syntax, John Benjamins, pp.109-150.

Langacker, Ronald W.（1990）Subjectification, Cognitive Linguistics, Vol. 1, No. 1, pp. 5-38.

＜日本語＞

金谷武洋 (2004). 『英語にも主語はなかった 日本語文法から言語千年史へ』. 講談社. 59.

徐愛紅 (2011). 「〈事態把握〉から見た中日両言語の語り―語順を中心に―」. 『日本語日本文学』. 57-68.

左咏梅 (2007). 「「上」と「下」のメタファーについて-日中対照研究」. 杏林大学大学院国際協力研究科大学院論文集. Vol. 4. 47-63.

呂春燕 (2009). 「中日移動動詞に関する認知意味論的対照研究日本語のアガル・サガルと中国語の「上・下」を中心に」. 広東外国語対外貿易大学東洋言語文化学院博士論文.

池上嘉彦 (2011). 「日本語と主観性主体性」. 澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』. ひつじ書房. 49-67.

中村芳久 (2004). 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」. 『認知文法論 II』. 大修館書店. 3-51.

田中太一 (2019). 「日本語は「主体的」な言語か―『認知言語類型論原理』について―」. 『東京大学言語学論集』41. 295-313.

籾山洋介, 深田智 (2003). 「意味の拡張」. 松本曜 (編) 『認知意味論 (シリーズ認知言語学入門〈第 3 巻〉)』. 大修館書店. 73-134.

鍋島弘治朗 (2002). 「メタファーと意味の構造性：プライマリー・メタファーおよびイメージスキーマとの関連から」. 『認知言語学論考』Vol. 2.

国広哲弥 (1994). 「認知多義論―現象素の提唱―」. 『言語研究』, 106, pp. 22-44.
中村芳久 (2004). 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」. 『認知文法論Ⅱ』, 大修館書店, pp. 3-51.
森山新 (2012). 『日本語多義語学習辞典（動詞編)』, アルク出版社, pp. 17-23.
森山新 (2018). 「‘あがる・さがる’の意味拡張とその非対称性―上下メタファーによる内省分析法の確立をめざして―」. 『人文科学研究』, No. 14, pp. 57-71.
松本曜 (2003). 「語の意味」. 『認知意味論（シリーズ認知言語学入門〈第3巻〉)』, 大修館書店, pp. 30.
籾山洋介 (2002). 『認知意味論のしくみ』, 町田健編, シリーズ・日本語のしくみを探る 5, 研究社, pp. 107.
鍋島弘治朗 (2002). 『認知言語学の大冒険』, 開拓社.
嚴馥 (2020). 「中国語の“上（SHANG)”の複合的語彙ネットワーク」. 『Journal of Foreign Language Education』, 慶應義塾外国語教育研究センター, Vol. 17, pp. 77-100.
王璐菲 (2022). 「V 上（SHANG）の語義およびイメージスキーマ」. 『Journal of Suihua University』, Vol. 42, No. 8, pp. 64-67.
鐘勇, 井上奈良彦 (2013). 「日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察」. 『言語文化論究』, 30, pp. 13-26.
大堀寿夫 (2002). 「シリーズ言語科学 3 認知言語学 II: カテゴリー化」. 東京大学出版会.
岡智之 (2007). 「日本語教育への認知言語学の応用：多義語、特に格助詞を中心に」. 『東京学芸大学紀要』, 東京学芸大学紀要出版委員会, 58, 467-481.
蒋荔 (2014). 「方位詞“上”、“下”、“上下”及其習得研究」. 揚州大学『修士論文集』, 1-56.
国広哲弥 (1982). 『意味論の方法』. 大修館書店.
森山新 (2016). 「上下のメタファーの観点からみた動詞「あがる」の意味構造分析－内省分析法の確立をめざして－」. 『人文科学研究』, 12, 231-241.
中野研一郎 (2017). 『認知言語類型論原理「主体化」と「客体化」の認知メカニズム』, 京都: 京都大学学術出版会.
石綿敏雄、高田誠 (2000). 『対照言語学』. 共信社印刷所, p. 9.
辻幸夫 (2002). 「認知言語学キーワード事典」. 研究社.
王承云 (1998). 同形異義語における中国語と日本語の対照研究中国語教育の視点から. 『人文科教育研究』, 25, pp. 143-152.
嚴馥 (2010). 「うえ」と「あがる/あげる」の意味拡張に見る空間認知の類似. 大阪大学言語文化学, 19, p. 127-139.
鄔海厅 (2018). 「日本語と中国語の視覚表現：認知視点から見る対照分析」. 『日本研究教育年報』, 22, pp. 35-52.
陳月吾・王育潔 (2011). 「複合動詞後項文法化の日中比較一「V一上げる」を中心に一」. 『福井工業大学研究紀要』, 41, pp. 548-553.

苞山武義（2014）．日本語・中国語における移動動詞の多義化プロセスと制約 -語彙的意味と構文を手掛かりに-．関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士学位論文.
王秀英（2014）．「上昇を表す複合動詞の日中対照研究:「～上げる」と「～上(shang)」を対象として」．『文化巻』，77 号，53-73.
辻幸夫（2002）．「認知言語学キーワード事典」．研究社.

＜中国語＞
徐慧（2021）．「“上”“下”动词性组合的不对称性分析——以上 / 下 + 厕所 / 馆子为例」．『漢字文化』，02，5-6.
徐捧丽（2015）．「中日颜色词“黄”的语义认知对比分析」．中图海大学硕士学位论文.
梅茹茵（2020）．「“大”と「大」の意味拡張に関する対照研究ー認知言語学のアプローチから」．北方工业大学 硕士论文.
李佳（2014）．「对外汉语方位词教学研究-以‘上、下、左、右’为例」．厦门大学修士論文集，pp. 1-56.
譚亚楠（2017）．「中日动词“上”“下”的对称性与不对称性的分析」．揚州大学『百家论点』，187.
钟勇（2017）．「基于大规模语料库的汉日触压觉形容词认知语义对比研究以“硬”和「かたい」为例」．『日语学习与研究』，华中科技大学外国语学院第 6 期，总 195 号.

コーパス資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）http: //pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ 2024年1月アクセス.

荀恩东・饶高琦・肖晓悦・臧娇娇「大数据背景下 BCC 语料库的研制」『语料库语言学』，pp. 93-118，大数据与语言教育研究所 http: //bcc.blcu.edu.cn/ 2024年1月アクセス.

辞書

呂叔湘（2002）．『現代漢語八百詞（第 5 巻）』．遼寧教育出版社，356-358.
森山新（2012）．『日本語多義語学習辞典（動詞編）』.アルク出版社，pp. 17-23.